

川柳塔

創刊大正十三年三月
通卷八六二号



白川協加盟

No. 862

三月号

川柳塔創刊75周年 記念川柳大会

と き 平成11年3月20日(土) 午前10時開場
と ころ ホテルアウィーナ大阪(なにわ会館) 4階 金剛
大阪市天王寺区石ヶ辻町19-12 電06(6772)1441
(地下鉄谷町9丁目・近鉄上本町下車)

出句締切 正午(各題2句・欠席投句拝辞)

開 会 午後1時 披 講 午後2時

あいさつ 川柳塔社主幹 橋 高 薫 風

祝 辞 (社)全日本川柳協会会長 仲 川 たけし 氏

おはなし 作 家 織 田 正 吉 氏

兼 題	「 蕾 」	八 木 千 代 選
	「 砂 」	久 保 正 剣 選
	「 竹 」	小 島 蘭 幸 選
	「 喜 」	小松原 爽 介 選
	「 港 」	藤 本 静 港 子 選
	「 役 」	磯 野 い さ む 選
	「 高 」	(事前投句) 橋 高 薫 風 選

閉 会 午後4時予定

会 費 2000円(当日いただきます)

句集『師弟500句(路郎・薫風)』呈

<懇親宴> 8000円(会席料理)

午後5時-7時半 アウィーナ大阪

<宿 泊> 8000円(朝食付) アウィーナ大阪

<翌日観光> 4500円(昼食付)

大阪城梅林-法善寺横丁・道頓堀周辺の川柳句碑めぐり
-南港-住吉大社。4時終了予定。

◎事前投句及び懇親宴・宿泊・翌日観光の申込みは締切り
ましたが、大会には同人・誌友・一般を問わず一人でも
多くの方々の御出席をお待ち申し上げます。

主 催 川 柳 塔 社
後 援 (社)全日本川柳協会

パーティー

橘高 薫風

パーティーといってもささやかなのから豪華なものまでさまざまだが、今年になってからはや五つのパーティーに出た。来る二十日には川柳塔の七十五周年記念大会があり、その後はんの内輪でのパーティーになろうが、和やかでくつろいだ雰囲気にしたと願っている。

一月中に出たのは先ず九日、香川県の三本松ロイヤルホテルでの同人木村晃氏の叙勲祝賀の会であった。近隣の名士の顔が揃って豪華だったが、私は雪に弱い新幹線の影響で遅れて駆けつけ、亡き西尾葉前主幹や川柳塔同人の人達の祝意も込めて貧しい祝辞を申し上げた。

ふあうすと同人の島田治大内町議会議長の隣席で種々のお世話をお掛けした。

二十二日は黒川紫香、奥田みつ子句集出版の小宴で、改まったものではなく、

花束だけが目立って大きいお祝いだった。

二十四日は時実新子全句集出版のお祝いの会。神戸ハーバーランドのホテルニューオータニに二百四十名が参集した。

呼び掛け人の私は板尾岳人さんと出たが、新子さんらしくきっぱりとしているながら温かいムードに溢れていた。

新子さんは参会者二百四十名への記念の色紙にすべて異なる句を書いたという。まるで大字典のような厚さの句集は鮮やかな朱色の装いで袋に入っていた。

昭和三十八年に発刊の句集「新子」はブルーであった。新子さんの色は赤やで、胭脂がええ、と私は進言していたが、

冬生まれこれがいちのちの青である

と当時の句にある通り、私には意外の色で登場した。それが今回 卑弥呼の出現のように燦然と現れたのだ。まさに

あかあかや あかあかあかや

あかあかや

である。新子さんは三十五年後の今日の日を見越して、この色を取っておいたかと思ったりしたのである。

司会の道上洋三氏の質問に答えて、

「新子さんの川柳出発の頃の句を拝見して、幻の名馬とよみのみると勝手に呼ん

でいたが、今では幻ではなく、日本の川柳界に存在感のある、ときのみのるになられた。体をいとわずお互い長生きしましょ、と帰るまでに言いたかったです。」と私は発言した。

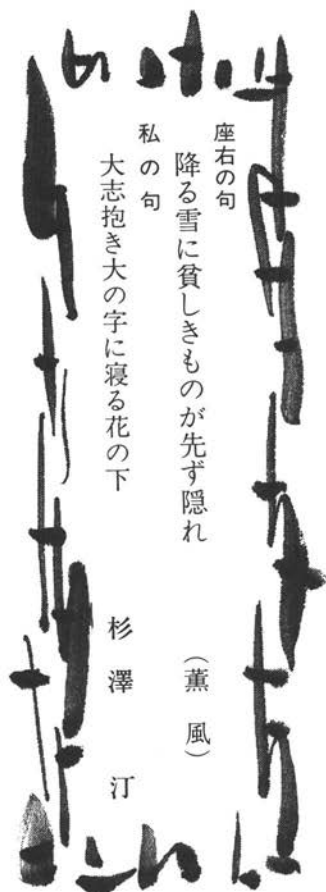
田辺聖子先生の解説のある一万二千句以上の集大成は迫力をもって迫ってくる。

二十八日は「オール川柳」の葉文館出版の主催するトークの会で、織田正吉VS坪内稔典両先生の対談が三井アーバンホテル大阪ベイタワーで行われた。

語り口もジェスチャーも静と動の対照的で、内容も領けること多く、大いに勉強になった。柳人はこういう会に努めて出席すべきだと思う。

七十五周年の大会でお話をして下さる織田正吉先生の横で乾杯をして、パーティー早々に本社委員会の会場へ走った。

二十九日は「上方芸能」誌の創刊三十年記念、菊池寛賞授賞の祝賀パーティー、ここでも織田正吉先生、直原玉青先生とご一緒した。これもホテルニューオータニ大阪を埋め尽くした参会者の中で、木津川計先生ご夫妻に心からお祝いを申し上げた。すべて川柳に繋がるご縁を頂いているのである。



座右の句

降る雪に貧しきものが先ず隠れ

(薫風)

私の句

大志抱き大の字に寝る花の下

杉澤 汀

川柳塔 三月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 パーティー	橋高薫風	(1)
ですから私は孫弟子	八木千代	(2)
川柳塔(同人吟)	橋高薫風	(4)
佳句感想	橋高薫風	(51)
自選集		
大空のこころ (98)	橋高薫風	(55)
川柳の群像 山本芳伸	東野大八	(56)
俳風柳多留二四篇研究 3	河内天笑選	(58)
水煙抄	安藤寿美子	(62)
秀句鑑賞 同人吟	岩本笑子	(60)
水煙抄		(87)

ですから私は孫弟子

八木千代



「飲んでほしやめても欲しい酒をつぎ」

霞乃先生が、そう詠ますにはいられなかった路郎先生は昭和四十年、七月の夜、

「雲の峯という手もありさらばさうわです」この辞世を残されて帰らぬ人となられました。

「法名を「柳粹院釈路郎」と申されます。

その直後に、私は年来の友人、林瑞枝さんと塔の同人となりましたから、路郎先生に直接お目にかかったこともお声を聞いたことも、全然無いのです。

それなのに路郎先生の作品を読むたび毎に肩甲骨あたりから震うのは路郎作品の烈しい気迫と情熱のせいでしょうか。

路郎先生がいつくしました薫風主幹から、いっばい路郎師の思い出を聞かせて頂いたのですが、それは話さずにはいられないという口調で、しみじみと繰り返されたことでした。そのとき、耳は柔らかく熱くなって、一言も、一句も聞き逃すまいとするうちにどんどん、

渺湖抄

茴香の花

「それから」

一路集「雛」

「近い」

初歩教室「さめる」

少年の諷詠

■句集紹介『地球の塵』

二月本社句会

各地柳壇（佳句地十選／川崎ひかり）

三月各地句会案内

柳界展望

この一句

■編集後記

八木千代選 …… (84)

西出楓楽選 …… (88)

清水潮華選 …… (90)

松本よしえ選 …… (90)

嵯峨根保子選 …… (91)

吐田公一 …… (92)

板尾岳人 …… (94)

川島諷云児 …… (95)

森田熊生 …… (117)

みつ子・金太 …… (118)

庭石にすえると見える裏表

私の句

仲間なら一緒に泳ごう水すまし

佐野木 みえ

(町 紅)

路郎先生の世界に入りこみ追体験と言うのでしようか、同じ角度で同じ場所にいるような不思議な感動に浸っていました。

行先はどうあろうとも火の如し

君見たまえ蒔穰草が伸びてゐる

二階を降りてどこへ行く身ぞ

もうもつ路郎先生に教えを受けているのと同じと自分勝手に思うようになりました。

子よ妻よばらばらになれば浄土なり

その日暮しも軒に雀がこぼるよ

大阪へ行けば、心齋橋の生々庵先生の医院に置かれた川柳塔の発行所に、のこのこ邪魔しました。当時の編集、不二田一三夫さん、小谷葉子さんのご案内でした。

高杉鬼遊さんは「編集室を見とくないか。よっしゃ」と八尾にある葉先生の大きな製菓工場に連れて行ってくださいました。

阿倍野の本社には小出智子さんと役員会に同席したことも。とにかく同志の方々みんな熱くて生き生きしてハングリでした。

家庭の事情で必ず帰る夜行列車のなか米子まで車席で泣いたものです。

烈火の如き叱咤の声はなくても塔の精神は創刊時の不朽洞そのものに違いありません。

夕立は小気味よし君が叱咤も 葭乃

今でもお叱りを受けている感觸はよくあります。不遜にも孫弟子と自称する私の勝手を

路郎先生どうぞお許しください。



橘 高 薫 風 選

青森県 諏訪 柳 々

六十年生きて無様をさらけ出し

この道が終の住みかとなりにつけり

飽食の世に飢饉史を読み漁り

正月や読書三昧寝三昧

大海を知らぬ男はよくはしやぎ

過疎の国 語り部が説く津軽飢饉

堺 市 桑 原 道 夫

立春や阿鼻叫喚の浅蜷汁

観音がばくばく食べるさくらんぼ

結婚を急がぬ烏賊墨入りパスタ

たこ焼きを食べてる人と目が合いぬ

右翼左翼も押入の中に行李

浮草の自在を家鴨突つきけり

和歌山市 川 上 富 湖

わたくしの後ろはきつと徳俵

やわらかい要塞を持つオムライス

おふくろの味を作っている機械

終電車明日がソロリと降りて来る

ワープロの文字に涙の跡は無い

人間に地球身震いしてみせる

和歌山市 楠 見 章 子

気紛れに生きる私の雑記帳

つま先まで生命線が延びそうだ

曇天を知らぬ子供のクレヨン画

原色に冗談がない絵の具皿

男の目わたし輪切りにされてます

巣を懸けてそれなりの顔出来てくる

唐津市 久 保 正 剣

哀しみを知るや知らずや春の雪

一点の機影一線の飛行雲

万民平等そんな思想に惑わされ

遊び玉投げるゆとりはない政治
不景気も毒も繰り越すことはない
時給千円こはウインクするところ

岸和田市 高須賀 金 太

大根の琥珀色して酒うまし

肝臓をなだめる酒を飲んでます
外づらはともかく金は持つてはる

朗らかなニュースが見たいミカン剥く
信号が青ばかりでは生きづらい

政治家に利かせる山葵すつてます

高槻市 川 島 颯云児

頑張ろう八十路の道を白寿まで

平凡に生きてる限り恙無し

酒と聞くだけで鳥肌立つてくる

よい妻を持って一生得をする

年金を月割りにして生きている

不幸だと思った頃が懐かしい

弘前市 高 橋 岳 水

まつろわぬ民の歴史に陽を当てる

ペーソスを一杯つめた終電車

父母眠るこの地に植える沙羅双樹

六十路には六十路の石を積み足さん

朝市のせりテノールもバリトンも

徒食する男の鼻毛よく伸びる

弘前市 福 士 慕 情

寒風を受けて仁王の膝が病む
樵の根に優しく溶ける水の音
露の臺カラツと掲げる妻の春
猫柳プクンプクンと孫の指
万国旗なびく事情は風まかせ
深山に入りて樹の音風の音

枚方市 海老池 洋

言い訳も夫の手口なら分かる

冷蔵庫に僕を預けて妻の旅

禁煙席さながら座る飲む飲まぬ

ひと目すら嫌な戦争写真展

人間に飽いてお酒を供とする

雪女の紅やも知れぬ寒椿

富山市 酒 井 輝

ガンジスの氷河が奥へ去る怖さ

目の覚めぬ眠りだと子は死を思い

仏壇に立てかけて置くクジラ尺

水筒は一口飲んで見せて分け

退社後の深夜パソコンだけ稼ぎ

コーヒーで別れの語彙をかきまぜる

呉 市 横 田 英 詩

菰解けば縮景園にも春が来る

無言の祈りなれど神様には届く

一芸に秀でた積り夜のペン

お粥にも酒にも米の七変化

働きの妻よ茶碗が小さいぞ

老人会お世辞を言わぬ人ばかり

生駒市 麻生 アート

食べること食べたことだけ書く日記

リストラを気にしながらもサボるなり

六畳ひとまで九十九年の春の夢

冬の暗黒わたしは老いた深海魚

投げキッスあの世の妻へ送らんか

あづまはや春の兆しのオーキッド

大阪市 西出 楓 楽

二泊三日旅と思えばビデオです

ちよつと気取って孫に言ってるだつちゅうの

水くさいお方と水っぱい会話

方向音痴西への道も間違える

ウォーキングシューズで六十路踏み出そう

シクラメンに譲るわが家の一等地

島根県 松本文子

元旦というに溜息が出るよ

夜道帰るわたしは強くなりすぎた

りんご剥く津軽の春はまだ遠い

我が部屋の一とりに慣れた花の位置

みかん一粒また一つぶ分けてくれる孫
背のびした分だけにかい水を飲む

香川県 池内 かおり

折り合いのついた所へ熱いお茶

消し忘れた火種が熱を持ちはじめ

新妻の手料理煩つべ落ちる味

福袋買いたい体鍛えねば

味見して味見してたら肥えました

ピカチュウの家来にされた三が日

八尾市 高橋 夕花

一枚の賀状が重き来ぬ人の

新春の予定くるわす暮れの風邪

花の首 私の首も疲れだし

三月の約束できた三姉妹

航空便バリの枯葉が匂いきて

しのぶれど春の兆しがマニキュアに

大阪市 辻川 慶子

内閣がどう变ろうと初日の出

初雪のどこにも迷うものがなし

家計簿に暮れの疲れがまだ残り

簡単に事が運ばぬのもこの世

矢印のない人生の曲り角

約束はなかった事にして別れ

熊本市 永田俊子

尺とり虫律儀に歩幅測つて

花畑あると限らぬ峠越え

枯れてからしがらみ解ける葛蔓

変る世に眼鏡の焦点ちとずらす

叱咤激励忘れた捻子の古時計

熊本県 高野宵草

あたふたと師走の葬に駆けつける

雑踏で消えた財布もストレスも

よく冷える夜中の鉢を入れに起き

母である前に女である若さ

友の訃へ賀状一枚手に残る

熊本県 岩切康子

事始めはしゃいでみせる新年会

苦勞せず蘭の三本立ち育て

雑木に抱かれ廃寺の五輪塔

小鳥来て桃の蕾を膨らます

順次咲く鉢置き替える冬の居間

唐津市 市丸晴翠

煤払い明治の御代の塵も降る

折れそうな心支える遠い峰

埋み火を聴診器から探られる

エアメール スイスの山が呼んでいる

少子化に王子王女の童歌

唐津市 仁部四郎

九分どおり自力で着いた定年日

動かしてみたい男の銀の位置

責任をとる声もある外野席

国捨てするつもりはないが棄権する

代役の弔辞が芸の見せどころ

唐津市 田口虹汀

九十小劫あつと言う間に過ぎました

前世の業でお灸を据えてます

先輩の賀状一句が楽しくて

爪隠す鷹が寝ている松の内

箒目へ利休好みの葉を散らし

唐津市 山門幸夫

長い耳黙つて亀の汗を見る

終章を脱兎の如く走らんか

玄関に下駄消え失せたお正月

旅に発つ窓に松原青い海

松籟が告げるは時化よ恋の浜

唐津市 山門タミ

行間の一言嬉し年賀状

お正月減量の身に餅が増え

だまつてる兎聞く耳持っている

主治医師の笑顔に病すつと消え

ズボン穿く大根足が気にならず

唐津市 山口高明

偏屈で悪うおました親譲り

一二度の失敗ぐらいへこたれぬ

股座で覗く景色も春がすみ

本番を前にいっぺん深呼吸

撤回は出来ぬ男の捨て台詞

北九州市 梅田宣司

診察券三枚持つて生きのびる

清潔なトイレ名所の好感度

電池替えればこんなに動く怠け者

混浴は苦難を越えた顔ばかり

笑顔だが主治医のカルテ油断せず

高知市 北川竹萌

寒雀とびとぶを追ひ鏡川堤

さよならと温う別れる寒の入り

パンの屑貰いいそいそ鳩の餌

味噌をやる形を変えてくるワイン

前向きにこつこつ夫婦八十路越ゆ

高知県 赤川菊野

孝行の美学だんだん死語になる

再開へしばし時計を眠らせる

原色の好きな女で意地っ張り

世紀末闇を抜け出すうさぎとび

改築へまた考える余命表

高知県 小澤幸泉

夢うつつやっぱり息子二十歳です

絵手紙が届く娘の春を愛で

咳ひとつ我が青春の終りかも

辞世の句今日も書いてる生きている

隣席の友逝く春がまだ過ぎぬ

松山市 宮尾みのり

嫁という立場余生にしてくれぬ

サンドイッチのわたしで からしほどの自我

責任がないから出来る小休止

馬鹿は死ななきゃなどと明るい声で言う

お化粧はとても上手で整理下手

松山市 丹下美津子

朗報が飛び込んで来た祝膳

楽天家の妻にリストラ救われる

何時の間にか電話の声も丸うなり

七草つむ亡母の匂いかぐように

ときめきをひとり沈めるワインの朱

今治市 矢野佳雲

裏山という少年の隠れ里

父の下駄やっぱり父が越えられぬ

次つぎに希望くだいて子が育ち

ネクタイを外して車座で祝い

新しい暦酒屋から届き

今治市 越智 一水

人生に恋してよそ見など出来ぬ

花活けて亡母と語るも花のこと

日向ぼこ過去も未来も夢うつつ

世の隅に生きて心の灯は燃やし

老人であるその前に人間だ

今治市 野村 京子

真冬日のコント笑いがでてこない

小豆煮る長い時間や外は雪

時々は所在不明の妻である

規格外そんな男にほれました

いつの日か笑い話になる苦勞

香川県 山地 マツエ

鏡餅供えて古稀の部屋も春

定年の夫へ叛旗温める

こんなにやく問答わかつた顔をして別れ

一人住む老いには老いの年用意

許さねば今許さねば残る悔い

香川県 川崎 ひかり

日本地図チリほどもない我が居場所

熱い血につき上げられる正義感

この指にふれたらきつと火傷する

さよならを重ねて今日にたどり着く

待って待って拍手で迎える初日の出

香川県 成重 放任

代々に受け継ぐ母の生きた味

初雪に鼻水垂らし掘る遺跡

熱の出る話ばかりを持って来る

過保護より大海ほしい熱帯魚

カラオケバー年相応の歌に酔い

香川県 木村 あきら

路地裏に人情たっぷり落ちている

満月も凍てつきそうな北の風

一粒の種に明日の夢あまた

ストレスを溜めてる暇もない多忙

窓際の椅子に西陽が恵まれる

香川県 工藤 吟笑

心まで攪んでくれた手がぬくい

鉦脈をさがし当てたがもう遅い(牛耳)

寒くとも若さで熱い風起こす

短気者眠り薬を嚙んで飲む

温もりに飢えた女が紅を引く

香川県 神保 坊太郎

夕茜雲の向こうにある浄土

五目ずしわが家三代つづく味

仰天の父母おなじ日の葬に遭う

紙ほどの殻が破れぬナルシスト

駆引きに作り笑いも覚えたり

人情の薄さを知って耐える日々
宴会の三昧がうるさい旅の宿
柳井市 弘津柳慶

旅に出て本場の味をしみじみと
物忘れ年だ年だと笑ってる
過去捨てて情熱あわく燃えつきる

宇部市 平田実男

物差しを伸び縮みさす札の束
心なしが勢いがない初日の出
ただ酒へ抑え込まれた腹の虫
考えておきますノーと言えぬから
銀行の尻ぬぐいする札のウツ

広島市 森田文

当たらみんなに分ける宝くじ
ふるさとにいのち溢るる川がある
望郷に獅子舞いの音きこえくる
挨拶も今年は違うふたり連れ
懐かしき一族という朝の夢

竹原市 小島蘭幸

一月一日私の句碑に雪がある
雪見酒父の威厳を深くする
島は天国 兎は子沢山ですね
毒舌も拳固もあたたかい夕日
風へ戦鬨となるバイク

一人娘だうなずくまいと父

うんそうね妻にも軽くあしらわれ

満腹という笑いなりお正月

初夢は一人乗ってた宝船

日記片手に正月のもの思い

竹原市 石原淑子

マイタイム夜明けの遅い今だから

もう少し二人の時間絵ロウソク

ひだまりの猫伴せに目を細め

春ひかり希望の彩にルージュひく

一期一会曇った眼鏡ふいてから

竹原市 森井菁居

君もおとこ僕も男で手を握る

ガーデニングにはまって花の名を憶え

パノラマで撮るか白い雲青い海

海が好きポンポン船の音が好き

亡父がよろこび墓も喜び法事済む

竹原市 古谷節夫

爺ちゃんの好きな娘が来るティートゥム

冬の章どっぷり浸かり街も雪

六合目あたりか日記重くなる

エブリデー正午を知らず犬が居る

次世紀へ贈る言葉を選ぶドラマ

竹原市 三宅 不朽

倉敷市 小野 克枝

親がいるなをのぞめというのです

黒潮に漕ぎだす念い古稀にあり

真つぷたつ白菜別れるのもいいか

寒椿おんなの俗名かもしれぬ

水仙よあこがれのひとあるやなし

広島県 藤 解 静 風

笑む子なし原爆の子の像の前

顔の利く店 一番安い酒がでる

いい思い出はすり減らぬよう偶にする

妻が肝臓くれと言うたらどないする

本心は二重につつんどくものか

岡山市 井 上 柳五郎

よく気付く妻が触れないなにかある

頑張ろう生きよう老いの初電話

絶好調うそぶく鼻が上を向き

落ちぶれた父権悲憤をひそと抱き

ライバルに鼻差で負けた口惜しい日

倉敷市 田 辺 灸 六

繁き計よ人も生きもの寒の入り

この冬をまた越しませう福寿草

天寿まだ予測は出来ず初詣で

何はともあれ息災の屠蘇を酌む

不景気に風邪を引くなよアドバルン

出直しのスタート一番列車着く

成長期孫が頬張る赤りんご

陰口を笑って返す特技持つ

微笑みに疲れ人形目をつむる

病む友へハッピーエンドの漫画本

岡山県 江 口 有一朗

水解け深層海流浮上さす

海底のメタン吹き出す温暖化

年末の安らぎやつと墓参終え

鯛買って黒豆を煮る老い独り

頭の中の未だ芽のでない種揺すり

岡山県 小 林 妻 子

お月様も不況か餅も搗いてない

足痛の話ひそひそ老夫婦

薄皮を一枚剥いだ青りんご

金婚のパネルに似合う絵を捜す

風の噂が浮いたままです屠蘇の味

岡山県 矢 内 寿恵子

ほのぼのと余生を照らす初光

温かい山になれよと木を植える

あの人もこの人も居た焚き火の輪

一月のこよみ期待が重すぎる

成りゆきに任せて神に手を合わす

岡山県 大石 あすなろ

ときめいて今日はわたしの彩で咲く
途中下車昔むかしに逢いに行く
わたくしもわたしの影も骨粗鬆症
筆さばき一氣に落ちる滝の音
ずうずうしい事をきれいな顔が言う

岡山県 福原悦子

母の手の味わいにある握り飯
忘却の傷へ他人が触れたがる
苦い日のかけらが疼く古日記
脇役も主役も通した亡母だった
雪の夜やがて民話の中に居る

岡山県 山本玉恵

雑草で良かった天下泰平で
煮豆コトコトひたすら想う過去未来
ふところの深さにはまり込む情け
鳩尾のあたりで苦言あばれ出す
淋しいと言うてしまえば負けになる

岡山県 二宗吟平

散歩する時間テレビをつい忘れ
町内の代表旗日旗を出し
吟詠会声に赤味ができて来た
これを掛けなさい補聴器買ってくれ
ペン書きで失礼ながら年賀状

岡山県 富坂志重

祖母の背でネンコロリンと孫育つ
幸せな涙も両ほほをつたう
正月の顔にうつせと屠蘇きげん
しあわせが自然にうかぶ頬の色
早々から血まなこ淋しげなう年

松江市 川本 畔

青竹の箸へ背すじが伸びている
やさしさを逃れて旅の海白し
水子地藏みんな素通りしてしまふ
ふるさとの夕日を吞んで旅終る
お互いの傷には触れぬ除夜の鐘

松江市 舟木与根一

通学路狙って子犬捨ててある
ポックリで北叟笑んでる遺影なり
馬齢また一ついただく注連飾る
百歳の合掌 弥陀の如く在り
朝日より夕日を愛でる余生かな

松江市 安食友子

夢にでる亡母微笑のままでいる
かっこ好い外車眺める不相応
無理強いのお世辞はすらすらと出ない
福寿草ほのかな夢を抱いている
切切としてこれからも切手貼る

出雲市 竹 治 ちかし

新米を姓の違つた娘に送る
豊かとは思えぬ人がする募金
百年もない人生を四苦八苦
好きなのもあなた嫌いなのもあなた
黒梓の中で幸せそうな顔

出雲市 小 玉 満 江

当てのない客を待つてるシクラメン
亀に先越され兎の決議文
亀さんよ勝つても自慢しないよね
年老いて形状記憶のシャツを買い
おじいちゃん大事にしようお金持ち

出雲市 富 田 蘭 水

七草の粥に浮かした卵の決意
注連縄が太い手製で福を待つ
寒気団 仕事のように押しよせる
さかまいた怒濤に男の貌をみる
凍りつく大地の下で春動く

出雲市 板 垣 草 丘

飛んでいるうさぎ聞えぬことがある
招待券あげたお方の娘さん
積雪を雨換算でダムが待つ
商品券もらうランクでないらしい
ひとりなり妻はすばらになるだろう

出雲市 久 谷 まこと

老骨のきしみは過去の無理が出る
今ようの子育て祖母の手におえぬ
新暦 幸せの日を先ずさがす
カタカナ語辞典を脇に新聞読む
予定表先ず病院とあんなさん

出雲市 園 山 多賀子

春の椅子前後左右は同じ趣味
会釈するだけでも春の和を醸す
ウインドの春の虚飾も一瞥し
そして春兎の惰眠もお目こぼし
良妻を演じた老斑いとおしむ

出雲市 小 白 金 房 子

招かれて装う農婦の初鏡
健康な素顔鏡と対話する
遠距離を電話で結ぶ新春の声
童心にもどり親子の雪ダルマ
父と子の絆深める武者絵風

出雲市 岸 桂 子

事あれば祈る心になる弱さ
廃線のレールに遠い里がある
もう二度と白には戻れないページ
真似をしてみても届かぬ高い塀
幾つもの面つけ替えて生きている

島根県 榊原秀子

山さわぐこのお天気も今日までか
行商のひとりに多い袋詰め

島根県 小砂白汀

産地直送なくなる頃がいいリンゴ

ポインセチアの濃い紅色に出す元氣

小休止の雪へ洗濯機をまわす

島根県 堀江正朗

ぶつかって目の無いことに気がついた

失明はしても嬉しい日の涙

白杖でいただく米寿夢のよう

窓越しの冬陽 気ままな独り言

歳重ね妻の苦勞も考える

島根県 堀江芳子

恩賜の時計と八十八になりました

酔い少し回り飲め飲め黒田節

川越えて来る除夜 蕎麦の箸止めて

ふんわりと雪 庭石も嬉しそう

老いの掌に握りしめてる願いごと

島根県 伊藤寿美

悪人正機倫盗蓮如さまに帰依

親鸞正忌懷炉を抱いて聞く法話

琥珀の数珠してる和尚の南無阿弥陀

二歳の孫も歌う K iroro を聞く晦日

乗り継いでついで老母の駅に降り

欲しかろにそのままそのままとは無情
もうあかんもうあかんとぼやきながら生きてます
やけくそになったかミサイルぶっ放し

老妻呆けて赤子よりあかご

口惜しいがおとこ九十の台所

島根県 西村早苗

初笑い娘のソバカスがふくらんだ

兎を写すとてもきれいな月を待ち

部屋いっぱい春がころがるころんでる

休肝日男に酒の灯がゆれる

大きい大きい鏡だ小さな眉を引く

島根県 森茂美

初孫をあやす日本一の顔

方言もいれて賑やか祝い唄

カタカナの辞典を横に置いて寝る

干拓にゆれる中海鴨渡る

仕事着の塵を払えば大晦日

鳥取市 植田一京

正月が来てまた夢をたて直す

みんな元氣だ私を置いて駆けてゆく

歩き疲れたところに君が居てくれた

酒とろりゆっくり秘密こぼれだす

また春に燃える枯野のひと眠り

俗人のままで出世はせぬがよい
岩 原 喬 水

鳥取市

鳥取市

美 田 旋 風

好きだけど嫌な男が陰に居る
老化した脳も童話は覚えてる
北風は亡父が吹いてる笛だろう
歳ですネ黒いリボンが忙しい

鳥取市

岸 本 宏 章

鳥取市

福 田 登 美

真っ先に跳ねた兎が的になる
お年玉の千円札が見下され
スキー履く山の子供の昼休み
めでたさが目減りしてゆく誕生日
手を合わすことがだんだん多くなる

鳥取市

岸 本 孝 子

鳥取市

武 田 帆 雀

新しい暦をかけて夢を追う
賽銭に過ぎた願いをしてしまい
どの兎みても可愛い年賀状
マンネリの献立嫁の風入れる
もめぬうちはやばや酒の仕度する

鳥取市

倉 益 一 瑤

鳥取市

坂 田 和 歌 子

人生の午後は明るい色で染め
エプロンに女の美学秘めている
荒波を越えた鱗のいい光
飛び過ぎへ母の涙は遮断機だ
門灯をつけて幸せごっこする

自己破産長者の夢が仇となる
責任をとると軌道に乗れぬ星
正論はきつと未来の地図となる
忘れたいことをときどき夢にみる
いい子のため兎が月で餅をつく
黒い椀朱の温もりを内に抱く
温かい献立みんなよくしゃべる
老いながらバレンタインの義理も知る
水たまり亡母の顔ありそつと除け
躓いてやつと気付いた生かじり

雁首を揃えてピエロ冬の陣

鳥取市

武 田 帆 雀

不細工な飾りを縋うて神を呼ぶ
息子ヤーイ頑固親爺が雪をかく
相撲なら座布団が舞う村議会
ドドンパを唄い六十路の一人旅

元旦に香典袋補充する

鳥取市

坂 田 和 歌 子

胸元にお湯を絡めて除夜の鐘
遠まきに見ている友の強い剣
生っぽい男の裏に鬼をみる
羽交い締めされた夢みる風邪の乱

鳥取市 両川 洋々

七人の敵の一人が色っぽい
大器ではないが馬鹿でもないらしい
赤着ても女の匂はとうに過ぎ
不景氣を見てきた札も疲れ果て
離農する話へ墓が目をさます

鳥取市 富山 檳榔樹

深雪に菰を被って寒牡丹
糠床の味の深さはおばあさん
初孫の笑顔もうて祝酒
豆撒いて福は内だと念を押す
喝采のない記念日で老いを知る

鳥取市 春木 圭一郎

夫婦っていいな幸せ倍加する
弱いとこ補い合つてああ夫婦
お隣の夫婦氣になる時がある
スランプも妻の笑顔に救われる
本年も無休の妻よありがとう

鳥取市 徳田 ひろこ

音高く青い思想が突つ走る
継ぎ木した枝が花芽を抱いている
辛抱を交換キーに弾かれる
ハンカチの蝶はチャンスを待っている
睨めっこいつも私が音をあげる

米子市 田中 亜弥

春の野に兎と亀が手をつなぐ
ありがたい宝が体中にある
脱皮して急に大人の顔でいる
塩ぬきを塩でするとは面白い
回り回つて私とあなた縁つづき

米子市 林 瑞枝

連れ合いと今も実家で祭り酒
木枯らしの壁の向こうにいる天使
わが花野占うように月が出る
愛燦々雪を被つて咲く椿
中流の暮らし屈託ない帽子

米子市 政岡 日枝子

眼を洗う きれいなものを見た後に
オカリナを聞かそう穢れなき耳に
ごった煮の仲間優しい言葉持つ
漬物石が多弁になつてくる春よ
鏡まで私を責めるよう光る

米子市 石垣 花子

妻に勝てば大きな大きな揺り返し
結婚難語る青年ヒゲが伸び
ワープロの返事も祖父は筆を持ち
聞かぬ振りきこえぬ振りで三世代
女だつてまさかになれば背負い投げ

米子市 永井三津子

もく黙と働く母に紅を買う
子の悩み恐ろしいほど見抜く母
プレセント亡父にもそつと子等供え
蹟いて生きる辛さの靴磨く
心の目磨いて私強くする

米子市 木村春枝

どうしても手からこぼれぬ砂一つ
若竹のしなやかさ借りとんでみる
よろこびを満たす風呂水いっぱい
饒舌に良心までも黙り込む
いさかいも一緒に揺れてバスの中

米子市 中井ゆき

うす茶ありモカあり仏間ティールーム
竹林に夜通し竹の子守唄
器には器の想いあるだろう
よろこびは百花の春を待てること
風車回す私は芯になる

米子市 茂理高代

雪が降るどんな気持ちで逝つたやら
母の愛墓標の雪は溶かすから
寒かろう灯籠の灯で温まれ
雪が降るただそれだけで泣けてくる
後ろ髪ひかれる思い墓地去る

米子市 木村富美子

北からの風にもらっている強さ
しみじみと娘のありがたし粥の味
吉日を選んで猫の子をもらう
火をくぐり母が土戸を締めた蔵
塩断ちの母が仏のように見え

米子市 野坂なみ

初咲きの梅の姿勢に学ぶこと
キツツキが西行庵の花便り
友達は宝みんなの影にいる
胸の絵に亡母の背中と風ぐるま
水子尊おん手に一つ風車

米子市 鷺見正子

七福神のそれぞれにあるファンクラブ
肩の荷を降ろすと雪も暖かい
桃色のクレヨンが待つ花便り
法華経が聞こえる森の梢から
風の子とちがうよ母さんの子だよ

米子市 青戸田鶴

膨らんだ雑木林に春がある
私もまわりも古いものばかり
嫁姑仲よく露天風呂の中
冬の夜長 母の愛唱歌をうたう
姉の傘の下で流れた日々想う

米子市 澤田千春

裸木の中の葛藤春近し

春の土よろこびの芽が顔を出す

遠い日の雨は素足で歩かせた

花に変身取り戻そうよい笑い笑顔

眼裏に故郷の明かりが消えやらぬ

倉吉市 松本よしえ

おさがりのオルガン鳴らぬキーがある

旅に出る話が妻を若くする

赤ちゃんを家族写真のまん中に

よちよちにリボンの付いた靴を買う

コソ泥が花泥棒に見付かった

倉吉市 野口節子

引き分けて二つ並んだふくれ面

アリバイも嘘も崩れる妻の勘

ひらひらとよくぞ達者な二枚舌

舌先三寸ころつと岩を動かした

職安に人があふれる寒々と

倉吉市 淡路ゆり子

動かねば五体が鈍る老いの身に

身の程を知って我慢の兎小屋

雪降る朝 気合を入れて飛び起きる

遅刻した言い訳などは話せない

雪掻きが辛いと老母の雪便り

倉吉市 山中康子

赤ちゃんの笑顔にも似て万年青の実

貧富の差見せぬ辺りは雪景色

固執から勇氣のとびら開こうよ

冬休み終えて明日から正念場

列島をさんさん泣かす寒気団

鳥取県 谷口次男

平成の兎はワニの皮をむく

雪洞の奥には春が棲んでいる

リストラに腹を据えての雪見酒

脳味噌の遅刻する癖遺伝かな

爺さんが寒さこらえて筵編む

鳥取県 西原艶子

母恋し恋しと開く古日記

直せない癖だと思ふ女好き

皇后さまの銀髪とても美しい

熱燭とおでんへ話よく弾み

しっかりと抱いて送りたかった亡母

鳥取県 石谷美恵子

半分は聞えて欲しいひとり言

スクラムを組んだら雑魚も侮れぬ

冷めかけた愛も今なら繕える

めどついた金策素うどんがうまい

不景気へ犬掻きで浮き堪えている

鳥取県

田村 きみ子

少し赤着ようか悩み消せるかも
惚ける暇はないのに少しもの忘れ
雪マークばかりで豆もよく煮える
あるがまま生きてか桜ふと思う
嬉しいと余分に笑う二十の娘

鳥取県

土橋 睦子

合掌の手からこぼれる愚痴ひとつ
横に来て勇気を出せという女
自分史は包み隠さず書いておく
エプロンを脱ぐ定年は決めてない
網タイツはいた兔に恋をする

鳥取県

土橋 螢

盃を乾して残りの夢いくつ
音楽がうまれる風とこどもたち
音沙汰を待つ門前の雪を掻く
夢の実が跳ねて女のとこころへ
善を急げと太陽が顔を出す

鳥取県

土橋 はるお

猫も杓子も携帯電話かけている
行列の尻っぱになって初詣で
玉の汗かいた大きなにぎり飯
大筆のような眉毛のおじいさん
少し飲み過ぎの空びんを片付ける

鳥取県

岩崎 みさ江

兎跳びまだ出来るのようふふのふ
透明な顔して夫が通り過ぎ
なにごともないしあわせをふと忘れ
どか雪に小躍りをした日は昔
穢れを隠す神さまの雪化粧

鳥取県

新家 完司

バスケット工場が匂う朝の窓
晴れた日はあの世が見える物干し場
大霞多難な年の締め括り
よるべなき人等集いて初詣で
いっぴきの冬の蠅なり我もまた

鳥取県

黒田 くに子

あすの事どうあれ今日の日記書く
吹雪く日もじつと耐えてる北の窓
炭俵この頃光りだしてきた
ひざ枕させた昔がほろ苦い
満点でないから魅力あるのです

鳥取県

津村 八重子

いい仲間そろい楽しい初春に
羽子板に亡母が残した絵がうごく
茶柱にはずむ母さんいそいそと
母さんの献立四季の脈が打つ
わが町のおそばの味にあこがれる

鳥取県 西川 和子

早とちりばかり兎がしゃしゃり出る
先走る兎に亀のマイペース
向う岸へ兎の耳が立って来る
メヌエル氏病怖くて兎早寝する
飛んでいる七十二歳になる兎

鳥取県 乾 隆風

ロイヤルホテルに素泊りをしてみる
温泉があれば木賃宿に限る
脳みその散歩と言うて居酒屋へ
聴診器うら腹さぐるようにみる
理屈をこねると そば道場が笑う

鳥取県 原 みさを

よく跳ねるように空気を入れかえる
幸せを刻んだ皺がよく笑う
新年が三割引きで明けました
片減りの下駄引きずって生きている
喪中欠礼すると冬の陽が落ちる

鳥取県 林 露杖

一年の計が立たないお元日
雪被ぎ蘭が花芽を抱いている
古里の香り大根煮る匂い
雪掻きに何年ぶりのサングラス
世紀末オウム汚職に毒カレー

鳥取県 さえき やえ

雪もよいご苦労様と鍬洗う
ボケるなと川柳塔がはなれない
赤を着ても沙知代さんにはなれませぬ
寒小菊美人でとても謙虚です
ウワサ売る老人会に入らない

鳥取県 国 森 武子

初いけの側に兎もそつとそえ
欲しいもの知ってるような娘の歳暮
難民を作る政治家目をさませ
よい母の心がよい孫育てます
これだけは代理のきかぬあの世ゆき

鳥取県 石 尾 かつ乃

老骨をねぎらう新春のお屠蘇
初夢に白い句箋が追ってくる
しきたりの流れを変えて見たい日も
片棒を担ぐ器が横に居る
残業の灯は懸命に生きている

鳥取県 鈴 木 公 弘

遊ぶのも芸の肥やしという美学
生きていた礼に初もうでをしよう
鶴が舞う元日だけのかわら版
ありがとう二枚も賀状くれたひと
葦を見つめて等身大に生き抜かん

鳥取県 近藤 春恵

これからも生きて来た道曲げられぬ
慕われる姑になりたい初春迎え
お茶漬けと梅干しだけの日もあった
世渡りが上手で逃げる技も長け
花道はなくても主婦の座を守る

鳥取県 上田 俊路

家族みな個室をもつて他人めき
はやばやと来ていつまでも帰らない
縁起かつぎ白兎神社へ初詣で
銭太鼓までも不況の音たてる
老人力高めて生きる灯を点す

鳥取県 羽津川 公乃

浮動票ここは転勤族の町
白髪染め止めて浦島花子さん
寝るほど無いが咳鼻わずらわし
ネギ白菜大根も掘る雪起こし
白銀の魔手これでもかこれでもか

鳥取県 塔 寛子

毎日毎日途方に暮れた年も逝く
黙っておれば黙って白魔降りつもる
風花は途惑いながら水に溶け
やり場ない怒り知らぐ孫の所作
さて卯年ハナマル貰うジャンプしよ

鳥取県 太田 幸枝

千羽鶴届いてからの食進む
難儀した事も笑いのネタとなる
門構えだけは立派で独り住む
幸せな顔だけ揃うクラス会
いつまでも学ぶ姿勢に背すじのび

鳥取県 幸家 單車

信じると鬼も仏に見えて来る
やり過ぎた親切仇になって来る
お上手な言葉信じて泥かぶる
企みがあつて親切顔で来る
地球からぐんぐん魔の手伸びて居る

鳥取県 村上 信子

崖に建つ家には秘密ありそうな
縄跳びの子等春風に浮いてみえ
建て増しの部屋で死ぬると母が言う
うば桜調子はずれの唄うたう
里帰りした娘の仕草他人めき

神戸市 中村 ゆきを

新年や戦の知らぬ夕空に
古希の春青春たらん雑煮箸
空なりと誰が言うたか三が日
冬の午後微笑仏に逢いに行く
雪になりましたと階下から女将

神戸市 山口 美穂

九十八 大往生の師へありがとう

欲しいものだんだん減ってふとさみし

わが家のウィーン ニューイヤークンサート目を閉じて

不況には見えない顔した人の波

寒うても一途に散歩を犬せがむ

神戸市 池田 善守

見る人の思いを映す初日の出

亡岳父の喪に賀状もなくて老い二人

人もまた光に群れるルミナリエ

不本意な同意迫られ印逆さ

本棚も仕事から趣味へ模様変え

芦屋市 黒田 能子

心地よい椅子はわたしの貴賓席

豊かさに慣れパン一片の重み

モノクロにわたしのあの日あの時が

イミテーション分かって買うもまた楽し

似ていないあなたと何故かうまが合う

尼崎市 春城 年代

煮こごりの好きな夫と意気が合う

時代の児 曾孫少うし利発すぎ

十日戎も風邪にかまけてやり過こす

昔語りがわびしいたつて先がない

未来の絵まだ画けそうな心地して

尼崎市 春城 武庫坊

人情の風が途切れた暮れの街

仕来たりを省き二人で新春迎え

花を並べてごきげんの妻新春あかり

七桁で住所がわかる怖ろしさ

思案決まらず動く歩道に乗っている

尼崎市 長浜 澄子

切れている雀 対角線にいる

ひとり住む自信がついた刺りの青

生き方のスタンス変えた髪の色

孤独とや音なくポトリ寒椿

充たされぬ心に響くノクターン

尼崎市 的場 十四郎

マドンナの笑みにおぼれたお殿さま

耐えること悟りて大人になって行く

無力さを知ってひたすら坂のぼる

人情の深さ厚さを知る民話

裏切りのナイフやっぱり光らない

伊丹市 山崎 君子

捨てきれぬ土鍋を出して七日粥

亡母の雛 顔ふつくと良き時代

流しびないさり灯あわい海に出る

はぐれ鳥おまえはいくつわたしは喜の字

花だけはわたしのボケに気づいてる

西宮市 亀岡哲子

齒磨きをしながら日の出 子の新居
ハイビジョン宇宙は遠いものならず
銀杏の落ちて正月暖かし
寂しさの嘘へ優しい嘘返る
すぐ泣ける役者やっぱり役者だな

西宮市 井上松煙

不景氣を忘れたように初売日
震災後さらに繁昌えべっさん
何時までも今の暮しを神だのみ
我が余生猪口一杯でいい気分
似たような家が並んだ氣安さよ

西宮市 牧淵富喜子

尋ねると少し間のあく姑の年
誤魔化しの氣持ちはないか草書がき
一息をつけば七草 爪を切る
キャスターを付けてあります地震以後
四年目の家をしみじみ眺めおり

西宮市 林はつ絵

無為無策これでもいいんだ熟柿っぺ
笑い出して鬼にもどれぬ鬼の面
屋根下の恩を思ったことがない
目立たない人でありたく化粧する
働けたお陰 氣ままな余白です

西宮市 門谷たず子

留学の娘の機の翼光りおり
友の忌や胸の木枯し吹き止まず
妻のソロばかりが響く終章よ
爛ざまし夫の老いを淋しがり
白髪之父の寝がさが低うなり

西宮市 西口いわゑ

嘘というかけがえのない情のあり
いい話わたしの上を走り抜け
辛口の酒と心が通じ合う
誉めるだけほめてしっかり嫉まれ
一瞬の花火のような生もよし

西宮市 奥田みつ子

寒牡丹の白さにこころ透き通る
ジーンズの破れ頼もしボランティア
指櫛の髪つやつやと古稀元氣
嘘半分その半分が魅惑的
胴回りすっきりさせて春の服

西宮市 秋元てる

傘寿なお昨日と同じ飯が炊け
卯の年だ昼寝のメーンなど如何
振り向かぬ鬼は嫌いよ赤も青も
すぐ詫びて軽く見られる国になり
悪友を売ってる店を知らないか

西宮市 山本 義子

萎える足 気合を入れて菜の花忌
他人さまを傷つけぬよう老いの坂
早く逝った父母姉の分も生く
世渡りと金の有り無し別です
啖呵切るテレビドラマに共感し

西宮市 緒方 美津子

置き床の梅一輪に空気澄み
呼びすてにされてもみたい亡父母の声
無風とは哀しき事よ渡り鳥
順風に更に追い風ムフフフ
兎年初孫生れ実南天

西宮市 刈田 泰司

息抜きをお盆がさせた御堂筋
マンネリは嫌い苦勞を買ってでも
煮ころがしがやさしい眉を取り戻す
芋畑にやがては変るゴルフ場
どの顔にも歳月がある神戸駅

宝塚市 嵯峨根 保子

ルミナリエ神戸は洒落たことをする
五年着て違いがわかるからミラノ
真剣になるとテレビが消えている
売る女もブランドと言う顔で立ち
つき合えば持病はものの数でなく

宝塚市 吉田 笑女

七草も過ぎて寒風吹きすさび
ライバルへ一矢同点ホームラン
両者共勝てよと祈る親心
手に汗をにぎって祈る応援席
いいチャンス味方は神に見はなされ

加古川市 吐田 公一

熱心に聞いて何にもしてくれず
百年の大所高所で見ぬ政治
高齢になって判った亡父のエゴ
娘に逢いに妻は渡米にいそいそと
ストレスが溜まる女のひとりごと

相生市 中塚 礎石

花の首にくしみもなく母が折る
売れ残った花の命へ目もくれず
陽の匂う布団で夢に花咲かす
独り居の写経へ友のベルが鳴る
草の実の運び屋となる万歩計

姫路市 古川 奮水

お身拭い済んで都は新春の風
玉すだれ芽出度い形して見せる
晴れの日のたもとは母が整える
油さす時計も部品欠けてくる
斬られ役 主役に勝る技を持つ

大阪市 井上白峰

次世紀を視野に大きな夢を抱く
言い訳がすぎて誤解を招いてる
ためらえば益々揺れる心の灯
ここだけの話がはずむ美容室
フルムーン遠い昔が甦る

大阪市 板東倫子

ルミナリエ不況の街も聖し夜
三度目は貸ししぶりする実家の母
ささやかなボランテニアです席譲る
日銀の捜査が元日のトップ記事
母の味そのまま七草粥祝う

大阪市 清水利武

不信心 正月だけの神詣り
鏡破り派手なしぶきでお目出度う
ひかり号予約している金婚さん
黒星を重ね春場所ちゃんこ番
桜咲く春が来ましたもう其処に

大阪市 川原章久

明けて足せば百五十歳夫婦膳
暮らそうと言わず一緒に子と食事
長唄と第九味わう耳がある
今奈落ここからの道より坂
定期代カット自転車駅に満ち

大阪市 神夏磯典子

命令を受けて動くはいと易し
しばらくは二人っきりでおママゴト
絵の中に入ってしまったサ克蘭ボ
夫婦茶碗もろて替えるに躊躇する
進歩はないが咀嚼をして生きる

大阪市 寺井東雲

寝ておった今年起こそう福の神
水落ちて真っ青になる滝の壺
髪を梳き親と一緒にバーコード
せせらぎの音聞きながら朝のお湯
おしゃれた我が娘の見分けできなくて

大阪市 渡部さと美

振りたいにわたしのしっぱ短すぎ
孫帰りゆつくり老いの年始客
妻少し飲めると羨ましがられ
酒の量減って兄弟歳をしり
キラキラと夜の連絡船にひとり

大阪市 大塚節子

もめごとに浮世の義理で仲間入り
いっちゃおかみ又他人ごとで走ってる
ラッシュ時の幸せ一つ空き座席
カルチャーのスター手よりも口が先
内裏様とトリオでかこむ雛の膳

大阪市 津守柳伸

格安の二月ウロウロ旅カバン

耳鳴りが止まぬ不況の申告期

カニづくしルーツは聞かぬことにする

シェフの名が魅力クルーズバイキング

だっちゅうの何が悪いの赤い服

大阪市 河井庸佑

勝算は度外視後へ退けぬ意地

立場替えついぞ同情してしまふ

鳥雲に目を遣り旅の無事祈る

春よ来い祖母待ち兼ねている彼岸

ホワイトデーそつと妻にも知恵を借り

大阪市 津村志華子

年輪を重ねた父の太い眉

綿着縫う母の温みも含ませて

うれしさは生れる孫と同じ千支

経読んで亡夫と初春差し向い

一服の茶席に初春が匂いたち

大阪市 小林周信

自動シャッター押して走って隅ばかり

リアリズム飢餓も切り取るカメラアイ

写真集どうやら女優下り坂

剣幕も黙って聞かれ小火になる

除幕式慎ましく佇つ未亡人

大阪市 川内叭笑

御亭主は湯タンポ代わりつとめます

福袋欲と道連れ五ツ六ツ

一年の埃も落とせず年は明け

献金の多い方から救います

他人には気楽に言えるガンバレと

大阪市 宮本欣史子

不景気に威嚇されても怯まない

諦めに慣れて血液滾らない

有無を言わせぬ条件飲んで二次の職

階段のいっばい歩に罪を置く

泣くまいぞ深い階段登り切る

大阪市 杉澤汀

山茶花の紅鮮やかに恋ひそか

一寸先の闇を手探る永田町

経済は生きものですと評論家

関東煮うむを言わせぬコップ酒

今日こそは鯛よそこのけ鯛さま

大阪市 小糸昭子

風が吹きカルチャーショック受けました

三休橋たこ焼つき好きやねん

裏道は我が物顔の猫の道

歯車は欠けても直ぐに補充され

白い砂利踏んで心を軽くする

大阪市 岡 本 久 峰

お一日生國魂さんに親子連れ
昔ながらに拍子木叩き火の用心
沖繩戦記友参謀の列にあり
青息吐息年の瀬越した小商い
年金に至福二人の旅好み

大阪市 玉 置 英 子

一人勝ちしているドルに今ユーロ
絶望の後に悟りのようなもの
わたくしに空いっぱい星がある
あそびます湯槽に揺れる花びらと
これもよし静か正月二人きり

大阪市 川 端 一 歩

病む友の賀状ひと言あたたかい
妻が描く兎は猫の顔となり
正論の手が震えてる青い空
耳そうじしつかりしてる顔の艶
易しいと言われた本に歯が立たず

大阪市 松 尾 柳 右 子

やつと座すそばへ熟年立つ市バス
洗濯も隔日になる夫婦だけ
良い話たんとつめてる寺帰り
宝石箱あける顔して訪問す
そう言えばせせらぐ小川どこに有る

大阪市 北 勝 美

病院から妻を引き取りお正月
妻抱えお風呂につかる身の軽さ
八十路過ぎ賀状減りゆく佗びしさよ
年賀状一つひとつに顔がある
目出たさは日和が続く松の内

大阪市 清 水 絹 子

ブランドの米で長生きするつもり
飾らない亡夫ロンドンだけ遺し
初日の出なにわの空へおらが城
光琳に負けぬと明日へ咲かす梅
辰年へはや指切りの九十五

大阪市 田 中 節 子

枯葉舞う冬の暮色は鉛色
からつぽの香水瓶に君が居る
ひとひらの衿足にきたばたん雪
風花と楽しく帰る下校の子
不況の卯年油断するまい亀さんに

大阪市 町 田 達 子

遠い絵になる一家揃った参詣も
三世代薄味会話に慣れてくる
程ほどの良さとは何と難しい
都市砂漠の夜景展望台から観てる
神戸の辺へ仮設に想い馳す新年

大阪市 本間 満津子

十三回忌仏そのまま齡召さず
一步一步だいじ明るく一里塚

補聴器外しひとりの世界もっている

反駁は本気で聴いている証拠

不況言い過ぎ不安がタンス貯金さす

大阪市 中田 あい子

お年玉出るまでがまんしてる子等

大晦日銭湯出れば十三夜

なるようになるまで待てぬ年の暮れ

たかが女されど女がすくう足

白むくで来た嫁さんがやんちゃくれ

堺市 黒田 真砂

何もしてやれぬ酸素の弟見つめ(弟入院 二句)

弟病みて看とる窓辺のシクラメン

亡母の夢見た夜の涙花菜漬

どの道を通つても逢う春の風

まだ夢を追いかけている兎年

堺市 志田 千代

アンコールないまま母の幕おりる

亡母さんの一葉ばりの古写真

すり切れた久留米紉の母の幕

そっくりの亡母を嫌ったところがある

年賀状一枚もなく母は亡い

堺市 山本 半銭

卯の年を膝なでながら跳ねてみる
びんずるの膝なでている旅なかば

小さい手に福笹持たす宵えびす

人伝に訃報がとどき梅香る

煩惱の数え切れない鐘の音

堺市 柿花 紀美女

精一杯ふしめ節目をつけて生き

八十年過ぎてまだ夢追っている

怖々に鏡を覗く八十路

一日が無事過ぎ夕日美しい

師の健在今年も賀状つつがなし

和泉市 岡井 やすお

マジックのように国債金を出し

悪平等そりやいかんわナ消費税

競り合いになると力を出すキムチ

五輪五輪何はさて置き五輪かな

サインスパイ強盗をしたわけじやなし

和泉市 西岡 洛醉

妥協する骨ポキポキと春近く

まだ枯れぬ背筋支える妻が居る

燃えるもの残して兎年が明け

耳鳴りの寒さへ老いの身を庇い

追伸の孫の事にも少し触れ

岸和田市 寺田 甚一

もう金婚 妻と静かに酒を酌む

古くても喜怒哀楽がこもる家

御神火酒旅には土地の酒を飲み

あしたばに旅の思い出たぐつて

肩の荷を降ろして張りもまた消える

岸和田市 長谷川 呂万

抜け出せぬ兎小屋なら花植えて

幕切れは畳の上と決めてある

親子孫 茶の間賑わう子の帰省

片仮名の言葉に困る老い二人

孫避けて知恵の輪試す老い二人

岸和田市 原 さよ子

獣医から犬の名もある年賀状

あどけない言葉がはつと胸をつく

酔えばすぐ甘え癖でるおとうさん

呑み込んで良かった愚痴の後半分

自転車で大根くばる年の暮れ

岸和田市 岩佐 ダン吉

面影は消えた苦勞をしたらしい

やるだけはやった高い天睨む

隅っこでわさびを効かすお母さん

一喝が薬になったありがとう

冬の風私に当てる鞭だらう

岸和田市 藪野 けい子

ブランド名出して着ている宣伝マン

方言もよし新年の初春の酒

若い人ラメ入り化粧似合わない

恋のイエスイヤリングだけ知っている

銀行口座 声紋で出来るとか

岸和田市 芳地 狸村

いきいきと初日に跳ねるうさぎ歳

み仏の顔がほころぶお身拭い

女子大の環境チェックに孫の供

賽銭で景気占う戎さん

いい年になれよと祈る初詣で

岸和田市 田中 文時

ご飯よりお酒が旨いので困る

納豆を薬と思い食べている

学歴と人格別のものらしい

にっぱちの二月商魂試される

結ばれず起承転々繰り返す

岸和田市 原 苑子

風雪に耐えた真つ赤なりんごです

塾の子を待つてる母の窓あかり

焼芋をホックリ二つに割る至福

老後とはやつとめぐつて来た自由

連絡網ついでの話に花が咲き

岸和田市 古野 ひで

蜚雪の時代へ戻る花吹雪

八尾市 高杉 千歩

一徹の禁煙 春まで続きそう

退屈な日もあってよし春だもの

げんまんを思い出したよチューリップ

住所録消した数より殖えている

八尾市 内海 幸生

陽に誓い夕陽に懺悔今日も嗚呼

雪国で言うてはならぬ雪見酒

妻の風邪 孫頼もしくなる変身

柏手の空しき音や神不在

手の届くところに酒あり妻は留守

八尾市 吉村 一風

福の神来てはくれぬが皆元氣

台所嫁に渡して妻の新春

花に水遣ると怒りも消えてくる

白髪一本言うこと聞かぬピンと立ち

立場替えて見れば許せる事ばかり

八尾市 大内 朝子

早春へポツと華やぐ若づくり

さりげなく花を咲かせている努力

ときどきは口べっぴんで世を渡る

たんぽぽに千代紙着せるひなまつり

北風に向かうとしやんとする気骨

手を休めじつと聞いている除夜の鐘

戦いのすんだグランド愁いあり

決心がついたか嫁くと言うてくれ

水仙を人待ち顔に活けてある

スキップも軽く一年生の夢はずむ

岸和田市 井 齋 一 齋

堂々とブザーを押して来る噂

風向きに逆らう店が裏返る

雪の下川の流れが春を告げ

修身のような祖父母で孫がこず

腹が出たいくらお金を溜めたのか

八尾市 篠原 いつふみ

赤信号じつと待つてゐる街の大

肝心なことは此の頃妻が決め

じいばあの夢も入ったランドセル

街ん中踏みきたいな高い靴

古い二人猫には喋る日向ぼっこ

八尾市 宮 崎 シマ子

米の違いわかる夫でむつかしい

柱時計昔に返す音を出す

人生マラソン折り返しから遠い道

塩っぱい話も姉妹さけられず

祈る手続きに十円玉を投げ

八尾市 宮西弥生

八尾市 神原まさと

二ん月の部屋に重い冬残る

いい風が神戸に吹いてるルミナリエ

明日生きるくらしにそえる朱い色

破れたら捨てる飽食の子を憂う

身のまわり軽く片づけ生き上手

八尾市 村上剛治

幸せなところがうたうありがとう

バスツアー時計を少し進めとく

まぐれだと自信たっぷり言うている

抱きしめてやればこどもはよく育つ

友の計を背を正して聞き終える

八尾市 長谷川春蘭

孫少し憎らし気にて去年今年

忘れぬ事の多きも年忘れ

忘れねばならぬ事抱き年越さん

初夢も老いには泡の如きもの

耳遠く念押して聞く初笑い

八尾市 生嶋ますみ

義母元氣お節の指図ベッドから

北陸の鱈ずし買えば雪匂う

七草の香り土鍋に春すすする

ジャンケンに負けてコーヒー入れる彼

夫の習うワープロの音たしかなり

プランターのねぎ摘んできて晦日そば

成長の証 憎まれ口をきく

米不足くると棚田が訴える

大阪の冷え大和屋も大衆化

職捜しベントの窓に犬の顔

藤井寺市 吉岡美房

遮断機の向こうばかりをあこがれる

流されたからは海まで行ってみる

時々騒ぎたくなる冬木立

男一匹波乱万丈みちづれに

国民の為だ為だと言いつぎる

藤井寺市 高田美代子

叶う夢叶わぬ夢もみて生きる

電話にて追伸これが一時間

音もなく広がる春の来る気配

引く時の波の凄さを知っている

じつくりと見て聞いている黙秘権

藤井寺市 鴨谷瑠美子

変身は胸のつかえがおりてから

真心をすりむいたのに耐える振り

それなりに生きて行きます泥人形

出る幕のないパソコンの話には

幕間に周り知らない顔ばかり

藤井寺市 中島志洋

それなりに帳尻合わす年度末

お賽銭少なすぎたか不合格

総絞り花束渡すだけの役

無器用が食べる魚を猫が待つ

反対の母は黙って席を立ち

藤井寺市 楠 昭子

つまらない事に昨日は腹を立て

どんぐりにどんぐり以上のこと起きず

人形のままではきつと捨てられる

介護する妻こそ僕の女神です

悔し涙何ども流し丸くなり

羽曳野市 榎本吐来

人前を気にし始めた女郎花

無神論 亡父亡母の顔毎夜見る

改造内閣ふふんと笑う宝くじ

不景気の正直縄のれんにも不縁

朝風も夕焼空も沁む余生

羽曳野市 吉川寿美

潑刺と老いてゆきたし古希の初春

妥協しても鎧すぐには脱げませぬ

無題と書いてわたしのドラマまだ続く

失いしものを数える寒い指

じゅげむじゅげむ あいも変らぬ妻の愚痴

羽曳野市 福田満州

庭の千両たつぷり生けてお正月

平年並みの寒さらしいがこたえます

見かけより野太い声の演出家

幼児のあんよは拍手浴びながら

歯を守るブラシ色々五本要り

羽曳野市 三好専平

裸木の街にパン屋のいいにおい

右左どうもわからぬことだらけ

まあまあとなあなあだけですむ日本

道だけが立派になった過疎の村

検査する人が賄賂で逮捕され

羽曳野市 酒井一壺

今までにどれだけ嘘を言ったやら

最後まで引き算ばかり十二月

ブランドの服に似合わぬ河内弁

偽物が出てブランドの格上がり

ブランドのカバンを持てばよく喋る

河内長野市 植村喜代

竹とんぼ雲の峰まで母追って

かなしい日冷たい雨が降って来る

嬉しくて押しつけましたカレンダー

有難い探り探りに来た川柳

物音もしないで年が明けました

河内長野市

加島由一

いつみても三色すみれ咲いている
核心に触れると貝になるおんな
酒を飲むいつも恋しているように
触れないで胸に地雷を埋めてある
元気ですテレビ体操見えています

松原市

玉置重人

ロゲンカ済んだらお茶にする夫婦
欲深い顔を見ている福袋
まっすぐに生きねばならぬ四字熟語
老いたとは思いたくない老いている
乱気流夫の帰り遅すぎる

松原市

小池しげお

十二月八日知ってる天津栗の艶
敵七人そんな少ないはずがない
自分史にカラーページを綴じておく
如才ない分家 本家に呼び出され
玉のない眼鏡を掛けている男

富田林市

藤田泰子

胎動が聞こえて来ます寒期
糸切れた風で無限が怖くなる
親芋子芋 血は争えぬメイクイン
若い日に今の自由が欲しかった
兎年ベジタリアンに宗旨替え

富田林市

片岡智恵子

打つべき手打って尻尾はもう振らず
先頭が走ればつづく群れにいる
惜しまれる別れゆっくり陽が落ちる
噂話にうさぎの耳がかゆくなる
折り返し点から水がもれてくる

富田林市

松本今日子

一人また二人と消して賀状書く
好奇心一杯乗せてスキーパス
この道も幼い頃は遠かった
表情も思いさまざま土兜
舵取りが風邪で寝込んだ三世代

東大阪市

森下愛論

ジョギングの処を得たり桜土手
ちらほらの桜の下で長話
考える余地なし冷や酒コップ酒
メンバーが揃った頃に燗が出来
ほろ酔いで帰るにおいしい虹のまち

東大阪市

谷口義

二世帯同居 班別行動とってます
足を組むのもむつかしい程太り
散骨をする方の身になってほし
肩の力抜けと言われたことがない
雨雨雨やまない雨はないけれど

東大阪市 安永 春

寒々と清しい宮の冬木立

古文書の達筆に知恵しぼり合い

お達者が古文書写すボランティア

戦に生きのびふたりは半世紀

朗らかも無駄口多いのが困る

交野市 山川 日出子

経本に縫って乗った空の旅

たこ上げをとんびまねする淡路島

様々なドラマが分る年賀状

眠れぬ夜 羊百より五七五

無着陸世界一周夢気球

池田市 藤井 計光

肝っ玉かあさん持って平和です

ひよこだと謙遜しつつ悪巧み

黒髪の方に情念燃やす女

前向きに生きて笑いの中にいる

妥協癖 総理の椅子も軽くなる

吹田市 山本 希久子

山茶花はらり昨日を小さく折りたたむ

孤独あつめてコンビニの灯は眠らない

読むクスリ田辺聖子を寝る前に

とっておきのスマイルがあり母寿寿

茶髪にも市民権あり第五版

吹田市 瀬戸 まさよ

寒の入り口ずさむのは春の詩

老害という禁句持つ切なさよ

旅に出てエステまでするリフレッシュ

べつ甲の干し柿高価口惜しい

風見鶏ある家ロマン溢れてる

吹田市 古川 喜美子

蝶番ゆるみ身長縮みだす

はみ出さぬように三人仲よくし

とどまれば忽ち枯野に吸い込まれる

ブランコの子はポケットに鍵をもち

お伽話しよう暫くテレビ消し

吹田市 石原 靖巳

アドリブがあって人生おもしろい

生き下手を苦笑いするひとり酒

ブランドでひととき晴らす主婦の鬱

神頼み右も左も無党派も

総理所感おせちのように並べ立て

吹田市 野下 之男

不揃いの顔に味ある雪達磨

連れた犬聞いている振りの立話

アルプスでいのち拾って神信じ

大吉は頭の隅に置いてけず

執念の一蹴りゴールが呼び寄せる

豊中市 吉田 あずき

郵便 電話 長い数字の地球人

三輪山の神はいずこか森森と

カニの足もぎつつよかった人間で

広辞苑の重さへ脳の軽いこと

空と海つづいてるから旅に出る

豊中市 田中正坊

続編はだれも読まない私小説

この歳で受ける新聞インタビュー

法事でもなければ逢えぬ人がいる

冬あかね明治の女ひとと逝く（亡妻の母死す）

父母娘 三人そろって蓮の句座

豊中市 安藤 寿美子

馥郁と紅梅襲のいだしぎぬ（奥田みつ子様）

無理にでも動かなければ動けない

のらくらとしてても年は明けている

道成寺 玉三郎の切ない眸

兄弟がパソコンお年賀を交わす

豊中市 井上直次

こんな味知らずに逝ったと通夜の酒

多過ぎるこの世に酒の飲めぬ不利

遣伝子の糸につながる血の絆

孫揃いまともに名前出てこない
除け者にされたくなくて嘘言う子

豊中市 滝北 博史

巢立つまで子らとマージャンした茶の間

佗助にないしよ白梅植えたこと

クリスマス隣家の犬にプレゼント

身に余る恩恵受けて暮れの鐘

喜寿の朝 陽光浴びて四方拝

豊中市 湯浅 馬洗

物忘れ老人力とおだてられ

復興の四年が光るルミナリエ

毒の字に清水寺の経の声

親から子へ続けたおせち振り向かず

七ヶタを書かれて照れる過疎の里

豊中市 松岡 久留美

美しくブライド高く嫁きおくれ

思春期で塀のりこえるうちの猫

思い出が孤独を救う老いの日々

再会の友と語らい夜もすがら

一筋の光たよりに道をゆく

箕面市 岩津 ようじ

まほろばの椿落つ香を放ちつつ（樟片岡先生）

会釈されどなたですかと問う度胸

白壁に柿が似合うという写真

十二月三十一日もう寝てる（年末年始入院）
役立たぬ妻の見舞いを待っている

箕面市 椎江清芳

枚方市 前たもつ

足と手の指に目がある白い杖
春うらら長さを遊ぶ象の鼻
浮気にも時効が欲しい脛の傷
散髪すると道草したくなる
寒鮎へ比叡おろしの頬被り

箕面市 出口セツ子

最近の世相を怒る変わり雛
付き合いは下手でもネットでは多弁

決断と生き方を問う余命表
十四歳謎の生物居る我が家

震災の時間^{とき}で止まっている遺族（阪神大震災4年）

池田市 岡本吉太郎

へんろバス着けば読経の大合唱

春うらら鈴の音ひびくへんろ路や

勝ちに慣れ情け無用の人となる

八十路来て二十一世紀がもうそこに

ヒ素疑惑天知る地知る己知る

池田市 栗田久子

弁護士が弁護士頼る庭に立つ

済んだことと身に言い聞かす無理をして

空間は我がもの顔に伸びるビル

炎の昏うなだれて咲くシクラメン

透明な陽にろう梅がにおい立つ

七草の青芽も覗き春近し
強情と頑固夫婦で恙無し
不景気に消費をせよというお国
阿波踊りとっても上手いシクラメン
いい時に辞めはったとはよくのこと

枚方市 寺川弘一

親友の忠告にはない副作用
助走だと思いつかり生きて行く
落度など無くとも寿命やって来る
目出度さは馬齢加えて寝正月

カレンダー部屋毎変えて寝正月

枚方市 森本節子

大台にゴールイン米寿に向かつて進むのみ

河川敷鳳上げ夢中の若夫婦

老眼鏡かければ優し末娘

誰とでも何でも話せるいい会合

爪嚙んで姉のことなど思ってる

守口市 森川まさお

病院で諦めましたとも言えず

せめてもの礼深くして医者を送る

わけもなく手を振り別れの仕草する

執着はほどにするとお正月

底冷えは音がないまま身にこたえ

守口市 結城君子

寢屋川市 森

茜

戎さん補聴器入れて不況聞き
古寺にみる光と影の神秘さよ
水仙の葉のストレスを見たような
酢牡蠣食む夫の顔が満ちている
相談の電話つづいて歳を知る

茨木市 藤井正雄

寢屋川市 富山ルイ子

世紀末くすんだ色はみな捨てる
酒が出てひと先ず幕にする話
片意地を張らねば妻にばれる嘘
二幕目がなかった淡い恋でした
雛の間で寝ると娘とお友達

高槻市 傍島克治

寢屋川市 平松かすみ

着飾れば言葉遣いも変わる妻
嫁の留守狙い息子にはっぱかけ
あの人がしたからしたと子の理窟
正論が議事進行を妨げる
あの人が行くならやめるバス旅行

高槻市 井上照子

寢屋川市 角野仁清

若い日の夢は大きく高くあれ
身が大事婿殿平で尽くせばいい
ガキ大将五十四歳頭搔く
へそくりの苦も忘れてる一人者
乙女心ゆらいだ恩師御健在

寂しさをまとう満員の地下鉄
心配を食べて目高は太れない
口笛がだんだんさまになる自信
宝くじ支店長さんも売ってはる
背に冬日句集を繰っているしじま
『白い梅』一気呵成に読み終える
改めて柳友に敬意を持つ句集
いい年になりそう親友の試歩の杖
握手して仲間意識をたしかめる
生き字引と聞いて何でも聞きに行く
あらまあとお隣さんとお手洗い
たつぷりと愛を溜めてる止水栓
小冊子ぐらいは出来る孫語録
福耳が好きだ一票入れて上げ
鬼の手もバンザイしてる不況風
深雪へここを歩めと父の跡
松過ぎて飲む口実を待っている
トンネルの向こうは雪が対向車
美しい景色に溶ける国訛り
好い嫁も少しもたらず副作用

寝屋川市 江 口 度

ばんざいのとっても好きなシクラメン

実るまで長い旅する枇杷の花

世紀末抜け出すはずの路地で古い

妻のお茶熱からずぬるからず

柳に風 万馬券を買いにゆく

寝屋川市 柴 田 英壬子

ボランテアから赤飯弁当が届く

アザレヤのピンクが春を告げにくる

新聞代集金に来る遠慮勝ち

不景気なのにカードのシステムが進む

ものや憶うテレビすこしも観たくない

寝屋川市 堀 江 光 子

旅十日心寂しい日もありて

安治川に残る渡しもこころ一つ

黙々と戦った日の諸の味

暖房の部屋でぬくぬく予算案

羅漢仏微笑哄笑泣き笑い

寝屋川市 酒 井 勇太朗

就職難 先祖に感謝老舗継ぐ

若い気を風邪に限界論される

家系継ぐ長男だから鞭が飛ぶ

香港旅行風邪の神々付いてくる

大不況個人の無力思い知る

寝屋川市 籠 島 恵 子

さざんかの垣根をたどる回り道

一期一会にハーブ香っている余韻

持ち越した風邪にさよならしての春

お隣の猫に起こされ三が日

我が家にも長男がいる昼の月

寝屋川市 太 田 とし子

文化と言う武器に正月さらわれる

目が覚めて何の変わりもない五体

其の先は問うまい鐘の百八ツ

笑い袋さげて浄土の門叩こ

神様にふられた絵馬に春日射す

大阪府 靱 山 隆 盛

松とれたハローワークに人の渦

贈りものの先に送って水をあげ

愛情もゆっくり変化糖衣錠

バイオテク神のしつpegきつとある

年金は企業戦士の勲章ぞ

大阪府 八 十 田 洞 庵

背のびする男に助言聞こえない

卑弥呼の目どんな夢路をたどつたらう

しんしんと夜が更けてくる情死考

近づけば他人のエゴにけつまづく

貸し借りは甘えておれぬビッグバン

決断の度に男は脱皮する

和歌山市 堀端三男

清新な顔でライバル迎え撃つ

臍を噛むばかりで人生黄昏れる

不況深刻ご祝儀相場無い株価

目立たぬよう助言するのが真の友

和歌山市 木本朱夏

菊焚いて死者と生者が別れけり

絵手紙にちいさく春を点すなり

水色のリボンで括る秋思かな

身の内の藪に隠したマタイ伝

脳死論の境界線にさくらんぼ

和歌山市 牛尾緑良

父母も居まして仕来りが続く

悪人の首が私によく似てる

とある日の世相私の影になる

規格外だからゆつくり見てあげる

ドナーカード自己満足もほどほどに

和歌山市 榎原公子

魂をかばう太目の眉を描く

剪定の鋏に淘汰されそうなる

頼られて背筋がぴんと伸びてくる

お隣の計からハッピーニューイヤ―

計の便り続々今年は春から

美しい心で拝む初日の出

和歌山市 福本英子

空青し 海山青し故郷の初春

赤い手袋はめて皆と手を繋ぐ

白い手袋握手は思案ついてから

手袋の片方ばかり引出しに

和歌山市 桜井千秀

霊柩車息子攫って行ったきり

見識の高さで紳士守ってる

味噌汁のぶっかけご飯一人膳

自己発見の旅は命の果てるまで

同姓同名私に似ては下さるな

和歌山市 山田高夫

行きずりの情けに出会う旅が好き

孤立した肌で感じる風の向き

一念を通せば高い塔になる

切り返す言葉につまる喉仏

舌鋒へひらりひらりと身をかわす

和歌山市 青枝鉄治

良い方に解釈しよう気が晴れる

政治家に無欲になれと言う愚か

性格がもろに出てくる餅拾い

風体を眺め銀行貸し渋る

政治家の舌にエンマも持て余す

和歌山市 福井桂香

さようならボツリと冬のゼラニウム

雪の降るべいじで赤い靴を履く

酔いどれの天使と訣れ寒すばる

冷蔵庫覗くと街の灯がゆれる

カレンダーめくればそこに春の海

和歌山市 古久保和子

ころころと笑うと春が来るそんな

冬眠のコタツみかんを山盛りに

一コマの漫画冗談では済まぬ

献血のたびに体重まで聞かれ

シクラメンの香りはきつと自己暗示

和歌山市 川上大輪

終着の駅でピエロの服を脱ぐ

印鑑を捺して信用してもらう

灰皿がある誘惑をするように

五七五 十七音の玉手箱

真心も義理も宅配便で来る

和歌山市 玉置当代

清め塩盛ってますがすがしい日の出

初詣で祇園 八坂に知恩院

玉砂利を踏めば背筋が伸びてくる

主導権握った妻の高軒

還暦を迎え踏み出す始発駅

和歌山市 細川稚代

黙々と募洗う子に春の雪

寒明けてポストの影も少し伸び

歳月の流れ修正液となる

荒れた手に琴爪少し似合わない

あれ以来鳴らない琴が立ててある

和歌山市 池永正嗣

割り込みも美女の会釈に勝てません

結論がノーとなるまでイエスノー

人と人江戸の心が羨まし

戦中の壕を思えば寒さなど

仮名書きで何の会社か迷わせる

和歌山市 山根めぐみ

イルミネーション巻かれ睡眠不足の樹

叩かれて叩きかえして夫婦独楽

大根足逃げもかくれもせぬ太さ

生々流転やんわり老いましょうあなた

返す恩 熱い生命をさしあげる

和歌山市 堀畑靖子

出来栄も上々子等を待つお節

初孫を中心にして撮るカメラ

自信持って進められても無い予算

モットーは頂点などと言う自信

春闘の前途厳しい寒波なり

和歌山市 垂井千寿子

決断をうながしている流れ星

名人の高さに卒業証は無い

エルニーニョ小鳥も季節遅れにて

斜めから見れば名案浮かびます

古傷にさわらぬ友との話題選る

和歌山市 山口三千子

山消えて命の水は涸れていく

美容院の椅子は女を意識する

自信などないがハートは無農薬

簡条書き一週間のスケジュール

糸切れた風を見守る空になる

和歌山市 木村初子

車椅子でハウステンボス一巡り

年いよ水の如くに迎う八十

終生を素朴に生きた古タンス

朝茜夢に目覚める八十路坂

己が意志しつかり抱いた風あがる

海南市 三宅保州

上に立つことはそんなに楽でない

聞く耳を持てば裏まで見えてくる

弁護士は負ける戦と知っている

つくづくと妻を眺めたにらみ合い

缶ビール一本分けて飲む夫婦

奈良市 米田恭昌

まだ余裕ある表情の肚の中

影までが亡母に似てきて苦勞性

逆縁の諦めつかぬ忌が巡る

生真面目が破目をはずした社の辞令

傷心を森の蒼さに救われる

奈良市 天正千梢

街路灯あくまでさみし霧流る

句は生きただの一字を替えただけ

固い椅子後生大事に守ってる

千手仏千のぬくもり分けてくれ

わらべ唄みんな知らない子ばかり

大和高田市 岸本豊平次

スパーも軍艦マーチで年の暮れ

家計簿を付けと勧めて貸してやり

老いて手の届くところに孫の手を

金持てば粗大ゴミにはしないかな

日曜も無駄に過ごさぬ太い指

大和郡山市 坊農柳弘

お水取り世界遺産の里に春

みかん剥く優しい母の掘りコタツ

春告げ鳥 南部の里の心地良さ

単身赴任嬉しい娘のEメール

夫唱婦隨愛のリズムでフルムーン

大和郡山市 柳原 慧心

おひとよしまんまるメガネよく似合う

我が家には偽ものの絵が合っている

味よりもいわれを食べる祝い膳

ちよつと寄る俺のジュースはほろ苦い

雪の夜のなお静けさに目がさえる

京都市 都倉 求芽

国だつて借金 恥ずかしがることはない

一年中都会は乾燥注意報

毛嫌いの相手に挨拶先にされ

正月が来た来たお年玉用意

訃報電話この冬一番冷える夜に

京都市 山海 友熙

祇園まで足をのばして春に逢う

哲学の道を歩いて春を聞く

青蓮院 樹は青々と春の声

春風が呼んでくれたか友来たる

鴨川を上からのぞく風に逢う

京都市 小西 未佐子

鴨川の初日の空を鳥と飛ぶ

お命を頂戴します海の幸

若き日に跳ぶ思いせし東尋坊

老いて今落ちぬようにと東尋坊

老人力力を抜いてなるままに

京都府 稲葉 冬葉

頭寒足熱嫁さんに借りが出来

身から出た錆は十年かかろうと

何にもしない三食を呼びにくる

衣食住足りても欲の皮は張り

女が悪い男が悪い恋ざんげ

富山市 舟渡 杏花

隣の猫も救急車の世話になる

ちよつびりの涙をあてにしたわたし

ひよつとこがおかめに酷いことを言う

キムタクに少し劣るが子がひとり

かぶら寿し待って下さるひとの顔

富山市 島 ひかる

赤米で祝う卯年のお正月

青い鳥捜して出合うのは孤独

或る時は狂ったように鳴る時計

一枚の絵にふるさとの風を聴く

雪溪の雫が光る春の彩

富山県 増田 紗弓

忙しい日過ぎてとり出す毛糸針

一步歩いた電話が弾む孫のこと

雪のこと問うて話題が増えている

風雪に撓る樹木よ明日がある

流れには素直に乗ってゆく人魚

犬山市 早川盛夫

毎日を株価のような野菜の値
宴会はまず断つたことが無い
いい酒だ職場一つに束ねてる
隣席の新聞早うめくらんかい
足を組む女は嫌いだったちゅうの

可児市 板山まみ子

大寒波四日も続く白い朝

藤前はカモもチドリも夢心地
(名古屋港にて)

虫干しのつもり着物を着て行こう

還暦へ赤い茶碗を送られる

女ならかくあるべしは捨てました

静岡県 蘭田漠杳

髪髭が白うなったの人間味

引き算を覚え老後が楽になり

豪雪に雪を掻く人小さ過ぎ

八甲田以来雪には油断せず

赤富士を見る顔の彩富士の彩

横浜市 菱田満秋

風邪ひきの中で内科は待たさせる

天高く揚つても風 糸の先

大丈夫かと銀行に念を押し

値上げにも不買同盟ない煙草

孫の来る日は丁寧髭を剃る

横浜市 清水潮華

栄養はもういい好きな物にする
金を借り自慢話を置いて行く
連載が終わり新聞取り替える
愛されて金の話を切り出せず
期する事あり仏壇の戸を閉める

横浜市 菊地政勝

文明の利器が凶器となるモラル

老人力 目立ってきたと子の指摘

市の赤字老眼すすみ見えません

ポチ袋再度下から覗かれる

同期会 異国の丘でお開きに

横浜市 後藤早智

正念場ウサギは走ることにする

四十年会っていないと師の便り

膳囲み留学先の子を思い

子の受けた寒波日本で母も受け

白神の山に重なる故郷の風

八王子市 播本充子

原点は見知らぬ街の風の中

捏造に踊らされてる欲の耳

新しい土俵に挑む自然体

私にも来た売れっ子の年賀状

ざくざくと編む私の半世紀

町田市 竹内紫鏑

十年日記ビッシリ書けた七十路
十年日記投句も陰に添いつづけ
十年日記の疎なる日辞書をめくる指
万年筆贈られ八十路詠みゆかん
携帯も疲れて黙る葬儀中

大宮市 八田敏

百八つを聞きつつ次の夢数え
引越しの余得は富士と孫の歌
武蔵野に富士冴えて見る空つ風
スーパード日本の四季を見失う
あるがまま生きる悟りへ遠い道

仙台市 川村映輝

神仏を崇めているが頼らない
九十五遺言みたいな日記書く
元日に子や孫集い誕生会
初電話孫嫁妊娠した知らせ
生涯を顔面麻痺と共に生く

弘前市 斉藤 効

ゆめあかりこれはいけます新種米
津軽風舞うと津軽の空になる
七色の雪とつきあうのも津軽
氷点下 軒の雀もまだ眠り
紙風船少し遠出がしたくなる

弘前市 岡本花匠

風花や還相の亡母慈悲を舞い
別れ来て本音を言わぬ胸吹雪く
白銀の浄土を登り雪讃歌
マイペース生きた自信の雪晴れ間
褒められて笑顔になった雪だるま

弘前市 高瀬霜石

ぬかるみがまだまだ続く覇者の道
グライダー飛行で危機を乗り越える
ああ僕は達磨落としてのダルマです
よく見てよ父さん指は孤独だよ
いちにちに一ミリ虹を織っている

弘前市 今 愁女

海の青さに引かれ雲海沖縄へ
めんそーれ 景気に励む沖縄よ
カラフルな蝶と遊んだ琉宮城
椰子の実をストロー二本で思い出に
飛行機を降りればそこは雪の国

弘前市 蒔苗果林

雪の街 旅の桜の彩の娘等
雪かむる子等冬一番美しい
顔出して雪にやすらぐ庭の石
ぽっかりの口ぼんやりの耳の加勢
空嶺 雪見とれてひと日もう暮れる

弘前市 佐治 千加子
シャワー全開 凍みた心が溶けるまで
保留した答にどつと積る雪

誇り高くほえんでみる床柱
寄り添うてドラマに入って来た小猫
反古にする約束と知り 知りながら

弘前市 中山 雅城

三景の何れも海を背景に
三国志扇ねぶたがヤーヤドー
三部経二日掛りで回忌済む
三平汁馬鈴薯ほくり味染みる
三月のランドセルから音がする

弘前市 櫻庭 順風

朝々の好きな散歩は紺緋
長生きはお岩木山の贈り物
散歩にも娘の邸宅で草むしり
朝々の好み好みの散歩道
うっかりとよくも歩いた一里程

弘前市 相馬 銀波

減反もばくのレイオフだと思ふ
冬道に足を取られる冬帽子
雪ゆきと追い詰められる予定表
どこまでが冬かと春を待つ雀
言い訳が多くて脆い壁になる

弘前市 小寺 花峯

独酌は孤独なヘソと語り合う
ストーブが消えて一人という住まい
待つ者は冷たい色の四畳半
古里の雪に埋もれた無人駅
開かないドアにノックを繰り返す

弘前市 一戸 ツネ

踏む雪も春の脈うつ足の裏
髪に添う玉は有情の紅珊瑚
ガラス玉に官僚の嘘透けてくる
人生の節目を過ぎて知る妙味
冬の貌 嘘と真のコンクール

黒石市 相馬 一花

好きな餅食べて逝くなら本望さ
店頭でもう便秘するボールペン
ブランドを脱ぐと雑種に後戻り
強壮剤飲んで朝から除排雪
一卷の終りか見舞にくる縁者

十和田市 阿部 進

老いの膝坂おりの時笑い出し
やる気まだあるのが粗大ゴミにされ
忘れた頃借金とりがやってくる
結婚をするなら父のような人
お歳暮がチャイム鳴らしてやってくる

十和田市 小笠原 敏 人

雪見酒一寸二寸と降り積る

雪見ラリ―はつらつ回る梯子酒

欲などを出さずに今日の一万歩

孫が来る風邪を引くと言って引く

病院が風邪の温床かも知れぬ

八戸市 島 田 昭 治

ボロ家に独りで築く天守閣

仲の良さ命日同じ父と母

行き詰り思案のときは父母の墓

空白を見れば佳子佳子と書いている

乗換えて亡妻とホームで大喧嘩

青森県 西 谷 大 吾

地をはしる津軽の雪はべようと哭く

雪掻いて産土神を待っている

余所ゆきの顔が鏡に出てこない

ネクタイを締めて化石の顔になる

祝い酒五臓六腑にしみわたる

砂川市 大 橋 政 良

年金の絵本で蟻の旅終る

脳天に楔を打った但し書き

ネクタイを締めると嘘がうまくなる

片減りの靴と左遷の荷を運ぶ

人間不信 仮面がポケットに溜まる

美祢市 安平次 弘 道

焼酎にいりこ充電しています

愛しあう二人に見えぬ落し穴

不器用な男の愛だ信じよう

ライバルに越されて怖い夢を見た

竹原市 時 広 一 路

カーテンの隙間で朝が呼んでいる

どの絵にも竹が覗いて竹の里

父よ母よと海の青さを愛おしむ

オーイ雲 空の青さにすねたのか

岡山県 荻 野 鮫 虎 狼

薬吞み続けて長命だけ取柄

低気圧日本の空から抜けられず

初詣で賽銭箱を覗き込み

妻の顔少し綻ぶ年の暮れ

松江市 浦 辺 静 江

福招くと七福神の軸を掛け

気疲れでひとりゆっくり抹茶飲む

久々に亡母が夢を見せてくれ

松江市 佐 野 木 み え

粉雪の舞う大橋を渡りきる

嫁ヶ島 墨絵のように浮いている

贈る言葉幾度聞いてもじんとくる

送る人も別れがづらいターミナル

出雲市 石倉 美佐子

三月は確かに訣れの月ですね
古い駅に私の影が待っている
狂おしい雪女ひとりを埋めて降る
濡れ衣をすっぱりと着て傘地藏

出雲市 板垣 夢醉

無人駅サクラ構内笑みこぼし
冬過ぎて逃れた死期に温い春
やつたるぞ潮が心へ満ちる春
また馬鹿になれず抵抗左遷され

鳥取市 西村 黙光

大雪に飲みに出るなと諭される
大雪と角力を取った四年ぶり
地名辞典 昔々は大砂丘
旧友の名前出てこぬ腹立たしさ

鳥取市 石上 悦子

出迎えに母の花束うかれすぎ
帰国した娘に母の自立見せ
娘が世話になったお方へカニを選ぶ
また留守にする娘だ甘えないように

鳥取市 杉本 孝男

逆富士は日本の美学もつ誇り
ラストスパート今なら奴を追い越せる
そっとしておこう笑顔は叱れない
日に三度箸持つ重みかみしめる

鳥取市 近藤 佳子

愛しいと頼ずりされたのは昔
父の下駄叱られながらよく履いた
おでん屋台熱燗うまし雪も客
長生きの御褒美朝寝好きなのだ

米子市 白根 ふみ

紅白の蘭玉あかをひかえ目に
蘭玉がたわわ初春が待ちきれぬ
蘭玉をのこし一族消えてゆく
漢方がじわり回ってくる余生

米子市 光井 玲子

ひな鳥も胸ふくらます春の駅
春になれなればと欲張りなブラン
器が大きいあなたに打ち明ける
亡母を恋うわたしの中の風車

倉吉市 米田 幸子

姉妹敬遠したら他人めき
堪忍袋の紐もぼちぼちゆるみだす
好奇心若いつばめの巣をのぞく
冷や飯を食うた分だけ温かい

倉吉市 野中 御前

晩秋の暮れるに早い厨ごと
貸し借りもなくて無難年の暮れ
銀杏散る歩道車道を黄に染めて
園児服兔のようによくはねる

倉吉市 山本玲子

菓子箱に因果含めて門叩く

寒空に樹氷のポーズ見て飽きぬ

どこからと言うことのなし隙間風

良心まで葛根湯が追い出した

倉吉市 最上和枝

一刀入魂人間のエゴ彫り上げる

こじんまりミニスカートが春を呼ぶ

陽光が溢れ莓が赤くなる

隅っこの一言胃から離れない

鳥取県 権代康女

初夢に心晴ればれツルの舞い

景気よい方に向かつて兎とび

気遣いがもとで胃炎を起こしてる

だんだんと過疎にせめ入るカヤノボシ

鳥取県 山本正光

毛筆の賀状に温み感じとり

まったなし初日迷わずのぼりきる

素晴らしい彩で余生を塗るつもり

音符など無視して唄うので楽し

鳥取県 橋本多哥由

ごめんねと路傍小さい石をける

一隅を照らすペア組む心地よさ

苦勞した母の肩には灯が温い

苦勞してやればやがてはめどが立つ

伊丹市 小熊江美

相槌をしてれば老母は良く喋る

もうすぐだ二十一世紀まで生きよう

長電話大事な事を忘れてた

親切にされて我が歳ふり返る

西宮市 菊池トミエ

ふる里へ走る車は母が待つ

富士を見て走る冬晴れ新幹線

やさしそくに肩に手を置く軽い嘘

世の移りたばこ屋つぶれ物菜屋

宝塚市 黒台伊佐武

熟れ過ぎの頃が一番甘露なり

脹らんだ蕾にそつと口付ける

泣くもんかいつか彼奴を越してやる

振られたらはじめじめせんと吠えなはれ

川西市 氏林洋敏

クリスマス過ぎると暗くなる夜道

わが街を誇りに思っお元日

いる時の爪切りいつも捜してる

吉本のパワー正月ジャックする

川西市 松本ただし

福耳で貧乏ゆすり取れぬ寒

起き上がり小法師がふて寝して困る

父のピン何時もピクピク動いてる

散る時を知っているから花が好き

大阪市 稲本 凡子

余生だからと自分に甘いことばかり
出世して一ばんこわいのは味方

憎いほど美人で誰も近寄れぬ
座礁した船の傷みが解るかい

大阪市 川久保 睦子

高架下で泣いてた猫がいま主
スタートに付いたが迷いまだ残る

錆ついた脳で知恵の輪解けない
和ダンスに大和撫子眠ってる

大阪市 鈴木 トヨ子

空いっぱい夢を描いて卯年明け
ミニひなに幸多かれと語りかけ

七坂を越えても虹がまだ見えぬ
嫌な人案外裏はお人好し

大阪市 奥田 良子

善光寺バスを待つ間の走りそば
風の夜は淋しさまして一人鍋

冬帽子はみだす白髪かくしおり
福助が凜とかまえる初大師

堺市 近藤 豊子

お見舞のいちごお行儀よくならび
風邪の子とトランプをして負けてます

連絡帳先生の字で「おだいじに」
風邪三日め置かれしままのランドセル

高石市 浅野 房子

仁左衛門見たのがせめてものおごり
イエスマンしか氣に入らぬのも困る

いつ噴くか危険なマグマ抱いている
コマーシャル長いがつまらないドラマ

貝塚市 池田 寿美子

飛び跳ねずじつと静かに世紀末
いつまでもセンスを磨く顔の艶

電話ベルドラマの中を間違える
京小物 彩目もうれしプレゼント

八尾市 村上 ミツ子

初詣でもお祝詞もないお正月
やってくるチャンスはいつだって無言

叶わない絵馬につめたい雨が降る
人並の老人力はいつてきた

河内長野市 井上 喜酔

円高は弱い日本の隠し芸
本能で動くしかない四面楚歌

自動ドア人を見る目が無いらしい
露天風呂長寿の秘訣教えあい

羽曳野市 徳山 みつこ

夕焼けに見とれる癖がついた初春
危機一髪ジョークがミットからこぼれ

いねむりの病父が確かな受けこたえ
旅好きと組んでよかった万華鏡

東大阪市 指宿 千枝子

雪が降る馬籠妻籠の旅二日
窓の向こう大阪梅田観覧車
赤いあかい大輪の花観覧車
観覧車ケーキセツのお代なり

吹田市 茂見 よ志子

来世紀生きる願いの初詣で
参道にタンポポひそと可憐さよ
北風に耐え春の使者待つのです
老木も春待ちかねて芽吹く枝

枚方市 二宮 山久

屠蘇気分ぬけぬまんまの初仕事
趣味多忙定年なんかこわくない
世紀末何か起きそなお正月
初笑い妻の笑顔にほだされる

寝屋川市 後藤 黎之助

ルミナリエ更地に光とどかない
ボランティア心ぬくもる杵の音
同郷と判って聞く祖父の口
新世紀不況の荷物軽かれと

寝屋川市 北岡 波留吉

春を待つ男劣るコップ酒

山里に夜明けを告げる鳥の声

無為徒食嫌い八十路がボランティア

御先祖から祝詞が届く誕生日

大阪府 米澤 俣子

今晚も味覚が冴える食前酒
饒舌で心の奥を見すかされ
お使いはメモを持たせる母心
短日に早くお行きよはぐれ雲

海南市 谷口 義男

セールの眠りを覚ますコードレス
生真面目と言う遺伝子を子も孫も
次々に死語と新語の入れ替り
妻が舵握り航海する老後

富士宮市 渥美 弧秀

雪の富士老夫婦に温い故郷便り
口げんかアクセサリーの老夫婦
浄土への旅川柳が案内する
陽に浴し食後の椅子に黙想す

朝日なにな柳壇 片岡つとむ・橋高薫選

第九集 平成五年一月—平成七年十一月

頒 価 一五〇〇円(送料二〇〇円)

朝日新聞社が第八集を最後に刊行しなくなったので、同社の了承を得て、誌友の長谷川淳氏が再編集し、課題の五十首別一覧表を添えて作製した冊子。第十集も作製中。

申込先 663-8152

西宮市甲子園町八一—二〇二 長谷川淳宛

振込先 大阪市信用金庫西淀川支店229981(普通)

佳句感想

橘 高 薫 風

軽み

日めくりは1と出ている大晦日 黒川紫香
近頃はカレンダー一辺倒だから日めくりが
なつかしい。追憶回想の思いが句に奥行きを
もたらすが、この作句時にはほんの写生で、今
より一層軽みの例として受け取られたらう。

大根よお前何処から来たのかい 小出智子
毎日のように行く市場の八百屋で、野菜に
このような呼びかけの出来る人の仕合わせを
思う。京都なら九条ねぎとか聖護院無といっ
た産地の名が冠せられるがそれは問題外、余
計なことにかかずらうと軽味が台無しになる。
降りる客いとんのんと続くなり

須崎豆秋
軽いうがちとにんまりさせるユーモア、そ
れに軽みを合わせ、三要素の揃った句である。
ラッシュ時の電車の乗降時には常に思い出
させる句だが、意識をして見ると、三要素を
併せ備えた句は意外に多い。

傘寿尚昨日と同じ飯が炊け

秋元 てる

一読軽みの句と受け取れて、実はさして軽
くない句もあるのだ。この句もその一例で、
傘寿という歳月の重みのせいであらう。

薪や炭からガスに電気釜と時代により変遷
する炊飯も、八十の今となつては、昨日と同
じに炊ければ上々、心が安定するのである。

余生は日日の寸分変らぬ繰り返しが大切で、
一寸した隙から健康や生活のリズムが崩れる
予感にさいなまれる。

万国旗なびく事情は風まかせ 福士 慕情
運動会の万国旗が風になびく。風のままに
なびくのだが、「事情は」の一語が介入する
と、万国旗に国際的事情がともなってくる。

覇権主義の強大国には勝てないで「無理強
い」にも「ごもつとも」で通すしかないのだ。

耳遠く念押して聞く初笑い 長谷川春蘭
念を押して聞く人は耳の遠いことは明らか
だから、この上五は言わずもがな、ダサイ表
現と言える。ところが、ありふれた上句ゆえ
続く中七の措辞が味良く連繋役を果たし、下
句の結果を納得させた。

この句の味は自然体にある。気取らぬ平凡
な語の効果を教えられた。一気に述べるこた
わりのなさが軽みの句の作句要領であらう。

水筒は一口飲んで見せて分け 酒井 輝

「飲んで見せて」が一つのフレーズである。

ハイキングの休憩時、水筒で咽喉を潤す有様
が軽く言えている。その通り、と相槌を打つ
気分させる句で、老齢の作者の童心のよう
な屈託のなさが嬉しい。

佗び助にないしよ白梅植えたこと

滝北 博史

狭い庭のことだから、咲けば梅の香りで椿
も気付くであろうが、それまでは内緒にして
おきたい。筒袖の緋の着物を着た田舎娘のよ
うな佗び助に、高貴な白梅を配したのが手柄
だ。取り合わせの妙で、佗び助が川柳の匂い
をにじませる。

こう見てくると軽みの句はむずかしい。

知ってるかアハハと手品やめにする

楳元 紋太

おおそうか今日は夕刊来ぬ日なり

浅井 五葉

など、有名な軽みの句の値打ちが今更に思い
知らされる。軽みもまたユーモア同様、人が
物を言うのである。

自選集

松川杜的

遠山可住

光満つ五百羅漢の胸の線
糸底の此処に女の意地がある
座り胼胝の未だある妻でつつがなし
ちぎれ雲 八十年をありがとう
波の花 何か言いたい事がある

恒松町紅

西田柳宏子

なだらかな気持ちで向かう喜寿の坂
手にかけて数珠の置き場所探してる
そして酒 明るい話聞かされる
生かされて老人力の夢をもつ
融通の効かぬ男のカウンター

野村太茂津

野田素身郎

兎跳びまだまだできる当り年
困ったことに悪友が煙草止め
面一本打たせて弟子の技賞める
いい出遇いありそう春の芽を見つけ
迷わずに歩き続けた夜の自信

自己主張 蜘蛛の巣だから許される
年金の虹なら虹よ消えないで
京菓子がニコツとわたし呼び止める
鈍行の旅 風の彩風の声
ドラマ見る涙あなたが好きになる
蝶の羽化生命の動きじつと見る
選者はね返す呼名にある活気
連れている犬のお洒落に負けている
清流に裸 成人式の朝
今年限りというみかん山よう実り
大晦日 妻まだごそごそやってます
除夜の鐘なんとか古稀にたどりつき
新婚が来て華やいだお正月
正月の残りの酒で少し酔い
寒がりの僕をいじめに寒波くる

藤村 女

神の目に合格させたい絵馬ばかり
合格へぐつすりとは寝た朝迎え
あのひとの噂を風に聞く未練
見送った駅で未練の風が吹く
四季の風知らずハウスで育つ花

藤井 明 朗

奥山の雪の暮しを子ら案じ
人間の強がり所詮運不運
人生しみじみ寒さ身にしむ歳となる
また来ます選挙の話置いて去に
聞き役に回りふれあいの和を大事

宮口 笛 生

齢とつたなアと寒さに負けている
寒いのが苦手で猫が膝へ来る
冬の畑ネギ引きに行くだけの用
陽溜りでお隣さんも妻も暇
七十も半ば死に頃かも知れぬ

月原 宵 明

痛いところ突いて無口が席を蹴る
黄門へ溢れた涙拭わない
一言を控えた夜が眠らさぬ
老骨の一途老人会嫌い
湯豆腐でしばし踊った花かつお

辻 白 溪 子

プロポーズしたい白衣に注射され
拒んでるわけではないが黙秘する
アリバイを通し親切嘘をつく
止まり木に酔うてる酒に悔いがある
散らかした居間で落着かない金魚

波多野 五 楽 庵

終章の母の影絵がいたましい
焦点の合わぬ話をした握手
今日の日記をとて書けない訳がある
粗茶ですの一言がいい雪あかり
あらあらかしこやと別れを思うなり

正 本 水 客

背伸びしているのは人にしらせない
悪友としてばっちりとおぼえてい
持ち味を失うなと自分に言いきかせ
二人三脚したい人にはうとまれ
秋灯下読みたい本がひとつある

小林 由 多 香

初せりの蟹は眺めるだけのもの
茶髪には一も二もなく反対だ
悪い癖よくせ親に似て育つ
なりふりを構わぬ国の台所
当たっても碎けぬように生き延びる

板尾岳人

旅かばん何にも入れるものがない
不景気だな春来たりなば恋しよう
お水取り亡母をわすれたことがない
くたびれた靴を磨いて春を待つ
二月堂もわたしも春に恋をする

小西雄々

陽溜りで奮と幸せ話する
跳ねたあとは静養したい繭の中
動かない山うごかしたボランテИА
雪女を今も待ってる夢の中
愛想笑いの顔で抱いてる冬の天

金井文秋

首根っこ掴めば鰻でも弱い
嘘を言う顔が見てくれとは無理な
濡れ衣も時間が経てば乾いてた
ぬくぬく暮す権利などない天下り
究極の解決策に自己破算

高杉鬼遊

風鐸へ冬の陽射しの暖かし
赤なまこ地酒が欲しくなってくる
おそかった今さら何をバイアグラ
確かめの電話くどいと言われても
生き急ぎすることもなく死にもせず

阿萬萬的

背伸びしていたなと思う夜の冷え
自己中心時代のずれに気付かない
焦ってる証拠のように眼が乾く
ひとり芝居で余白のような日々過ぎる
昨日今日やっぱり愚痴の出る暮し

黒川紫香

ゆっくりと歩いて行こう新世紀
草の芽が毎日伸びる庭になり
有難う互いに交わしバス降りる
景気よくあちらこちらで出た句集
豆腐料理の味を賞でつつ旅ばなし

八木千代

雑木林から呼びかける千の種
来年の香りも溜めて柚子の種
凍原にもしやの種を蒔きにゆく
まだ働ける使い捨てカイロの火種
冬眠のあとの火種をたのしみに

河内天笑

啓蟄の光の中の水鶏庵
禁煙三年で嫌煙になつてきた
ダイエット満一年でやり直し
血管に水を一日2リットル
四十度の半身浴に慣れてくる

大空の、、、ろ

(98)

橘 高 薫 風

この連載の標題「大空のこころ」も路郎先生の一句

酒とろりとろり大空のこころかも

による。李白の末裔と自称の先生にとって私は不肖の弟子で

下戸の酌間ということを考えず
と、いつも不興を買っていた。

今回は柳界に関係ある名士の新年酒談義のほんの匂いだけを紹介する。題して「酒と私」

盃を相手に

京都帝大 額原 退蔵

酒は好きな方ではあるが、昨年病氣して以来会などでは最初からことわって、あまり飲まないことにしている。うちでは過さずおそれが無いから多少はやる。酒中の眞の趣はやはり微醺に得られるであらう。そしてそれが分つて来るのは、やはり年の功を経ねばならぬものらしい。この頃いくらか人を相手にせず盃そのものを相手にして飲む妙味が解せられるような気がする。肴は濃厚なものでさえないければ何でも宜い。

書齋で独酌

法学博士 岡田三面子

毎晩七時半頃から独酌、眞に独酌、傍に何人も置かず、チビリチビリとやりながら、或は堅いもの、或は和かいものを読むか、書くかして、九時半の時報を聞き就眠、量は二合半か三合。

生命安全法

庭球家 鳥山 一步

妻が御影のある漢流医の処へ僕を連れて行って診察させると「君は毎日三合五勺は酒を飲んだがいい」と老先生がご宣託された。僕の酒は一部老医から承つた生命安全法である。

医学博士片瀬淡先生と或る夜痛飲したことがある。酒はマグネシウムで僕は之れを類脂肪と称っている。これを多くやると類脂肪が蓄積して老人性変化を起すからいけない。

しかし、スポーツをやるとマグネシウムが排除されて、カルシウムが残るから、身体は達者になる。少し位飲んだところで運動すればよいが、晩酌を余りやつたらいけない。

淡先生かくは口述しながら茶碗でぐいぐいやる。その時或る卓球人が「先生、講演は結構ですが、そんなに飲んでは」と抗議を申

込むと、先生すかさず「酒は人生観で別じゃ」と更にぐいと飲み干した。僕大いに快哉を叫んだことであつた。

曰く、私の酒は老の命に従い、医博の人生観に生く。また無理有ること無し、……だ。

チョッピリ酒

医学博士 長谷川一徹

酒ほど味のよい好ましき飲物はない。しかしながら二十一貫余の体重をようやく支えて居る私の心臓に酒を灌ぐと直ぐ持ち耐えられなくなつて派手な苦しみ方を初めるので、下戸と言ふことになり、周囲も飲まさない。

酔心と言ふお酒があるようですから、このお正月にはそれを買ひましようと言つてゐるから一年一度のチョッピリ酒で、一年中の酔い心を持たせるつもりらしい。

罰盃も受ける

伊子電鉄 前田 五健

「あなたは、呑まん呑まんと言つが、綺麗なのが居ると呑む、ケシカラン」

「そついう訳ではないが、そつかも知れん」

「一体酒は好きか嫌いか」

「困る、そらあつた方がイイが、無くても差支えない。酒のエー悪い位は判る」

「つまり酒と添え物の花が」

「降参ッ、要するに陽気なのが好きだ」

「それ見い、罰杯だ」

黙つてつける……此の程度です。

川柳太平記 (250)

川柳の群像

山本芳伸

東野 大八

「淡路島が私の生れ故郷である。楽しい思い出より悲しい思い出が多い。父は貧しい水吞百姓であつたし、それに母が弟を産んでから寝ついてしまい、薬代にも困るようになり、家庭のこの淋しさから父は遊ぶようになった。遂にはわずかな山や田や家を二束三文に売ってしまつて私が十歳の春には明石へ渡つた。

これからの私達一家は転々として住居を替へ米の一升買いが続いた。私も小学校を一年ごとに變つた。それだけに本当の意味の竹馬の友は居ない。あの故郷に捨てられた私の孤独感四十のこの年になつても抜けないで人嫌である。終生そうであるにちがいない。

すべてに反逆しようとする私のひねくれた川柳は、案外そんなところからきているのか

もしれない。こんな風な川柳精神—故郷をおわれた者の作るもの—それは不安と否定の上に立つ川柳なのである」(山本麦一)

○自我のふるさと

ふるさとの墓は紀州の見えるところ

一塊の土わがものならず故郷を去る

貝殻を踏めば故郷ががくんと来

麦一作品に故郷の句が少ないのは注目し得る。それは右の彼自身の生い立ちによらう。

山本芳伸は、昭和7年から25年までを「麦一時代」で、それ以後58年に亡くなるまで「芳伸時代」と大きくわけることができる。

本名山本隆賢。明治42年12月26日生れ。

みの虫の落ちて這うとき私に似 麦一

これは麦一そのものの自画像でこの句以来筆者はふ誌の麦一ファンになった。

灯を消して故郷のふとんの匂うこと 麦一
肩つむ星ふるさとを失くしたり
妻よ妻よ仏の花を代えないの
旅に臥し肩身のせまい咳をする
転任ときまり夫婦に夜のみかん
塵箱の犬がひよりりと顔を向け
昭和7年就職した三越神戸店には、鈴木九葉(ふあうすと主幹)が主宰するグループ、波止場川柳会があつた。新参の麦一は、入社早々の下つ端だったが、自由律層雲会員だっただけにそれに加入する。

日中戦争のはじまつたばかりのその頃だがグループ内には、伊藤定子、金沢伸子、土岐貞子ら十数名の三越ギャルがいて至つて華やかであつた。しかし、その女子会員が一人でも句会に来ないと、下積みで麦一がその家に駆けつけてきたそうで、当然ながらこの会から、ふあうすと御大、紋太を識り、自分の身上とよく似た菓子屋のおつさんの「人間川柳」に忽ちその句や人の生きざまに共鳴、終生この紋太とその柳誌からは不可分の間柄となり終生それ一筋で押し通す運命となつた。

昭和14年麦一は、三越神戸店から高松の三越店へ転勤になり、新妻と共に赴任する。かくてここ二十年の昭和24年、山本麦一は突如芳伸と改名、香川県各地を飛び回るうちに、

既存の各川柳グループの相談役やら指導に当るようになった。たかせ川柳会、白方川柳会、浦上川柳会、新樹川柳会、野菊川柳会、玉浦川柳会等々に、果てはさくらんぼという盲人川柳グループまで手がけるようになった。芳伸から川柳の薫陶を受けた者は、尤に五千人を下らない、とふ誌上で報告されている。

こうした実績が実を結んで、昭和52年鱗作家グループを創設し、季刊誌『鱗』を発行。その誌上に、昭和22年から同44年まで、紋太が身まかるまでの書簡九十九通の全文が連載されている。この芳伸の働きにより、香川県下のふあつすと同人は二十名を越える実績で、『鱗』発刊の折はふあつすと川柳社副主幹に、高松芸芸協会副会長の肩書を持つまでになっていた。

芳伸といえは、昭和38年ごろから「老い」を作句のテーマにとりあげ、昭和58年5月15日胃がんで死去(享年72)するまで、終生、つまり二十年間、えんえんと作句を続けたことである。この芳伸に、二十歳台から唯一無二の門下生と自任した山下繁郎が平成元年八月号のぶ誌60年記念号に執筆した「山本芳伸回顧」と題する六頁の長文中から、関係箇所を以下略記しておこう。

「芳伸がなぜ『老い』を究極のライフワー

クに持ってきたかは『ふあつと』の昭和55年3月号の真珠園の選後評で、末尾に彼はこう明確に書いている。

「私は『老い』ほど豊富な内容をもっている時間はないと思っている。死へ向かうギリギリのつかの間の虹でもある老い。私はこれをとことんとりあげて詠み続けたい。(中略)私もこの人生の最後のときを、老いの呪縛を、逃げ出さずに、その呪縛のなんであるかの問題を、充溢した老いとしてとらえたい。そして川柳的にどうあるべきか、そんな願望でこの巨大な『老い』の氷壁を仰いでいる。少しでもその山裾にでもたどりつきたい」

この四百字足らずの一文に、老いーを究極のテーマとして20年間詠いつづけた芳伸の考えが凝結されている。(以下主なる老いの句)

ガムを噛む老いの酒宴の終り近く 芳伸
春画一枚老いに脈打つものがなし 〃
神を否定老いの布団をかむるとき 〃
義歯はすす性器にひきずられてゆくか 〃
霊柩車老いの台詞はどこにもなし 〃
一本の紐にすがった老いの死処 〃

芳伸が老いへの転機となったその原因には二つのことが考えられる。

まず第一に健康上の理由である。

酒嫌いでリラックスの暇がないことに加え

性来の神経質な性格もあって、浴びるほど飲んでた胃薬や、無類に好きであったコーヒーによつて痛みつけられた彼の胃はパンク寸前の変調から「ガン」ではないかの思い込みが強く、よくそのことを友人へ口にしている。

その第二は、環境の変化である。ニヒリスト、プロレタリアを自認していた芳伸が、高度成長の先端を走るトヨタ自動車に籍を置いていたために、次々底上げされていく経済状態の中で、新居を建て三軒の家作まで持てるようになって、長い間持ちつづけていた精神基盤を失ったのではなからうか？それが詩心の飢え、文芸作家としての渴きをもたらし、かつて多くの宗教家がそうであったように、芳伸は川柳という媒体を通じて求道者の列に入ったのではないだろうか。

老いーを直視つづけた永年の歳月は、もうただの川柳家としてではなく、それはもう比叡山で千日行を勤める僧侶と同じ道をたどっていたのである。あの大変な老いの一句一句はどう解剖してみてもそれはもうなんの意味もなさない。芳伸独りが孤高の道にいたのだ。

七十の下駄ひびかせて死にとうない 芳伸
芳伸はこの至極人間臭い絶叫を残して永遠の眠りについたのであった。

▼次号は「篠原 北斗」

誹風柳多留二四篇研究

3

清 贊。「世帯じみてる」の表現妙。
佐藤 贊。

橋本秀信・粕谷長生

山田昭夫・伊吹和男

大野秀二・小栗清吾

高橋啓之

清 博美・佐藤 要人

15 はかまこしあてたを女房くやしかり狐声

橋本 袴腰は袴の背後、腰に当たる部分の称。男子用のは梯形の厚紙または薄板が縫い込んでいる。（『江戸語の辞典』）

葬式帰りの大一座の句。お葬式だということで、亭主が正装の袴をはくとき、恰好よくするために後から袴腰を押さえてきれいにはかせてやったのに、吉原へ行くとは、何も面倒見ることはなかったんだ、口惜しい……という女房の気持ち。

よし原と知らずにあてるはかまこし

二三二二

清・佐藤 贊。

16 女さかしくてもみぢうりそこない 串柿

橋本 諺「女賢しくて牛売り損う」（女の利口なのは大局に通じないためとかく事をし損じる）のモジリ。今なら女性差別とねじ込まれそう。

諺の意味を裏返しにして、字義どおりに解釈して詠んだもの。女房が目から鼻へ抜ける

14 四ツまで八世帯しみてる二十けん 一口

橋本 四つ時は不定時なので季節により違いますが、午前または午後の十時。この場合は午前二十軒は、浅草寺仲見世より左に折れ、伝法院の向う側にあった茶屋の称。古くは三十六軒あり、歌仙茶屋と呼ばれたが、後二十余戸に減り二十軒茶屋と呼ばれた。（『江戸語の辞典』）

二十軒茶屋については、佐藤先生の『江戸水茶屋風俗考』に詳しいのでそれを紹介する。

「浅草寺御地内では、仁王門・随神門が暮六つから翌朝の明六つまで閉ざされる筈であり、したがって奥山や本堂脇の茶見世、楊枝見世（中略）などは、暮六つ前に店を畳んで御地内の外に出なければならなかった。二十軒茶

屋や仲見世の土産物屋などは、山門外であるからこの門限の影響は直接受けていないが、御触書の営業時間にも抵触することでもあり、やはり暮六つを限りとして見世を仕舞ったのである。（中略）水茶屋の朝は遅い。それでも五つ半時分（現在の九時頃）には見世を開けていたようである。ただし、午前中は母親などが見世番をしていて、昼時分にならないければ粉黛の娘たちの姿は見られなかった」。

紹介していたら、句解まで述べられていた。要は、十時頃までは婆さんばかりで色気も何もありやしないということ。

昼まへハ優婆夷出ている二十軒 四七二四
四ツ前は老イにけらしな式十軒 一五二四
二十けん四つより前ハなみの茶や

安四信 5

ように賢いので、紅葉見物と言っても先刻お見通しで、悪所行きはおじやんになつてしまつた。紅葉は正燈寺→吉原、海晏寺→品川、どちらでもよい。

女さかしくてもみじつれぬなり 一二二二

清 賛。愚亭賢妻。

佐藤 賛。

17 しやうばいにさゝわる地帯やのあばた

狐声

橋本 ささわるは障と同じ。「さ」は接頭語。妨げになる。邪魔になる。「(日国)」

『賤のをだ巻』に、

其頃(注・明和年間)は先地紙売とて四月半にもなれば、奇麗なるひとへ物に(極暑といへども)単物足袋を用)足袋、雪駄はき、地紙の形にこしらへたる箱を三ツ計、其間に骨を入たる角長き箱を組入、(中略)肩にかけ、地紙々と呼て売歩行たり、屋敷々々の台所に呼込て、扇を物好にあつらへ、又即席に折るもあり、よき慰にて、下女はした迄、地紙うりの男つきによりて、取廻して、いらぬ扇を折らするものも有り

とその風俗を記している。地紙屋は女性専門の商売なので、のつぺり

とした色男がもてる。それが顔にあばたがあるとすれば商売にも差し支えよう。男の女に對する美醜の尺度がそのまま当てはまる。

女房になふられて出る地かみ売 二一九

見へぼうでしつきやくまけの地紙売六 一〇

清・佐藤 賛。

18 大人シハ六郷むす子姿とうじ 一口

橋本 大人は、師匠・学者などの敬称。先生

(『江戸語の辞典』)。揶揄的にも使われる。

この句、よく判らない。息子が正燈寺をだしにしての吉原行は川柳の定番であるが、對比して大人がなぜ六郷なのか?

遊びの初心者である息子は、正燈寺の紅葉などとかこつて回くりどい策を弄するが、その道の大家先輩は、浅草観音からすぐに六郷屋敷の前を通り、吉原へ行く、というようなことか。

粕谷 ドラ息子には正燈寺など理由をつけないと吉原へ行けない。大人ともなればそんな言い訳などせずに真つ直ぐ六郷邸の脇を通る。

伊吹 礎稿と粕谷説は全く同じと言つていい。吉原へ行くのに理由付けしなくても行ける人を大人とした。礎稿及び粕谷説に賛。

大野 大人ともなれば吉原に行くのにも売

ものが違つ。

ひんのい、きやくハ六郷さまをつり 二二一九

六郷をつつて殿様御しくじり 天五札二

小栗 大野説賛。「六郷様のお屋敷へ行くから」といつて出掛けてもおかしい人が大人である。息子はそんなことは言えない。

清 賛。つまりは殿様と言われる人物の吉原行き。『川柳吉原志』では、大野氏引用の「ひんのい、……」の頭注として、「殿様六郷邸訪問に託して吉原遊び」とある。

佐藤 大野説賛。ここで言う「大人」は、身分の高い武士のこと。

19 ぶどうをくいしまい灰吹をすてる 狐声

橋本 ぶどうは甲州名産として当時から有名であつたが、まだまだ珍しい果物だつたよう

だ。ぶどうを食べた後の種、皮を灰吹きに入

れ、それがいいになったので捨てたとい

う、それだけの句。

高橋 賛。ただそれだけの句。

山田 同。今でもしますネ。枝豆とか……。

清 賛。異質なもののとりあわせが面白いという句。日常見掛ける風景。

佐藤 賛。

秀句鑑賞

同人吟 安藤 寿美子

— 2月号から

本日機嫌とこころにより曇り

木本 朱夏

「月日は百代の過客にして、行交ふ年も又旅人なり」。思ひおこせば今日まで、二十数年川柳をやつてまいりました。生きるかぎりのもろもろの感情を、十七字で表現するためには、言葉を選ばなくてはなりません。一つの言葉に深い意味を持たせてまとめるのは、ともすればひとりよがりになりかねません。

『川柳塔誌』をひらくと実にいい句が並んでいます。皆えらいなあと、私自身は落ち込んでしまします。一つ一つの川柳は作者の心の結晶です。心に生まれた感動を句にするのに、すらりとまとまる事もあるし、苦心惨憺ひねくり回して仕上げても、駄目という事もあります。そんな時「ボキャ貧」はつらいのです。言葉が豊富であると、自己表現はす

らりとできます。その為には、なるべく多くの文学にふれておく事が必要だと思います。もっとも七十歳をとおくに過ぎた頭では箴水をすくうように、いくら読んでも右から左へさつさつとぬけおちてしまつという今日この頃ですが。

振り向かないことが長寿の秘訣かも

川島 飄云児

老人はともすれば昔はよかったと言い、目の前の現実には否定的ですが、いつも前向きな姿勢で、明日に希望をみつけていることが健康の秘訣でしょう。

よつぽと悪い事の他 皆ありがたし

本間 満津子

この句の前で私は何も言えませんが、悟りの境地でしょうか。このような心境に到達されているからこそいつも明るく優しくいらつしやるのでしょうか。よつぽと悪い事が次々に起こる世の中ですが、どうかいつまでもお

元氣な川柳の先輩でいてくださいませ。

きれいだと娘に暗示かけておく

村上 ミツ子

私の小さい頃顔を見る度にこの子はブサイクやと言つて叔母がいました。私はそんなにブサイクなのかと自信を無くして大きくなり、恋はいつも片思いでした。ブサイクでもいいやと思えたのは、四十歳近くでした。美しいと言われたら美しくなり、賢いと言われたら賢くなるのが人間なんですね。

バレンタイン今日限定のコントだよ

川上 富湖

義理チョコでご夫婦がもめる事などないと思いますが、ちよつと好きな人と言葉を交わすきっかけにしたり、自分で主役と演出をするコントなんて洒落ています。今日限定と言いきられたところが素敵です。

水くぐりほむら潜っている肋

福井 桂香

いろいろあつた幾星霜をすべて胸におさめていつも美しい微笑をしていられる作者をすばらしいと思います。

哲学もぶらさげている縄暖簾

楠見 章子

さまざまな機械文明が人間を支配している現代、哲学や宗教は社会の表面から遠ざかっ

たようにみえます。だが、どっかい一人一人の人間の心のそこには、したたかな哲学が秘められています。だからこそ人間らしく生きていられます。コップ一杯のお酒でこれ又したたかなオヤジさんと体験的哲学論をたたかわせましよう。

いつまでも枯れたくはなし陽を仰ぐ

奥田 みつ子

どうかこの平穩無事がすこしでも長くつづきますようにと、誰しも願うことは同じです。あの地震を乗り越えてこられたからこそ、その平穩をじっくりと噛みしめていらつしやると思われまふ。

二月二十九日が誕生日です

中山 雅城

それだと四年に一つしか年齢を取らないのかなあ。そうだといいなあ。この作者は頭に数字をすえて句をまとめていられます。一月号は一でした。とても難しいけれど面白い試みだと思えます。十二月までが楽しみです。

ほどほどの雪なら好きな北陸路

増田 紗弓

環日本海文化圏のなかで、北陸は数々の遺跡史跡があり、風光明媚、温泉はふんだんにありすばらしいところです。そして雪の降り初めの風情の美しいこと、加賀友禅や輪島塗

りなど数え切れないほどの文化があります。私の息子が山梨県で下宿していた時、雪が降ってきたので、「ワー雪や、雪や」と喜んでいて、雪国からきた友人にバカにされたそうです。豪雪をしらぬ関西の私どもは、少しの雪でもすべったり、電車が止まったりします。

豪雪地帯での雪かきなどご苦労がおりと思えますが、それだけに粘り強い気風をおもちなのが貴重な財産だと思います。

12・8平和の重み改めて

湯浅 馬洗

十二月八日の未明発熱す

牧 渕 富喜子

十二月八日一億知らん顔

岩 津 ようじ

十二月八日何の日キョトンとす

瀬 戸 まさよ

十二月八日忘れて呆けはじめ

森 茂美

この号の切りが十二月のせいでののか十二月八日の句が集まりました。印刷物で勉強した平和論より、戦争体験のある馬洗さんの言われる平和はずしりと手ごたえがあります。八日未明の発熱はついに生命とりの重病になりました。この日の戦慄を知らない幸せな人々に語り続ける者がだんだん減って来ます。

昭和十六年十二月八日私は女学校五年生で丁度学期末試験の前でした。「日米開戦ですけど試験ありますか」と職員室へ聞きにいった叱られた生徒がいました。私やないですよ！世紀末だろうと来世紀があるさ

菱田 満秋

落ち着いて考えてみれば、正しくそうですよね。世紀末だなんだと無理な借金返済でもあるまいし、騒がんでもいいのに、やたらけじめをつけたがるのも人間でしようか。ふと「元朝や去年の鬼が札にくる」という古川柳を思い出しましたが、ちよつと違つかしらん。

十二月松の廊下が騒がしい

驚見 正子

同じ十二月でもなんだか楽しいですね。千代田城のメインストリートを入々が行交い、そして忠臣蔵のオーブニング……。

ヒュウヒュウと地球が回る泣きながら

新家 完司

化石資源を食い荒らし、海も山も荒らされて作り出したのは核爆弾。すべて人間の仕業です。身近な例では産業廃棄物の野積みや海岸の埋め立て、ダイオキシンの心配があるのにゴミの分別出しすらない人々もいます。その報いを受けるのは、これまた人間です。地球を泣かせるような事は止めたいですね。

水煙抄

河内天笑選

優等生でないからながいお付き合
時は金くよくよしてる暇がない
帰省した子へ一本を追加する
履歴書に資格並べて職がない
コンサート紳士淑女になりすまし

横浜市 川島良子

ブランドでなくても豆腐うまい京
ブランドの一字違いに騙される
国問わず警官の顔同じです
お屋敷の跡にマッチの家七つ
少年にタダで遊べるとこがない

京都市 高島啓子

足元を這い上ってきた真実
半分はあなたの中に置く余生
美しい言葉に傍線を引いておく
美し過ぎる一人ばっちの冬景色
夕暮れてふっと淋しくなるポツケ

藤井寺市 太田扶美代

以下同文の次にくるのは但し書き
還暦という二周目をまだ迷い
首縦に振っては捨てること多し
面白くないからおもいつきり拍手
高い筆買ってきたのに字が拗ねる

綾部市 藤田芳郎

まだともう思いが絡む十カ月
飛びついた話まんまと騙される
極楽や極楽やねと露天風呂
リストラで僕の人生三幕目
残り火を燃えつかすごと飛び歩く

奈良県 出井澄子

年ごとに手抜きが増える大掃除
幸せが待っていきそうな年が明け
空想の旅へ頁がめくられる
幼子と同じレベルの口喧嘩
抱きぐせがつこうが今は抱きたいの

横浜市 秋元和可

横浜市 岡田芳江

おいしいね笑顔で朝が始まった
恋人のようになつたね観覧車
無駄生かす遊び心を誉められる
おくれ毛をかき上げ鏡に返事する
大吉のおみくじそつと胸にさす

横浜市 鈴江純子

逆算でバーマ日決める祝い事
重箱が嫁のセンスに若返る
世話してるつもりの子らに世話をかけ
旅先もバーゲン品に目が走り
街老いて子供らの声しなくなり

横浜市 生坂サト子

脇道にそれ整頓がはかどらず
一呼吸置いて笑顔がやつと出来
賑やかに正月らしく顔揃え
先走る心に水を差してみる
がむしやらに反対ばかりしてたよね

八王子市 井上京一郎

古希祝う花はちいさな手から受け
地酒かと念を押してる旅の宿
人柄を読んでつけ入る頼みごと
アンケートはいといえの阿呆らしき
不景気の空に変わらぬ日が昇る

横浜市 保田絹子

初日の出パワー賜れと手を合わせ
花よりもナースの笑みに魅る
見舞われたあとにストレスのしかかる
立板に水の説明わからない
負けん気が余生の自立支えてる

横浜市 巖田かず枝

春風に誘われてつい髪を切る
幸せの片棒ならば担ぎたい
流感も済ませ新年待っている
コルセットにすっかり頼り春の服
加入してお守りとするガン保険

横浜市 山梨雅子

手袋をはめて新築見せられる
おとなしい犬ですからと言われても
ハーモニカ吹く 時忘れ年忘れ
托鉢の鉢をのぞいて寄進する
クレジットカードでベット診てもらい

横浜市 豊田羊子

お嬢さんを下さいに来たなと思ひ
怒るまい不平いうまい年はじめ
感動も同じトーンで言う親子
習つて来た花に我が家のものがない
リビングに大王松が大きすぎ

静岡市 中西 雅

冬の蝶 花を求めて花となる

山茶花よご免ねといひ垣根切る

佗びさびのほど遠くいるくらしぶり

極楽に手のとどくのを待つ私

缶ジュース落ちたりんごのなれの果て

滋賀県 中 宗 明

午前さま障子に映る鬼の影

身を削る思いで貯めた預金減る

予期しない臨時収入ありがたい

不景気でもストーブリーク桁違い

好きなくせ言葉と態度裏腹に

高槻市 乙 倉 武 史

泥沼の景気政治が頼りない

不景気に入出ほくほくえべすさん

ぬるま湯の平和テポドン狙ってる

光りもの身に鏤めて目立ちがり

水戸泉 消費美学を主張する

高槻市 左右田 泰 雄

賽銭をまとめてあげて旅に出る

お茶をのむ上目づかいのベレー帽

ついでほしいからついである屋台酒

あなたブラック私はいつもレモンティー

淡雪をゆっくり溶かす思い入れ

寝屋川市 井 上 すみれ

ブライドが少し残って邪魔をする

三児のオムツ洗った楽しかった

ビー玉が名人だった兄も古い

ガラクタが溜って今はノイローゼ

老眼鏡三つ一緒にカクレンボ

八尾市 與 田 明

国民をいじめたらぬか消費税

年末に逝った人から賀状くる

お年玉孫に渡せば親が取り

熱燗で生そばを食う除夜の鐘

人の乗る組だろう手術台

大阪市 三 浦 千津子

心地よい目覚めは今日のゴースサイン

申告の今日スムーズに暮れて吉

物指しを替えてバランス取る尻尾

目くじらを立てた昔を笑い合う

生きのびて二年紅梅空に映え(心臓手術二年目)

大阪市 中 井 正 秀

おお恐や地震雷火事娘

失礼ないらない物をくれる人

近頃はご隠居さんはいませんな

うちの父ノストラダムスかと思ふ

忘れ物雨のおかげで持ち帰る

大阪市 一本勇太

ブランドがゆきぶりに来る自尊心

おめでとう喜劇のペンが転げ出す

女ひとり傷を脚色して生きる

一月の殺意は胸に伏せておく

透明な助言は胸にジンと来る

堺市 梶本哲平

ノストラダムス予言七月蟄居する

二位のYEN哀れ三位に蹴落とされ

元氣出し七羽めめざす兎とし

講演におばちゃんいちいちうなずいて

ノムさんのお宮が甲子園に建ち

堺市 和田つづや

色付きの夢で見ましたその別れ

引きずった夢もそろそろすり切れる

行く道が暗くてひとつ咳払い

やっちなえとお天道様がけししかける

生き様が冬の蝶々に似て来たよ

大阪狭山市 伊藤尚子

七五三に出合いシャッター頼まれる

値にほれて夫にせ物買つて来る

お呼ばれがないからシャネル眠ってる

日めくりに追っかけられた十二月

公園で内緒ばなしが冷えてくる

羽曳野市 山本たけし

喜寿の杯命ほのぼの雪見酒

春愁や亡母の忌巡る月おぼろ

蔑むまい明日はわが身であることも

自分史を一気に書いて梅香る

今大事今今今の積み重ね

藤井寺市 岸本寿代

病院の門を出てから涙する

神様に嫌われたのかつきがない

借金と追えばお金は逃げて行く

臘梅の匂いかぐわし冬の朝

ばっさりと切りたい無駄が多すぎる

岸和田市 徳庄美智子

赤札を付けて出したい釣書です

影法師お前背筋を伸ばしなさい

卯正月やっぱり月に兎居る

雪しんしん記憶の底のみつちゃんよっちゃん

引退するジョーダンだよジョーダン

岸和田市 宮野みつ江

足跡は宙へと続く枢閉じ

アルプスに足跡さがす一人旅

足跡のところどころにある楔

改めて偉大な星と知る別れ

亡夫ならこうするはずと選ぶ道

河内長野市 妹 背 尽呂久

小さな日本にバブルのつけは効き過ぎた

量刑に執行猶予なる尾鰭

巣づくりが器用で暮らすホームレス

したたかな妻に夫はくたびれる

本当の己れを見せる崖っ淵

大阪府 澤 田 和 重

理屈言う息子大きく見えてくる

寄り道がこんなにもある経歴書

恋の芽が無事に育ってゴールイン

折り込みのピラでスーパ―はしごする

ストレスを酒が上手に飼い馴らす

伊丹市 延寿庵 野 鶴

ウインドウズ開けて呼んでる春一番

福笹とトキメキ捜す宵恵比寿

美辞麗句本音が見えぬ午後の句座

やんわりと飾らぬことは攻めてくる

精一杯生きて飾らぬ妻の笑み

尼崎市 田 辺 鹿 太

守備位置を変えて不況に立ち向かう

無駄骨と知りつつ天に吠えてみる

ツーカーの妻が最近きこえない

金のこと心配ないと父の嘘

喝の字に怖いおやじが生きている

尼崎市 河 津 正 治

お手盛りを上手に捌く年度末

サポーターは勝つてゐるような盛り上り

落武者が野心に燃える二度の職

一徹も時代の風に逆らえず

野心などおくびも出さず風見鶏

尼崎市 清 水 久美子

三代目出来て至福の年男

ふらふらで付き合っている三次会

ミステリーも恋もなかったバスツアー

飛び飛びで賽銭箱にいた諭吉

金はないけれど持つてるデビットカード

和歌山市 武 本 碧

会えばまた健康法で盛り上がる

来て嬉し帰って嬉し孫の守り

気の早いところもやはり母譲り

いまいちの妻だが自負はあるつもり

愛情の発露となった平手打ち

和歌山市 水 田 秀 男

大阪にギラギラとしたパワーあり

亀よりも兎の好きな子供達

聞きたくはないのに入る電子音

厚着して背中丸めている子供

風の子が消えてしまった世紀末

和歌山市 岡本 八重子

元旦や先ず第一に日の丸を
初詣で氏神の鈴なりやまず
仏壇の灯が赤あかと年あらた
先祖からもらった城だ守りぬく
青い鳥まだ見つからぬ孫想う

和歌山市 上地 登美代

四季のないデザートが出て宴終る
ナツメロにあの頃想う人のいる
負けて勝つこの場ひとまず謝ろう
商品券はころふ顔とゆがむ顔
たこ焼のほこほこ心温くなる

和歌山県 村中 悦男

吉日の風が運んだ槌の音
病棟の長い廊下をベタベタと
＼縄のバランス妻に見せて張る
深い礼されて二度目の頭下げ
百態の兎を乗せて来る年賀

和歌山県 坂東 和代

ハードルを一つ越えてもまた一つ
喋りすぎつい失言をしてしまう
次の世は賢くなつてまた女
よその子のような顔して巫女つとめ
駅伝で佐川急便遅れとる

岡山県 国米 きくゑ

喉がかわく季節はずれの花が咲く
明け渡す厨すみまで光らせる
死火山だと思ひ込んでいた誤算
気楽さと淋しさやがて長い冬
パソコンの世界に欲しい人間味

高知県 百田 幸

世話好きが出すぎて少しうとまれる
亡き友の声が残っていたテープ
今のままなら長生きも悪くない
開け放し冬陽を入れる老いの部屋
泣きごととは止そうよ今日は二度来ない

香川県 辻 上 よしみ

人生観変えてくれそな遍路道
秤では計り切れない愛がある
生きてゆく試練不況に負けられぬ
口車に乗つてしまった泥の舟
鼻唄も弾み何だかい予感

今治市 越智 青園

ふところの深さに文句吸ひ込まれ
自分でも過ぎると思うお節介
春一番クレーンの先にとらえられ
墓参りやさしい風と立ち話
膝小僧抱いて理想は高くもち

松江市 松浦 登志子

自分流花も料理も財テクも
甘辛をこよなく愛し脂肪肝
仕舞い風呂入浴剤のぜいたくさ
右ひだり時を同じく五十肩
正直に話すと恐い人という

松江市 山根 邦代

転んではなるまいヒール低くする
現代の駆け込み寺が要る世相
風邪の菌うつかり貰うた気のゆるみ
鼻水がティッシュの箱を呼んでいる
寝てる間にカビを生やした餅の顔

島根県 武島 ちよえ

気まぐれで暦通りにゆかぬ四季
銀行の利子で素うどん食べて来た
飛び込んだ噂我が家で閉じこめる
春風に逢うてわたしも若返る
軋んでる骨を時々揉みほぐす

鳥取県 高尾 京

虹の家完成 遺児の夢ひらく
連れ合うて歩む幸せ噛みしめる
独り居に見えないテレビをつけておく
健康でありたく食に気をつける
手まり麩に故郷加賀の師を想う

鳥取県 平井 栄翁

轟沈の火柱浮かぶ花火の夜
料理より心おいしいおもてなし
酒の量知らず深夜の靴の音
縄のれんゆらりゆらりと客を飲む
雨止んで傘一本が重くなる

鳥取市 山宮 愛恵

還暦のうさぎ野山をかけ巡る
鍋の癖飲みこむ母のうまい飯
秘密ひとつ持ったらしいな大人びる
春の陽にしずかにとける冬の鬱
老いの耳むかし昔へ向きたがる

鳥取市 有沢 せつ子

優しさが男らしいと言う世代
学生がシルバー席に鞆置く
朝の記事見たくない字が目に刺さる
鏡からテレビを見せる散髪屋
前の山いつ眺めても安らげる

鳥取市 山本 益子

蹟いて再起の紐をしめ直す
人並みに大統領も職場ラブ
居酒屋ののれんくぐればみな仲間
虫のいい言葉の底にトゲがある
人生は善い友持つて芽を伸ばす

愛媛県

中居善信

好きは好きされど添いたい人でなし
深追いをするゝ火傷をしてしまふ
お惚けの上手に何時も引つ掛かる
どっちとも取れる言葉で逃げている

日立市

加藤権悟

兄ちゃんに貸した千円もどらない
ジベタリアン父の一喝から覚める
やきとりのコップに父の明日がある
炎え上がる海 日輪に手を合せ

伊丹市

榎谷郁子

何事も無いのを幸と知る齡
大空を持ち上げてゐる初日の出
古希過ぎて過去の扉を開けてみる
焚火には都会の憂さをどっとくべ

三田市

北野哲男

酒運ぶ仲居ヨイシヨと言う年で
クラス会 水と油も五十年
一桁のカラオケ嫌い音頭好き
幔幕の外も乾杯大成功

尼崎市

内田美也子

片言の孫にパワ―を貰う初春
めぐる忌に夫の足音遠くなる
冬ごもりしながら堪える不況風
たき火の輪離れ大工の顔になる

粗大ゴミ昔は魅力あったのに

尼崎市

野瀬昌子

連絡ノート親子の愛のパイプ役
母の声また聴きたくて受話器もつ
名人の手捌き見てる物産展

兵庫県

円増純子

倅せも半分ずつにする絆
次の代へ譲る柱を磨いてる
柱暦よ哀しいことが多過ぎた
居心地が良くて出られぬ兔小屋

倉敷市

家守政子

松の内貧乏神が遠慮する
正月はやはり我が家の掘り炬燵
嬉しい日嬉しい顔を撮っておく
落着かぬ受験家族の冬の風

岡山市

清水金太郎

笑い声大きな家から聞えない
大声で笑える事が何もない
珍しく電話のならぬ日は淋し
遺産分け血よりきたないものはない

和歌山県

中後清史

判らない明日にこだわる苦勞性
善人の嘘は尻からばれている
手ぶらでもよいが厚かましきは困る
制服の好みで決めた志望校

和歌山県 杉山 精子

嫁がせてやつと抜け殻から脱皮

福袋買う行列につい並ぶ

セピア色の青春しばし時忘れ

今日がまた昨日となりし日記帳

和歌山県 福重 美子

酒かりて息巻く時は負けている

信用度何処を測っているのやら

酒タバコやらぬに金が溜らない

我が家にも時々起る乱気流

和歌山県 森口 美羽

ピリオドを打たねば運が巡り来ぬ

わたくしの心を揺らす愛一語

逢うたびに魔性になってゆく女

やり切れぬ想いサロンで吐いている

和歌山県 和田 美寿子

いくつもの喜びを知る金屏風

飛んできた種一つぶが土を抱く

曾孫抱き成人の日を夢見てる

花柄の傘がときめく八十路

和歌山県 木村 親路

年金と寿命一緒に走れない

不景気で神と仏は大繁盛

いい年でまだちょっぴりと好奇心

まだ女バートでちゃんともてている

寝屋川市 瀧本 八十八

高望みせぬほうが良いタイガース

拒まれてときめきつゝの若き恋

拒んだら即退職と言う企業

目の敵イラク攻撃眼に余る

吹田市 西岡 豊

感度良いアンテナ張って老い楽し

留守電に任しておいて高斟

生涯現役教えられたり教えたり

海峡を跨いだ橋は空に浮く

枚方市 大昇 隆広

癒やされぬ思い蠢く夜の街

おやすみを言えぬコンビニ夜に沈む

自分史に書く程もない日を今日も

逃げたい事一時預けて旅の空

吹田市 三浦 憩

穏やかに鳴らして欲しいクラクション

しずしずと女に変えてゆく着物

甘すぎるシヨパンをひとり聴いている

好きな歌ところに浮かぶ散歩道

大阪市 伊藤 博仁

紅白より懐かしの歌がよろしうおす

灸すえて狭いわが家の大掃除

皮は香に絞って鍋に後は風呂

解凍の手間暇省く立ち話

大阪市 小泉 ひさ乃

夫から初めてもらうお年玉
温かい話に弱い涙つば

簡単に引受けてから四苦八苦
好きな事するとお尻に根が生える

大阪市 平井 露芳

新春や富士もきれいな貌を見せ
橋懸り串本節が歌えない

朝寝してテレビで見てる初日の出
飾りものにされて羽子板世をなげき

大阪市 尾崎 黄紅

猿面に似て猿歳を笑われる
盲導犬みな善人と心得る

天井のシミ亡父に似て亡母に似て
言いたいことが言えず余白が喋り出す

大阪市 亀井 円女

拘わりの味で楽しい煮炊きもの
解る分かるとさも簡単に言うお方
道すがら鳩に餌をやり叱られる
コンサート白髪婆さん私だけ

大阪市 中村 叡子

コソコソと夫が何か書いている
なるようにならずテントが増えていく
美食家のつべこべ味を申し立て
なりふりをかまわず蟹の食べ放題

大阪市 立蔵 信子

春が来れば自然に答えでるだろう
失敗の数ならひとに勝てそうだ
気のせいとおとこのほうがすぐ詫びる
くもり空それも断る理由です

大阪市 榎本 舞夢

奥さんのパワーが僕のくすりです
カレー皿のみが知ってる殺人鬼
自分史をまだ書けないでいる私
美しい仕草で妻の椅子にいる

大阪市 中澤 伽羅

手袋の中で切符をにぎってる
元氣すぎ仲間はずれにされました
お招きをされた時だけ行く芝居
落ち込んだときは出歩き食べ歩き

大阪市 榎本 日の出

孫帰りやつとわが家の寝正月
がむしやらの働く人の目がきれい
神様に礼も言わずにまた願い
ゆつくりと進む時計が欲しくなり

堺市 見本 ちや子

旅の前 目覚し二つ置いて寝る
前世より結ばれていた赤い糸
響きある君の歌声胸を打つ
大波も小波もきつと春になる

堺市村上靖雄

暗証を忘れ身元を疑われ
大声で場所を構わぬ大阪弁
見栄張って入れた私学で子も苦勞
節分の豆食べ残す齡となり

羽曳野市 川田 晋

卒論を褒められながらフリーター
通販の月賦 家計を脅かす
ボキヤ貧がパフォーマンスの小渕流
外面は優し家では怖い妻

羽曳野市 芦田 絢子

頂点のその後自分史語らない
バステルカラー似合う余生を送りたい
すき焼きの手順が亡夫に似てきた子
乾燥の七草もある野菜棚

河内長野市 大西 文次

ハングリーしたたか振りを見せつける
招き猫貧乏神を呼びとめる
越冬の燕仮設の軒を借り
下取りも担保も効かぬ老い二人

富田林市 大橋 鐘造

義理チョコを貰える種を蒔いておく
遮断機の向こうも仮面つけている
結局は外野同士の小競り合い
せわしくて転がる石に苔生えず

富田林市 中井 アキ

妻にだけ自慢の出来る事がある
飾るだけ飾って少女病んでいる
捨てた恋今頃惜しくなってくる
あと押しが欲しい私の悪だくみ

河内長野市 杉谷 カズエ

ボケはった噂自分に忍び寄る
八つ当り同居の弱みさからわず
いい嫁であつたか自分振り返る
身にしみる親切貰う他人様

河内長野市 水谷 正子

内定を墓標に告げるワンカップ
年流れ勘九郎ちゃんが大石に
大石の役者片手は知っている
柳友が逝きランタンの弁士消え

岸和田市 不破 仁緑

呑んで食て薬を飲んで三ヶ日
目覚めればまだ其処に居る貧乏神
マスクしてお札勘定してみたい
口下手を信じてくれる友が居る

橿原市 西本 保夫

おしゃれとは妻が帽子をまた変える
近頃は平和すぎると言う事件
ブランコにたまには座る老夫婦
お気に入り長いペランタ一直線

生駒市 川 端 きぬ子

カステラを厚く切ってる老人会
ダイエツト迷う心でバイキング
ラーメン屋喪服のままの二人連れ
残菜を生かせば変わる粥の味

京都府 前 上 英 一

丸文字で角の立つこと書いてくる
子へ繋ぐ亡父の語録を朱で囲む
幸せの証 素顔に陰がない
妻の目に叱られている電話口

京都市 勝 山 美千代

丁寧な挨拶後でどちらさま
現代子七草粥にそっぽ向き
京の町駅伝駆ける春の彩
健やかは宝と老いの道励む

静岡市 増 田 扶 美

未来永劫と契った愛の脆いこと
艶やかに舞う八十路友若々し
幸せは打ち込むことのある老後
地蔵様冬日を膝に笑み給う

川崎市 和 泉 見早子

お歳暮に寝た子を起こす酒がくる
戒名の値ぶみをしてる会葬者
そば枕寝返りすると波の音
背くらべしたどنگりのかすり傷

横浜市 北 沢 街 湖

名優はさつき笑わせ今泣かせ
町内の神社で済ます初詣で
メンデルの法則でしようドラ息子
跳ねた字が昔のままの友の文

横浜市 山 下 省 子

水仙の咲くのを待たず母は逝き
反省に追いつめられる大晦日
焼芋を分けて夫婦が丸くなる
福袋抱いて息つくティールーム

横浜市 三 村 八重子

カギツ子のころ支えるママのメモ
ガキ大将消えた路地から電子音
紺碧に煙ひとすじ君は逝く
昨日来た新車の屋根に猫の跡

横浜市 平 達 也

折り返し点が教える彼我の距離
子を産んで靴下なみに強くなり
祝い酒ロレツ回らぬエビス顔
先生に八ツ当たりする寝たつきり

横浜市 近 藤 道 子

さみしくて誰かに電話したくなる
遊ばねば足腰ぐんと弱くなる
今年こそ吠えてくださいタイガース
これからもドジとっかかり演じます

新潟県 高野不二

消費税込みで売ってももうけてる
政治家もしやべればチラリ本音が
出ネクタイの緊張感につかれた日
よくよくの難儀賽銭持つて行く

秋田県 湊修水

耳立ててよい知恵欲しい兎年
手のこんだ衝動買いに駆りたてる
米寿きて白寿をのぞむちからこぶ
とれたての自慢白菜さげてゆく

札幌市 三浦強一

米びつに米がいっぱいある至福
探しものだけで半日ふいにする
雪ゆらりゆらり二次会三次会
雪ふふふ微笑んでいる千鳥足

北九州市 岡田幸生

感謝して救急箱を詰め替える
手を焼いた子供からきた熨斗袋
快復の妻と腕組む初詣で
Uターンした子の歎に温い土

唐津市 宗弘

神仏を泣かす事件が湧いて出る
萎えるまで二兎を追う気の春の酒
人殺し出刃の替りに白い粉
水墨画○の一筆ままならぬ

愛媛県 黒田茂代

娘が病んで家の灯りが小さくなる
娘の肌を拭うタオルを熱くして
せめてもの幸運右足が残る
病室の風の唸りが悪魔めく

愛媛県 宮本末子

木の実降る我がふる里は過疎の村
櫨の芽や逢わねば遠い人となる
注がれたお酒に女見失う
昨年の年賀に向かう筆を買い

雲雲市 加藤スズコ

カラオケに心の元氣動き出す
満ち足りて我慢を知らず逆らう子
競う技アジアをつなぐ同じ顔
暖冬のなれに木枯し身にしみる

松山市 山之内八重美

い草の匂い寝転んで見る青畳
無口だがいたわる心通じ合う
乾杯をした満天の星月夜
老いてなお磨きのかかる渋い芸

香川県 向山治延

余命など分らないので良しとする
無農薬安全信じ野菜買う
バーゲンで体どうしがこぜりあい
戦友会軍歌を唄う友もへり

益田市 岡田 たけを

大袈裟に腸のポリープ一つとる
病院へおてて繋いで行ってくる
運勢は吉だが坂で蹴躓く
仲間外れにされないように吸う貰

出雲市 川 島 和歌子

歳月が癒してくれた古い傷
仕切ってる嫁の流れについて行く
里なまり一期一会の山の宿
何事も詮策しない母の愛

島根県 菅 田 かつ子

旅先で行き交う人も旅人か
雪しんしん部屋には温いシクラメン
過労死は出来ぬと番犬ねてばかり
銀行は年金おろしに行くところ

島根県 松 本 聖 子

病人の話す言葉に力なし
休むことできぬ働きこれも幸
いろいろな戦いあつて皺ばかり
友の声こんな嬉しい励ましよ

島根県 福 間 博 利

ともかくもお世話様です足の裏
人形が旅がしたいと駄々をこね
旅の連れクラスメートがいいと言う
法律を作れど役人ぐりぬけ

鳥取県 藤 山 弘 子

一芸で大学入試突破する
終電はいつも貸切り顔見知り
指さしでその日の終りチェックする
切れる子へゆとりの教え伝えたい

鳥取県 山 内 芳 江

追加してほしい手酌の咳払い
春風にうかれ衝動買いをする
七癖が移る親子で憎めない
気休めの南京錠をかけて置く

鳥取県 西 尾 敬之介

不景気にタコ焼の蛸小さくなり
トンネルの落書き洒落た味がある
淀みなく般若心経読める齡
野菜売る無人市にも見張り番

鳥取市 福 島 庸 二

事あればいつも脇役買つて出る
ライバルの手の内知ってトライする
自分史をドラマのように書き残す
あれこれと夢を描いた定年後

鳥取市 森 本 和 子

正月の酒はうまくて喜寿の春
初夢に遍路姿の夫婦旅
消費税大手スパー反旗振る
風の子が塾に隠れて町しずか

鳥取市 夏目健一

日本は一度つぶした方がよい

女ごころが人目を避けてタバコ買う

雷鳴は男の叫びかも知れぬ

あの弱み言いたいことも言えずいる

鳥取市 近藤秋星

年の瀬を感じさせない暖かさ

頑張れよ冬は必ず春になる

悩みのない人などいない人の世に

きのうは餅つきしていた友の訃報聞く

米子市 足立由美子

宝物あつかうように湯呑み拭く

価値観がおんなじ友が宝なり

少し乱れた歩幅で春がやってくる

宇宙から春のほほえみ届けられ

米子市 猪森スミエ

屋台店笑い転げる風車

今朝の雪眠りこけてる鹿おどし

折鶴の中の一羽が羽搏いた

脳活かすテレビにメモが追いつけず

米子市 門脇晶子

塩壺に母の手紙がおいてある

丸い背に苦労話が溜めてある

ワンピースに負けそうになる視箱

板前の嘘を器は知っている

泉佐野市 大工静子

メンタイコ孫に送られうまさ倍

あった日が別れと思えと遺言に

七粒を悪しき所に効けと飲む

唐津市 井上勝視

美人論いつも妻には妥協する

鷹揚に上座で受けるタダの酒

フリーターなどと恰好つけてるが

唐津市 岩崎 實

本物の匂いをつけて帰国する

こだわりをさらりと流す知恵の水

書くだけはしっかり書こう筆洗う

唐津市 樋口輝夫

失った財布の中にある未練

手鍋さげ同じ曲弾く五十年

明日からは等身大の夢見よう

高知県 桑名孝雄

正月の日の丸ゆり平和だな

嫁姑その真ん中に僕が居る

後釜がないぞ女房はお大事に

徳島県 安宅美代子

つくしんばたと子連れで出ておいで

食べさせて着せてやったと言う身内

新居にはシャワーも付けて嫁がない

鳴門市 八木芳水

愛媛県 安野案山子

不況風バチンコ玉に加勢する
胃袋の疼き妄想かけめぐる
回れ右するとあしたが見えてくる

香川県 松村輝夫

風起こす願い叶えた千羽鶴
手を上げて答忘れた参観日
鳥も鳴く森で腹式呼吸する

香川県 原賢

わが子ならもつと厳しく叱るのに

有り金をはたいた株が天下落

厨房の隅に置かれた秘伝味

今治市 塩路よしみ

初暦小さい夢をふくらます

平常心もてばこころは春の海

ぼけてなど居れぬ年金ありがたい

今治市 渡邊伊津志

新しい自分を見付け出す奉仕

睡蓮の心捕える青い池

精霊が宿った青い雪明かり

今治市 村上久美子

青い鳥だったと逃げてから気づき

口出してズレに気づいた鯨尺

人差し指に街のスズメは群れたがる

貧乏が恥ではないと信じてる
先頭を捕えるまでのハイペース
母さんの小言に愛が溢れてる

宇部市 中田忠夫

とっておきの地酒あるのに来ない友
点滴を見つめゆっくり陽が沈む
抱きあってテトラポットは仲が良い

宇部市 高山清子

傘寿です紅もつけます恋します

業悲し恋の鞘当て老ホーム

老い二人労り合って初春迎え

出雲市 梅ミツエ

黒雲がこわい顔して空に居る

松の枝初雪降って夢を乗せ

SLのはいた煙の冬景色

出雲市 岡あきら

病院へ薬もらいにおめでとう

同窓会長寿する顔読み比べ

名誉職袋叩きの同窓会

島根県 谷岡ふみ

雨しとど無沙汰の子等に便り書く

好物のよもぎの餅を亡夫に供え

馬鹿な事聞いても笑い教える娘

岡山県 土居 ひでの

除夜の鐘今年受験の神参り
カラオケになると元氣の出るマイク
松三日受験に休みなんかない

鳥取県 加藤 公子

神前に揃い鈴振る家族でき
元旦も一二一二と万歩計
山陰の冬にもったいない夕日

鳥取県 西垣 美知子

地味だけど素顔が光る妻が好き
けんかしてもやはり二人の床をひく
縄のれん充電という酒に酔う

鳥取市 松本 つね子

流れ星私の夢が一つ消え
美しく老いる夢見て紅はたく
来る春に胸ふくらませ茶を点てる

鳥取市 録沢 風花

エネルギー目減りしてゆく音がする
自己破産 宝は裏に埋めてある
若い日の残した夢を紡ぐ日々

米子市 小塩 智加恵

長生きがしたくて南瓜 柚子の風呂
不況風蟹の安さに救われる
誰のための仏間作るか大工来た

宝塚市 飯西 ミサヲ

日溜りで蟻の戦争見えています
赤いバラ風呂に浮かべてひとり住み
十六夜を猫と見ている気楽さよ

尼崎市 尾宮 弘治

不器用でわが子叱ってばかりいる
女百人心も百のバーコード
就職が内定そつと内祝い

尼崎市 森安 夢之助

婆さんが近所に配る嫁の愚痴
市議三期嘘も上手になりました
節くれた指を誇りにしてた亡母

尼崎市 軸丸 勝巳

一年の重みひしひし七十路
つき合っていくしかないと医者と言う
孫がくる孫のペースで日が暮れる

川西市 田中 喜俊

プライドを捨てて楽しい人生に
杓つきの餅おいしくて肥るかも
過去形の話が多い老人会

姫路市 服部 一典

万歩計午後のコーヒー彼を待つ
巻き舌が名刺をくばる縄のれん
残すものないから兄弟仲がよい

最後には男はええと捨てぜりふ
兵庫県 植村 雄太郎

親のいる中と姉妹寄ってくる
ほとばりに外遊という解熱剤

兵庫県 安達 厚

吊し柿の甘さ故里呼び寄せる

楽しみの深追いをして火傷する

金婚を祝うまではと万歩計

兵庫県 倉垣 恵美

雪積り鉢の木ふつと謡うなり

分け分けをしようね幼き日にかえる

蜜蜂が蜜蜂社会を守るように

兵庫県 高見 末野

福袋孫娘とわくわく中覗く

お歳暮の鰯の調理は大変だ

不況坂転げて落ちて福つかむ

兵庫県 仲井 素水

何日から余生か老いて日々多忙

年金の出口ぼっかり開けて待ち

名水のこんこん尽きぬつるべ井戸

兵庫県 徳平 毬子

おせちよりラーメン食べたい現代っ子

風邪おして幸を祈って初詣で

何処もかも活気乏しいお正月

弁当の旨さ広がる秋の庭

古傷がときどき秋霖に疼く

あと戻り出来ない今日の鏡見る

兵庫県 谷田 多美子

達筆の賀状ゴメンと伏せたまま

美味しい水 水洗トイレも同じ水

娘が逝った妻が逝ったと歳の暮れ

笑面市 唐住 実

お守りのつもりで指輪はめようか

好きな物花より何と答えよう

人前で前歯が急にボソと抜け

高槻市 執行 稲子

老人力で悩みは天に任せよう

ウエディングドレス呉服屋の娘で許されず

喜寿の坂ジャンプで越える世紀末

高槻市 江原 秀夫

忌憚ない意見に空気重くなる

個性的ですねとやんわりほめておく

浮き世の染みに三途の川が汚染する

東大阪市 今岡 貞人

わが菜園出来た野菜のありがたさ

喫煙家肩身の狭い席ばかり

結婚に無頓着派が我が家にも

八尾市 平川幸枝

不本意に一日が終るカレンダー
闘病に飽きた夫に茶をしぼる
プレゼント娘が選ぶ若作り

八尾市 驚見章

窓外の景は我には別世界

目を閉じてリハビリに行く時を待つ
リハビリに陽はサンサンと雲もなく

八尾市 田中トシエ

マスコミと同じ視点になる怖さ

新聞より妻がチラシに興味もつ

神によく見えるところに絵馬を吊り

八尾市 高橋明子

キンさんも長生き嫌とくり返す

橋本さん鼻下長く足短

糞虫もたまには太陽見たいかな

八尾市 井尻民子

アリバイのどんわと読んだ妻の勘

一人居ののんびんだらり昼の色彩

不条理の日本犯罪多発する

大阪市 安達はじめ

別れ際小指が罪をまた一つ

重ね着を脱いで気づいた春の風

はつきりと時代が違う孫の部屋

大阪市 松岡千恵子

国訛り直そうとせず六十路坂
物忘れ思いの位置に立ってみる
国会の列に入るなら襟正せ

羽曳野市 西村りつえ

うきうきにスリが待ってた初詣で

影踏みならきつと勝つだろ KONISHIKIに

風雪に耐えた老樹がもたれあい

羽曳野市 安芸田泰子

言い訳へ咄嗟の嘘が出る恐さ

賽銭を一寸弾んだ好い願い

夢でしか会えぬ亡夫は無口なり

羽曳野市 川口信子

金で済む話へ金のないつらさ

ポケベルがお茶のさそいに返事する

満ち足りた心落葉を踏みしめる

岸和田市 木村正剛

初めから当てにされてる寄附の額

フリーターに就職したと娘言う

わたしでもゴミの量なら減らせませう

岸和田市 亀井皎月

日展見る妻の批判の手厳しい

逝く際の顔に曾ての個性なく

記憶には厳しい恩師生き続け

河内長野市 印 藤 智 子

一人ずつテレビ抱えてお正月

土付きの野菜嫁入り先がない

寒風に塾のたれ幕ゆれている

河内長野市 木 太 久 正 一

餅つき器今年も無事に役目終え

掃除すみ庭にほどよい俄雨

年末の掃除の付けが股にきて

河内長野市 柏 本 靖 子

ご免ねが言えず淋しく日が暮れる

太陽に情けを貰う日向ぼこ

盃を交わし手の内探りあう

大阪府 奥 野 義 夫

三猿になれない妻のお世話好き

駅伝の責任感が走らせる

美人かも知れぬ卑弥呼の鏡好き

横浜市 小 野 句 多 留

法要のスリッパ行ったり戻ったり

不況風無神論者も神頼み

運不運そろそろ結果出る歳に

横浜市 布 山 嘉 信

休肝日を返上させるお正月

紅葉狩り句碑探訪を兼ねている

百名山の中に故郷の山があり

横浜市 長 島 亜 希 子

言いたいこと言って嘸家稼いでる

税還元セール政府を嗤ってる

夫居る日は休みなく家事をする

横浜市 田 中 笑 子

悔しさをぶつける場所にいる夫

風の子に重ね着させて塾通い

ぎこちない別れ昨日を引きずって

東京都 吉 田 土 風

神などは信じてないが初詣で

目一杯な事頼まれ神もあきれ果て

闇雲に走り続けて古希迎え

東京都 井 上 つ よ し

入選の笑顔にじわり湧く涙

百点を取った笑顔がとび跳ねる

紅白が昭和を遠くとおくする

静岡市 大 村 正 雄

先約があるのと妙に気を揉ませ

褒められて簞笥貯金もつい喋り

思い出を乗せて今年も黄砂来る

今治市 野 村 清 美

ユーモアで心ぬくめる苦勞人

落し蓋ぐつつ愚痴を伏せておく

過ぎたこと忘れなさいと許される

今治市 中村好恵
アンティークの花瓶に出世した徳利
もの言いへ判定くださのはビデオ

千葉県 大川晩翠
携帯がひっきりなしに鳴る街だ
伝言板 匿名テープ 落し穴

横浜市 荒井広和
人情も義理も不況の風で飛び
スリム化の犠牲で増えるホームレス

横浜市 福田由美子
請願の署名 知人で並べられ
初詣で願ひ届かず父が逝く

横浜市 伊藤ふみ
もつならば特別派手な杖選ぶ
じゃがいもの芽ブツブツ切って業を煮る

横浜市 金森徳三
休肝日実行できず反省日
文化的若く住むには高くつき

野田市 那賀島雅子
さい銭の音で硬貨の値がしれる
否よとは言えない性で笑い皺

三重県 尾崎勤
勝率を5割とみれば楽な坂
粗食した甲斐ありドック異状なし

尾張旭市 三浦きぬ
一人居は七草過ぎも屠蘇残り
クルーズで根室花咲蟹の味

池田市 木村一笛
初荷負い触れ合い見せるローカル線
空つ風吊り橋揺れる過疎の里

豊中市 岸田知香子
賽銭が頭上飛び交う初詣で
何所からか亡母の名入りの鯨尺

吹田市 後藤志津香
携帯の電話は街に鳴りひびく
苛立ちを押えてくれるシクラメン

枚方市 二宮紫鳳
老眼鏡 我が人生を変えてくれ
初春を祝う雑煮の食べっぶり

東大阪市 北村賢子
まなうらに笑顔の亡母が居てくれる
誰か居るだけで空気があったかい

八尾市 山本宏
たよられて力不足を嘆く老い
新聞がチラシ重いと悲鳴あげ

羽曳野市 森田四三郎
リストラで就職難に拍車かけ
渋滞の反対車線ガラ空きで

富田林市 山原昭水
ボケぬよう見る聞くしゃべる歌います
図書館でちよつとエツチな本を読む

岸和田市 井伊東吉
穴ひとつベルトゆるめたお正月
正月の習い構わぬ核家族

貝塚市 吉道時子
生きているが下手なあなたに気を許す
ほとんどがひらがなになる老母のメモ

泉佐野市 稲葉洋
春がきた何処に何処にと貧乏神
近隣の話題も乗せて路線バス

和歌山県 中村君枝
消したつもり灯けたつもりに日々追われ
外で見栄張って家計は火の車

和歌山市 上地忍
気紛れに背中合わせば温かった
お年玉貰って嬉し六十路坂

西宮市 長谷川淳
攫われて行くゴミ送るオルゴール
今朝も会うあの改札の無慈悲さに

兵庫県 広瀬房江
心友と思ってるから波が立つ
傷付けぬよう初耳と言った嘘

兵庫県 北川とみ子
身内の話そつと素足で覗かれる
世渡りのつらさが溜る師走風

倉吉市 大下智子
寒いなど言ってられない初仕事
色白の妻に雪焼け旦那です

鳥取市 中村金祥
貧しさにピエロの笛を吹く男
新妻がちよっぴり色をつけて飛び

鳥取市 谷岡清子
頑固爺白衣天使にすなおなり
明日は明日駆け抜く風に生きる今

鳥取市 宮脇道子
縁あっていつくしむ嫁座ってる
大雪に赤い南天命懸け

鳥取県 橋谷静江
春の日へ浮かれ化粧も少し派手
軽快な母のラッパで動く朝

松江市 小川忠憲
嫁が来る福かも知れぬ過疎の春
七五三衣装がよちよちと歩く

島根県 槻谷仲子
初詣で賽銭箱の音しきり
冷凍の栗何よりの土産なり

沙湖抄

八木千代選

風下に立つて他力のありがたし
わらしべになると流れやすい止まり易い
我が影に出合つてはと息をつく
邪魔者をケシゴムで消す丁寧
私にも舌という名の鋭いナイフ
喜びの上から上へ牡丹雪
母がふと漏らすこよみのうらがわ
今日とも知らず明日とも知らず暦くる
復活をさせたいものに先ず尻尾
久々の寒気が顔を打ってくる
鉢巻きを締めてぐっすり寝てしまふ
ピカソの絵 良いと思わぬまま老いる
老いたるか 烈しくなりぬ愛と憎
ひなた水 他人の知恵を借りたくて
付け黒子の位置を昨日と変えて来た
時雨きてうしろ姿の真正直
セーターをほどく疲れを癒すよに
シクラメン爪先立ちがぎりぎりに
振り向けば昨日が小さく転がりぬ
どの家の匂いも少しきな臭い

鳥取県 鈴木 公弘	鳥取県 松本 文子	富田林市 大橋 鐘造	鳥取県 新家 完司	同	松原市 小池しげお	富田林市 池 森子	米子市 青戸 田鶴	海南市 三宅 保州	西宮市 牧瀬富喜子	鳥取県 乾 隆風	出雲市 竹治ちかし	西宮市 奥田みつ子	あきる野市 佐藤 季穎	和歌山市 古久保和子	寝屋川市 森 茜	和歌山市 川上 大輪	米子市 白根 ふみ	藤井寺市 高田美代子	米子市 政岡日枝子
-----------	-----------	------------	-----------	---	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	----------	-----------	-----------	-------------	------------	----------	------------	-----------	------------	-----------

ポケットの中で寝ている拳たち
定年のバスから降りた影法師
ほんの少しかくれる程にまいた種
シャッターをおろす小さな保障印
頬ずりをして手応えのない服を抱く
風狂の果てを叫んでいる柘榴
母想う時ふわふわの卵焼き
文鎮も跳ねて兎の一字よ
自分史の空白の部は水子塚
やさしさと荒々しさの君の指
神さまがムタ毛を生やすはずがない
俗世間 雪の心がわからない
句読点無理をしても打っておく
ここまでも生きた暦を宝とす
知恵づいた猿には見せぬ弾薬庫
贈り物貰い受け身になってくる
歳月を抱きしめている帯の位置
ところによりのところで何時もずぶ濡れる
円周の中心点が消してある
方向音痴で三途の川が渡れない
自分史のト書きに残す遺言書
冬銀河 ひとりの杖は細くとも
夫婦旅幸せごっこするように
少な目の愚痴に音符をつけたげる
日の丸の余白が暈けてくる怖さ
ブライドという厄介者が妥協せず

岡山県 小林 妻子	藤井寺市 太田扶美代	高槻市 左右田泰雄	米子市 驚見 正子	米子市 茂理 高代	和歌山市 木本 朱夏	富田林市 藤田 泰子	鳥取市 坂田和歌子	唐津市 井上 勝視	松江市 川本 畔	京都市 都倉 求芽	鳥取県 谷口 次男	寝屋川市 籠島 恵子	米子市 光井 玲子	唐津市 久保 正剣	吹田市 江口 度	寝屋川市 山本希久子	今治市 村上久美子	鳥取県 林 露枝	横浜市 菱田 満秋	弘前市 一戸 ツネ	京都市 松川 杜的	鳥取県 小西 雄々	鳥取県 土橋はるお	竹原市 古谷 節夫	西宮市 西口いわゑ
-----------	------------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	-----------	-----------	----------	-----------	-----------	------------	-----------	-----------	----------	------------	-----------	----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------

朝の水 血管走る音がする
キャベツ丸ごとわたしの鬱を掃りおろす

向かい風またも息まく風車
七人の敵に鱗をみせておく
整形後 一直線に脇見せず

半熟の卵はきつと私かも
離乳食了えて人間臭くなる

ささやかな年金 羽繕いばかりして

健忘症まさかまさかを繰り返す

私の一面うつす他人は鏡

三面のどの面見ても気に入らん

種なしの柿と自問自答する

三月の山に可能性いっぱい

流水接岸 地獄の貌が彫まれる

北風にまんだ向かって立てそうだ

継ぎ足してつぎたしてする命乞い

人生の裏目裏目で強くなる

年寄の部屋静かすぎはしないか

大屋根でしあわせごっこしたくなる

流れから抜け出したくて旗を振る

喝采がわたしの前でUターン

消しても消しても浮かぶ同じこと

逆転を考えている歯をみがく

好物を一ついうのは難しい

借りてきた傘の気になる花模様

かつこよく別れたあとの寒椿

八尾市 吉村 一風

島根県 伊藤 寿美

米子市 野坂 なみ

鳥取市 岸本 孝子

今治市 月原 宵明

和歌山市 山根めぐみ

八王子市 播本 充子

八尾市 高杉 千歩

米子市 林 瑞枝

鳥取市 石上 悦子

吹田市 西岡 豊

弘前市 斉藤 岳

大阪市 神夏磯典子

砂川市 大橋 政良

米子市 木村富美子

綾部市 藤田 芳郎

鳥取県 岩崎みさ江

堺市 志田 千代

鳥取県 西原 艶子

米子市 石垣 花子

八尾市 村上ミツ子

河内長野市 植村 喜代

大阪市 一本 勇太

羽曳野市 徳山みつこ

寝屋川市 堀江 光子

八尾市 大内 朝子

後列にいと大きな声が出る
生計をになう女の男運

鬼の涙 面を外せば恥ずかしい

歳とってきれいに捨てたわだかまり

約束の日まで生きよう未だ死ねん

やかましい妻からフアイトもらってる

戯れ言の愛と人形知っていた

満天の星に消えてた飛蚊症

先先を読んで女が痩せている

理想という異臭放っていた私

羊水にくるまりドラマ始まりぬ

疑問符捨てぬまま風景に溶ける

愛情に角がないとは限らない

風車 春一番を待っている

嬉しい日 領域不足する日記

サッカーボール人の鼓動を真に受ける

さみしさに喜びにも遠く住む人よ

汗をした貌に夕陽の眩しかり

狙われているのに亀の日向ぼこ

こんな良い日本忘れてパスポート

蟹気楼 人をおだてるのがうまい

優しいさの一部はきつと愛だろう

震う手で鶴折り殺し遠い春

自分史に想い出つづる彩は何

ばあさんを担ぐ元氣はまだあるぞ

手傷負っているから優しさがわかる

枚方市 前 たもつ

大阪市 津守 柳伸

寝屋川市 太田とし子

倉敷市 田辺 炎六

和歌山市 和田美寿子

寝屋川市 平松かすみ

尼崎市 長浜 澄子

横浜市 保田 絹子

和歌山市 榎原 公子

大阪市 川久保睦子

羽曳野市 吉川 寿美

和泉市 中川 楓

尼崎市 春城武庫坊

米子市 門脇 晶子

茨木市 藤井 正雄

和歌山市 桜井 千秀

弘前市 佐治千加子

香川県 木村あきら

和歌山市 福本 英子

高槻市 川島諷云児

日立市 加藤 権悟

大和高田市 鍛原 千里

羽曳野市 西村りつえ

貝塚市 池田寿美子

倉吉市 米田 幸子

美祿市 安平次弘道

この指が指がと結び目が解けぬ
 エアコンの中に腑抜けが浮いている
 一日を洗い直している枕
 ブランコの綱を信じて揺れている
 兎さんカチカチ山は晴舞台
 重なる絵馬で神に逢うまで眠れない
 勝つためにトレーニングの兎跳び
 笑い袋いまでも笑わせてくれる
 リストラの街で覚えたコマージュル
 余生とは思いたくない花の種
 ささやかな夢を余白に敷きつめる
 たつぷりと青を溶かして春を描く
 春霞未だ冬眠を覚めやらず
 いさかいの元に居た居たエゴの虫
 おしやべりの一方通行 雪相手
 穏やかな眼の深層にあるうねり
 忍の字に礼を言いたい事多い
 正直な話は耳をすりぬける
 山ほどの薬もらってお正月
 正念場わたしの勇気試される
 善悪はどうあれ想い伝えとく
 幸せのハードル一つ下げてみる
 退き際の美学おとこを上げている
 風よりも早い噂に蹴躓く
 後押しは要らぬ男のヘルメット
 撤回はしてもちらちら灯が洩れる

出雲市	石倉美佐子	出雲市	福井	桂香
倉吉市	野口 節子	倉吉市	中井	アキ
大阪市	日阪 秋子	大阪市	土橋	睦子
今治市	塩路よしみ	今治市	野村	京子
唐津市	田口 虹汀	唐津市	土橋	螢
鳥取県	さえきやえ	鳥取県	仁部	四郎
唐津市	矢内寿恵子	唐津市	田川	慶子
岡山市	田辺 鹿太	岡山市	園山多賀子	達子
大阪市	尾崎 勤	大阪市	三重県	尾崎 勤
弘前市	武本 碧	弘前市	田村きみ子	倫子
三重県	板東 倫子	三重県	淡路ゆり子	一京
和歌山市	植田 宏章	和歌山市	岸本	靖巳
鳥取県	石原 睦子	鳥取県	睦子	睦子
鳥取市	睦子	鳥取市	睦子	睦子
吹田市	睦子	吹田市	睦子	睦子
鳥取県	睦子	鳥取県	睦子	睦子
富田林市	睦子	富田林市	睦子	睦子
和歌山市	睦子	和歌山市	睦子	睦子

一生を数字ばかりに左右され
 斜めからばかり見ている悪い癖
 捨ててきた駅にぶらりと降りてみる
 輪の中で他人の軌跡追うばかり
 使い捨てカイロの如きかの炎
 昔々姉妹でしたね ひな祭り
 親子姉弟みんな同じ髪かたち
 仏さまのミカンが一つ減っている
 初めてのルージューに淡い夢がある
 常識も型も破って出る個性
 へこたれず生きる宿根草に春
 ここは天国 大浴場を独り占め
 ボキヤ貧と逃げて本音を語らない
 リストラの首 公園に干しにくく
 鶴亀が重荷になった長寿国
 老人力ちからはながい力
 呼び銭を賽銭箱に入れておく

鈴木公弘さんの他力有難しの言葉は胸を抉って、中から掴みだしたほどの氣迫を感じます。事を起こすも男の氣概なら、事と進むのも勇氣、天意のまま風下に耐えるのは、まして大きな男の力でしよう。他力を有難しと吐く述懐は痛みを伴った響きながら、しつかり人を打つ真情があります。松本文子さんのわらしべは優しくて弱々しい調べと聞こえますが、どうしてどうして強い句です。苦勞を越えて流れるもよし、川岸の事情で止まるもよし、融通無碍の姿でしょう。大橋鐘造さんの呼吸がそのまま伝わってきて私もはっとしました。さぞや影の方も、見失った主人の心を探して追い続けてくれたのに違いありません。手遅れでなくて良かった。こちらまで救われます。

羽曳野市	酒井 一壺	羽曳野市	酒井 一壺
鳥取県	山内 芳江	鳥取県	山内 芳江
和歌山市	上地登美代	和歌山市	上地登美代
枚方市	寺川 弘一	枚方市	寺川 弘一
横浜市	小野句多留	横浜市	小野句多留
大阪市	松尾柳右子	大阪市	松尾柳右子
大阪市	本間満津子	大阪市	本間満津子
横浜市	山下 省子	横浜市	山下 省子
鳴門市	八木 芳水	鳴門市	八木 芳水
貝塚市	吉道 時子	貝塚市	吉道 時子
枚方市	海老池 洋	枚方市	海老池 洋
和歌山市	田中 みね	和歌山市	田中 みね
池田市	栗田 久子	池田市	栗田 久子
大阪府	澤田 和重	大阪府	澤田 和重
唐津市	山門 幸夫	唐津市	山門 幸夫
鳥取市	夏目 健一	鳥取市	夏目 健一
唐津市	樋口 輝夫	唐津市	樋口 輝夫

水煙抄

秀句鑑賞

—2月号から

岩本笑子

約束を果たして広い海に出る

前上英一

どんな約束だったのでしょうか。胸を張り、晴ればれとした気持で海へ出て行った様子がよくわかります。これほど広い海があったでしょうが。

まだ欲を捨ててはいない赤いシャツ

中居善信

そうです。赤いシャツなんです。若く美しくあるための欲は、捨ててはいけません。しっかりと掴んで生きて行きたいものです。赤いシャツ万歳。人間いつまでも前向きでなくては。歳なんて関係ないんです。そう思いませんか。

もやもやを断つ爪切りは深くなり

山下省子

手元が狂ったではありません。きつぱりとある事を断ち切ったのです。

タイムスリップしながら渡る里の橋

内田美也子

いつになっても古里は良いもの。この橋を渡れば里の家が見えてくる。少しずつ子供の頃に返って行く気持が、よく表れています。羨ましい限りです。ちなみに私の家は、実家から百メートル程しか離れておりません。小さい橋を渡って行くんですけど……。

歩くことで見えないものが見えてくる

渡邊伊津志

何が見えてきたのだろうか、句を読んだ人はそれぞれに、想像すると思います。歩くことによって、作者はきつと貴重な体験をされたのではないのでしょうか。

計は不意に落葉ひとひら地に還る

近藤道子

あまりにもすらりと詠まれていて、心に染みる哀しさが感じられないのは何故だろう。二度、三度読み返してみると、作者の身近な人の不幸ではないのだと気付きました。

コップ酒呑んで撫で切りする政治

大西文次

ほんと、やり切れませんね。この政治、撫で切りどころか、メッタ切りしてみたくありませんね。ワカル、ワカル。コップ酒も三杯を二杯にしてこの不況に耐えているんです。

帰巢性信じあなたを待っている

武本碧

俺は鳩かと言う声が聞こえてきそうです。思わずフフと笑いが出ました。帰る所がある人は幸福です。そしてそこで待っている人がいればなお幸福です。それに気付かない人もいますけど……。

八起きめもやつぱり妻の手を借りる

安達はじめ

内助の功の偉大さ、きつと九起きめも手を差し出して下さると思いますよ。だって貴方あつての私ですもの。

坂道の途中で除夜の鐘が鳴る

不破仁緑

暗い夜道、しかも坂道である。鐘を撞きに急ぐ耳へ聞こえて来た鐘の音、思わず立ち止まっていました。年が変り新しい気持になつてまた坂を登り始めたのです。

次の三句は、紙面の制限上、評を割愛させていただきます。

気ままかと鏡にむかい問うてみる

井尻民子

とりあえずこの場と忘れした事に

川口信子

赤い羽根どんな服にもよく似合う

松岡千恵子

荀香のむ

西出楓楽選

少し削って私サイズの夢にする
 天王山こでしつかり飯を食う
 妥協点に自分の影を置いてある
 落葉掃く昨日のことが嘘のよう
 ため息をつくと少うし救われる
 野心家の筆はたつぷり墨を食い
 傷ついているから疵をさらけ出す
 米をとぐ手応えたしかに明日があり
 白旗の無い決断を迫られる
 追い越した時から風に追われ出す
 洗えない握手をそつと抱いている
 少しずつ化石になってゆく仮面
 結びめをすこしゆるめておく余生
 すきま風庇う父の背母の膝
 色あせた窓へぼつんと意地をおく
 ふらふらと春の花屋に吸い込まれ
 おしゃべりで心のひだを伸ばされる
 寄せ書きの真ん中辺にいる他人
 未消化の熟語を溜めている枕

和歌山市 川上 富湖
 鳥取市 録沢 風花
 大和高田市 鍛原 千里
 大阪市 日阪 秋子
 今治市 村上久美子
 羽曳野市 西村りつえ
 米子市 政岡日枝子
 熊本市 永田 俊子
 和歌山県 杉山 精子
 富田林市 中井 アキ
 八尾市 井尻 民子
 今治市 野村 京子
 八尾市 高橋 夕花
 和歌山市 木本 朱夏
 兵庫県 北川とみ子
 倉吉市 山本 玲子
 横浜市 後藤 早智
 尼崎市 長浜 澄子
 和歌山市 古久保和子

遠い日の道草いまでも続く道
 涙して心の傷を倍にする
 幸せな午後で句集を読みかえす
 途中下車する楽しさを覚えたり
 それからそれから皆聞きたがる猫の耳
 悪者にわたしがなつて事が済み
 太郎も次郎も与作も同じ天がある
 三十三年後に見ることにする流星群
 欲望を満たす器が欠けている
 幸せに気付かぬことのふしあわせ
 青写真だけがバブルに生き残り
 辻褄を合わせる毎に増える嘘
 普段から温い垣根を作つとく
 うぬぼれが伴走してるから努力
 いくつかの修羅場へ置いて来た仮面
 他人ごとだから寛大にもなれる
 悲しみよハンカチ乾くまで待つて
 真実を問うて渡れぬ橋となる
 枯れるにも美学があつて竹の花
 こればかりは人に譲れぬ玉手箱
 ウッソーと真面目な話いなされる
 ワンテンポおいて冗談効いてくる
 あいまいなさよならもい冬空
 耳うちをされて心電図が踊る
 再出発 少し歩幅を小さくする
 心ならず暮しの幅が広くなる

西宮市 牧瀨富喜子
 大阪市 稲本 凡子
 藤井寺市 高田美代子
 芦屋市 黒田 能子
 弘前市 佐治千加子
 和歌山市 田中 みね
 倉吉市 野口 節子
 横浜市 長島亜希子
 和歌山市 玉置 当代
 鳥取市 岸本 孝子
 大阪市 本間満津子
 岸和田市 宮野みつ江
 大阪市 神夏磯典子
 八尾市 大内 朝子
 和歌山市 上地登美代
 和歌山市 武本 碧
 東大阪市 北村 賢子
 羽曳野市 吉川 寿美
 宝塚市 嵯峨根保子
 寝屋川市 太田とし子
 西宮市 奥田みつ子
 和歌山市 榎原 公子
 横浜市 近藤 道子
 羽曳野市 徳山みつこ
 吹田市 山本希久子
 寝屋川市 籠島 恵子

カットした枝へ未練は残さない
ふっ切れて走りたくなる冬の天
一日が過ぎていちにち老けてゆく
お茶替えて姉妹のはなしまだ続く
大阪のうどんな旅を締めくくり
果てるまで夢見つづける万華鏡
ひとまずは眠って結論考える
ポップコーン私の意思が宙に浮く
愛情が濃いから味は薄づくり
貧しさを忘れる汗を光らせる
うぬばれが強くて花に実がつかぬ
終章を結ぶさすらい人の詩
妻の留守 娘に監視されている
耐え忍ぶそんな言葉も死語となり
ピアス穴 悪口ばかり吹き溜る
カルピスの底に残ったメロドラマ
ここまでにしようほとこの愛だから
ここだけの話に悩み深くなる
球投げて二億だそう十八歳
遊びでも真技体ありかるとり
嫌な事忘れると言う特技あり
囲われてカイワレ菜さえ競い合う
身の程を知っておでんのぬくい皿
密封で自然消滅してた恋
カラオケで塞ぐ夫婦の隙間風
まだ若い古稀を祝うてもらう福

八王子市	播本	充子
西宮市	西口いゝゑ	
大阪狭山市	伊藤	尚子
大阪市	辻川	慶子
寝屋川市	堀江	光子
尼崎市	内田美也子	
米子市	足立由美子	
横浜市	清水	潮華
香川県	辻上よしみ	
岡山県	矢内寿恵子	
大阪市	川久保睦子	
倉敷市	小野	克枝
八尾市	宮崎シマ子	
富田林市	藤田	泰子
弘前市	戸	ツネ
藤井寺市	太田扶美代	
鳥取県	西原	艶子
富田林市	前田	登子
大阪市	板東	倫子
交野市	山川日出子	
和歌山県	坂東	和代
鳥取県	岩崎みさ江	
西宮市	門谷たず子	
具塚市	吉道	時子
米子市	石垣	花子
米子市	林	瑞枝

低気圧居座る妻も天気図も
家中の明かり点して悲しみ事
柚子の香に手足のばして一人の湯
組の鯉になつて受験生
平等にただそれだけが難しい
もう泣かぬ女になつて雪の坂
秋が来て冬が来て老い早くなる
スパイスがなるほど味に効いている
冬いちご一途な夢を見てしまう
日向はこ上眼使いの猫といふ
見つめるとてのひらにある母の顔
苦勞する形もちがう今昔
実千両活けて女の愛確か

和泉市	中川	楓
大阪市	松岡千恵子	
大阪府	大森	年子
藤井寺市	岸本	寿代
和歌山県	上地	忍
出雲市	石倉英佐子	
河内長野市	植村	喜代
鳥取市	植田	一京
松江市	川本	畔
川崎市	和泉見早子	
米子市	驚見	正子
岡山県	富坂	志重
出雲市	園山多賀子	

富湖さんの句―夢は大きいほどよいものではあるが、現実とのギャップに落ち込む場合もある。時には「私サイズ」にしてみることも、安らぎを得るために必要であろう。風花さんの句―今さら説明するまでもなく勝負の定まる時を天王山という。こういう大切な時には、なまじ策を練るより、飯を食う、すなわち体力をつけなさいとの事。世の中が複雑化するにつれ物事を難しく考えすぎ、忘れそうになる基本をズバリと指摘している。千里さんの句―生きてゆくとは、妥協の繰り返しとも言える。これ以上譲れないところに、自分自身を置くには余りに不本意すぎるという気持が、影を置くで巧みに表現されている。秋子さんの句―落葉掃くの動作に尼僧や老人の姿がイメージできる。また、春夏を精一杯祭り、秋に燃えた樹も浮かんでくる。人生のたそがれ時の静かなたたずまいが、句全体にただよっている。

伊高武勇鉄風
津明史太治花



(安)美代子

扶美代
省子

健一
みつこ

以充
一子

千代一

寿美

保叭
州笑

月秋小

宵明
日枝子

正
劍

岳水

岳水

上ミツ子

小ちやいが家でいちばん強い雛

政子 勝巳 久仁於 隆風 壽恵子 玲子 幸子 満秋 帆雀 充良 政男 次子 典枝 和重 智恵子 千歌子 寿美代 鉄治 文時

クレーターそれから飢餓の街となる
それからはどうあれ乗った船は漕ぎ
それから地図には好きな道を書く
相談のそれから先は持ち帰り
意地張ってそれから腰をきえてくる
それからと乗り出してもう聞き上手
それから話の墓にもっていく
それからを考えている交叉点
宝くじ買ってそれから甘い夢
雨止んでそれから長い立ち話
それからはおだてに乘らぬ豚でいる
呱呱の声それから長い長い道
愛されてそれから鏡よく磨く
それから免つしるを振り向かず
どちらかが逝くその後の話する
三狼のそれから日ながになるベンチ
肩書のとれてそれから低い腰
気に染まぬ娘それから黙秘権
合格のそれから弛み出した螺子
信管を抜いてそれから言う無心
それからの風の便りに尾鰭付く
少年の瞳がそれからを語り出す

政
良

旋風

大
登

志
洋

ただし

品

朝子

登美

政
勝

羊

愛
論

正雄

大輪

大輪

政子 勝巳 久仁於 隆風 壽恵子 玲子 幸子 満秋 帆雀 充良 政男 次子 典枝 和重 智恵子 千歌子 寿美代 鉄治 文時

バンドラの箱に沈める流し雛
選別のあともピョピョないて雛
籠を出た雛もきびしい世紀末
姉妹のはなし美し雛飾り
雛壇に占領された父の部屋
逆縁の娘にも供える雛あられ
子育ても終って雛も歳の隅
リストラも左遷もクリア雛祭る
みちのくの春は名のみの雛飾る
御苦勞は伏せて旧家の雛祭り
嫁と来た雛人形に座を取られ
姑の言う通りに並べかえる雛
弥陀の掌にたどり着きたい流し雛
雛壇にのぼる途中で息が切れ
初恋は太郎を呼んだ雛祭り

佳

雛人形の誰にも付けない名前
どの顔もほほえみ消えた流し雛
年金を二つ合わせて雛祝う
ものがたり引きずっていく流し雛
流し雛の一つが岸を離れない

人

蚤の市隅に流転の夫婦雛

地

老母はまだ私を雛と思っている

天

雛さまのざわめきがする箱の中

軸

流し雛せめて満開桃の花

(明)睦子

一壺
妻子

螢

ミツ子

高夫

洞庵

ひでの

岳水

四郎

哲郎

あずき

雄々

輝夫

正雄

大輪

倅子

正剣

日枝子

周信

勇太

正子

ひかる

近い

嵯峨根保子選



神様に近い山から冬が来る
近いうちおいでんさいと梅便り
菜の花を摘んで近道遠くなる
近いからみんな娘がとりにくる
学校に近い子がよく遅刻する
高いアンテナ立てて近所と疎くすみ
御近所の愛をもろうて生きている
青パセリ葱も手近に母の庭
余生とは遠くにありて近いもの
近くともスープを飲みに来てくれぬ
近道は嫌いと言ふ万歩計が言う
近くでは値切れないので隣町
駅までは近いがレール錆びている
近道はないぞ子亀に波の音
秀才が近所に居ない子の安堵
親離れ近いなニキビ声変り
嫁がせた遠くの街が近くなる
隣に居るのに心は遠い人
近道をきらった父のいかつい手
満点に近い社員がタバコ吸う
近いけど口紅だけは引いて出る
目と鼻の街に嫁いで遠くなり

ちかし
周信
潮華
とし子
樹千代
たもつ
シマ子
哲子
愛論
弘一
晴翠
正雄
四郎
正剣
鉄治
洋
ひかる
セツ子
直次
博史
康子
幸夫

来世紀近くて騒ぐ世紀末
近付いて見ると欲しいと思われる
シャトルから日本語宇宙近くなる
遙かなる四島指呼の間にあり
終着駅の汽笛も近い風の向き
携帯電話いつでも君が側にいる
私の近くで非常ベルが鳴る
定年が近づいてから労働力
隣から出た噂とは気づかない
わがままな妻の実家が近過ぎる
ゴム紐とはしの距離にいつも君がいる
ライバルの着地がいつも近すぎる
近道を知っているから慌てない
町内に頼りにできる医者がある
愛憎の遠く近くに風の駅

佳

愛想の良すぎる花に近寄らぬ
少しだけあなたが覚えて古稀近し
近道はよそうよ橋が朽ちている
春近し許せぬことは何もない
近道は父の遺書には書いてない

人

神に近づき神にそむいて人臭し

地

隣人の情けに溺れまいとする

天

近すぎて山の姿が分からない

軸

親友の手鏡までは近付かぬ

満秋

一壺

あずま

重人

妻子

大輪

日枝子

保子

靖巳

しげお

たず子

銀波

典子

啓子

寿恵子

よしえ

扶美代

あ

みつこ

雄々

雄々

雄々

雄々

雄々

雄々

雄々

雄々

雄々

雄々

雄々

雄々

雄々

雄々

雄々

初歩教室

題 — さめる

吐 ^は田 ^だ公 ^{きん}一 ^{いち}

前月号に続き、川柳は

③韻文（詩や俳句などリズムを持った文）です。可・能・な・限・り・五・七・五のリズムを壊さない。このためには推敲を充分に。

極言すれば以上の三点以外は、何の制約もないと言えましょう。

ただ常識的な問題として差別用語は用いてはなりません。時々見受けられるのがこの差別用語を用いた句です。う・す・の・ろ・ち・ん・ばなどがそれです。

このように川柳は制約のない詩であるだけに、のびのびと創作して下さい。それがあなたの個性を伸ばしてくれるのですから。

添削句

○迷いからさめてさつぱり気が晴れる 敬之介
下五がこの句を味気ないものになっている。
またさつぱりも冗長
▽迷いからさめて女は母となる

○フーとさます可愛い孫の頬 弘子
可愛いが冗長。通常孫は可愛いものであるから。原句を活かせば

▽フーとラーメンさます孫の頬 武治
○日本の心がさめて行く怖さ
もつ少し具体的に。時事としては古いが

▽毒事件人の心もさめてゆく 舞夢
○交際中泥酔を見て恋さめる
上六が冗長

▽泥酔を見てフィアンセの恋もさめ 静子
○傷手当皮をめくられ目がさめる
酷なようだが、これは川柳とは言えない。

▽目が覚める思い傷口疼き出し 政子
○酔醒めの水一杯に息をする
下五が安易に流れてしまっている。

▽酔い醒めの甘露に愚痴もついでくる 安美代子
○バタフライナイフ少年のさめた目よ
上五が冗長。一字一句でも省略を心掛ける。

見付けがいいだけに惜しい。
▽ナイフ持つまえた子供の瞳の怖さ
○いさかいをさめるととの同志愛 トシエ

下五の表現が堅すぎる。平易な言葉を用い
○いさかいがさめて取まるもとの鞘
一言で空気をさめる立退きへ よし子

立退きの損得の機微に心をはせると
▽立退きへ近所の空気をさめてくる

○一口のコーヒーの過ぎさめてくる 幸枝
人間が詠めていない。

▽コーヒーも冷めるふたりの愛もさめ 信子
○その先は言うなさめてる咳ばらい
できれば具体的に

▽その先は金のお話でさめてくる 要子
○親子してスーパのさめぬ距離たもつ
中七以降からすれば上五は冗長。むしろ子

供が気を遣ってしてくれることを詠めば
▽気がかりでスーパのさめぬ距離に住む 実
○さめた目でテレビ見ている人を見る
内容が乏しい。句意は異なるが

▽さめた目でカメラを覗く事件記者 徳三
○待たされて湯冷めのくしやみだてつけ
もつ少し情景が髣髴となるように

▽湯冷めするほど待たされた女風呂 トキ
○冷めて行く溝の深さに溺れてる
下五の表現判然となくもないが、少し無理があるようだ。

▽一言が溝を深めた二人仲 四三郎
○さめた愛だと言っては呷る酒
中六の表現に一考して欲しかった。

▽さめた愛されと未練に呷る酒 美子
○酒さめて大虎何処へ消えたやら
単なる表現の問題

▽酔い醒めて昨夜の気炎消え失せる

○わかったわさめたあなたのその言葉 民子

単純明解でいいのですが、やや説明的で読む人に刺戟を与えないと思つ。

▽突き刺さるその一言に夢もさめ

○よれよれの褪めたコートに冴える勘 よしこ

下五が遊離している。

▽よれよれの褪めたコートへ不況風

○握手するさめるとあかん温めとこ 志津香

下五がなおざり

▽握手したあの興奮がさめやらす

○さめてゆく私の恋も終るらし 國八重子

さめてゆくと終るらしは同義語に近い。

▽中傷に私の恋もさめてゆく

○一夜越しの冷めた焼き芋目にされず ふみ

これは当然のことで説明句といえる。

▽焼芋も冷めだす不況の話など

○さめないうで終つておきたい夢一つ 禮子

中八の表現に工夫が欲しかった。

▽さめないうで欲しい小さな夢だけど

○諍いの種一つないさめた仲 宏

順序を入れ替えてみては？種一つないは言

いすぎではないか。

▽さめた仲諍いさえない暮らし

○千年の古墳がさめて知るロマン 輝夫

原句もいいが、千年が不要

▽発掘のへうにロマンが目覚ます

○燃えるのもさめるも早い生れつき 美恵子

下五がなおざり。目を広げてみるとよい。

▽タレントの恋燃えやすく冷めやすし

○熱さめた恋人同志右左 宏子

同志が冗長。下五の表現にも要一考

▽熱さめてからは話もすれ違い

○リストラに昔の汗が冷めてくる 勤

吹き溜まる枯葉に褪めた声を聞く

二句をまとめてみると

▽リストラに冷めた声聞く吹き溜り

○乗越して見知らぬ駅で酔もさめ 勝久

乗り越してもいいが

▽終電の見知らぬ駅で酔いもさめ

○あつかも話が進み込むと実感が湧く。 タツエ

会話の相手を詠み込むと実感が湧く。

▽旧友との話佳境で爛もさめ

○酔いさめて言った言葉がわからない 美寿子

家族の目を詠んだ方がいいのでは。句意は

多少異なるが

▽酔い醒めにしらじら見える茶の間の目

○麻酔さめ怖い先生も仏様 寿代

中七以降が川柳になっていない。

▽生きてるよろこび麻酔から覚めて

○友情がさめて亀裂がやや固い感じ 君江

原句もいいが亀裂がやや固い感じ

▽友情がさめて深まる傷のあと

佳句

飽食をさましてくれた不況風

燃えもせずさめもせずして老いの坂

えくぼさへアバタに見えるさめた恋

覚めた目で見え出す無位無冠

悪の芽を摘みつみさます母の愛

灼熱の恋も何時しかさめてくる

喜びも怒りもさめた昼の月

スキヤゲルファン熱も冷めてゆく

さめた目で夫婦喧嘩を眺める娘

過去の夢目覚めて生きろ応援歌

高熱に心づくしの粥もさめ

爛さまし妻の料理で生き返り

熱さめてみればあの人ただの人

老いらくの恋も冷めます無精ひげ

(全く同感。いい着想)

愛さめるふたりは明日の顔になる

(明日の顔は言い得て妙)

バーゲンを冷めた目が追う不況風

(見付けがいい)

酔いさめのコップに老妻の小言揺れ

(下五がいい)

アラームに浮き世離れの夢がさめ(八重子

(中七がお見事)

私の句

初恋の想いは冷めぬクラス会

栄翁

賢

靖雄

つよし

トヨ子

ミツオ

郁子

ひさ乃

省子

茂代

サト子

慕情

純子

てる子

登子

美也子

幸子

幸子

少年の諷詠

板尾岳人

昔の人々は、現代のわたしたちと同じように、生活の中にいろいろな楽しみを求めました。「川柳」もその一つです。

「川柳」は江戸時代の中ころから民衆の間に流行した、俳句と同じ形式をもった文芸です。季語や切れ字といった約束はありません。その選者として人気のあった柄井川柳（七一八―一七九〇）の名をとって「川柳」と呼ばれるようになりました。

逃げしなに覚えて居ろは負けたやつ
いりもせぬ物の値をきく雨やどり
これ小判たったひと晩居てくれろ

右記の句は二百年以上も前に作られたものですが、人情や世相をとらえる目には、現代にも通じる新しさがあります。

（中学一年古典のとびら、民衆の中から）

中一の国語の川柳の出でるところ、ページ数にすると、わずかのようですが古典入門ということで勉強しています。

三国ヶ丘中学 樽野先生談

「俳句」 朝日俳壇より 金子兜太選
家の外もみじにかくれたうんこふむ 10歳
ふと夕暮れの落し穴にはまったような俳句
で川柳に比べて、びっくりする。

「川柳」 三国ヶ丘中学 樽野先生選

今年のね流行語はねだちゆうの 翔子
わたし達が作って来た川柳より数メートル
高いところから描かれているような気がする。

帰るなりつかれているのになぜ怒る 明日香
オモチャ箱を開くように、胸の奥がツンと
するような懐かしさのある句。

帰り道かばんより重いつかれかな 瞳美
岩の上に岩は置けるが、人間の頭の上に岩
は置けない。しかし、右記の句は頭の上に岩
を置いたような、少女の意外性を重んじた実
感豊かに表現した句で、素直な心が見える。

夢の中起きたら先生にらんでた ほのか
熱にうなされてフラフラしていると腐り始
めた桃のように舌に沁みる、そして気持ちよ
く目が眩むような句だ。

中学に入学すると親変わる 礼子

まるで絵にかいたように平凡である。けれど嘘のない幸せな表情に圧倒される句で、彼等の川柳を読んでいると、何回も彼等の顔をのぞきこまずにはおられない。そして彼等少年の視線の前では、家族はみんな無防備だ。

休日が一番遠い月曜日 敏郎

少年の川柳と私達の川柳の問題をあれこれ類推させられて、新鮮に面白くて新世代の気が満ちあふれている。

学校の木たちは何を見ているの 友紀子

解放的な中に緻密さと観察眼、そしてどんな知識力にため息が出る川柳表現で、なんとも美味しい川柳です。

稚拙な文章しか書けぬ生徒が多い中で、五七五という十七文字は、コロロやキモチを語る文芸の言葉に親しむ時間であり、教育とは何かと問いつつ、奮戦しておられる先生の温かさを知ることが出来る。

■ 句集紹介

『地球の塵』

黒川 紫香 著

川 島 諷 云児

卒寿を越えられた記念として、このたび十年ぶりに『地球の塵』というタイトルで、第一巻『三人』、第二巻『むらさき』に次いで第三巻の作品集が葉文館から出版された。おめでとうございます。

前二巻とは少々スタイルも変わり、平成元年から十年迄の五〇〇句が年度別に集録されており、時代の流れが読みとれる。

「句は人なり」という言葉をよく耳にするが、六十有余年の柳歴と、性来のお人柄から生まれてくる句には家族、友人ほかさまさまざまな人と人の触れ合いというものを、如何に大切にされているかが、句にもまた後半の随筆にも好爺爺ぶりからうかがい知れる。

旅行が大変好きで、日本全国を回られ名勝旧跡を川柳で紹介されたことは、余りにも有名である。「日本よいとこ」は第二巻『むらさき』に掲載されているのは、皆さんご承知

のとおりである。

ちよつと話が逸れるが、日頃から不審に思っていたことが一つあった。

それは先生の握手である。何処に行かれても、どんなところでも、誰とでも握手をされることである。不思議なことをされるものだなあと常々思っていたが、本書を読んでみて漸くその謎が解けた。

曰く「握手は人間の美しい行為である」和解、信頼、愛情、ひいては尊敬、祝意、喜び、慰め等々簡単にして一番相手に通じ合う仕草だと思ふ。動物には、尾を振り、擦りよって舐める等の動作はするが握手はできない、と本書に明解に書かれている。二十年近くご指導、ご高誼を戴きながら、奥深い心の内が計られず、やっかみ気分で見えていた浅はかな自分が恥ずかしい。

このように心優しい方だから、男女を問わず「紫香ファン」が多いのは当然のことである。

紙面の都合で、句のご披露ができないのが残念であるが、五〇〇句の中から、紫香川柳の一部を紹介しておこう。

めつたに書かぬ母から来た手紙
鉛筆の芯を折る程怒ってる
いい話だけ病人にしてあげる

看護婦がいじめに来たよ針持って
平手打ち我慢するよりしかたなし
手を拭いて女握手をしてくれる
ひたい一つ叩いてお詫びしておこう
暗闇になったらベカコしてやろう
橋渡る音で乗り越したなと思ふ
もう一つジャンプをしたら九十歳
毒薬の効果を味方から試す

鬼曰く人間様は皆愚い

いいチャンス映画の切符二枚ある
スリルだな白紙で出した答案紙
ふたりだけで歩く二人の星明かり
さて、句もさることながら、随筆「優しい人々」は、読む人に感動を与える素晴らしいものである。「おやじとおふくろ」から始まり「僕くんも九十一歳になりました」まで約七十ページにわたり両親、妻子、恩人、先輩、友人等々、戦前戦後を通して、悲喜交々の出会い、触れ合い、別れのエピソードで埋められている。

『地球の塵』は柳歴六十有余年の集大成とも言える貴重な句文集で、柳人諸兄姉に是非一読願いたいものである。

最後に紫香先生は、わが川柳塔杏柳界の宝である。願わくば、何時いつまでもご壮健で茶寿、皇寿を目指し歩んで頂きたい。

本社 二月句会

二月八日(月)午後五時半

アウイーナ大阪

立春寒波も去り日ざしも春めいてきた八日、二月句会は黒川紫香句集発刊記念句会を兼ねて、一一〇名の出席により定刻開かれた。

はじめに大東番傘創立二十周年記念川柳大会が四月十八日開催されると、同会長山本翠公氏から御案内があり、続いて、黒川紫香氏の句集『地球の塵』発刊の挨拶があった。

お話は西田柳宏子相談役、今日、西宮北口句会に故菊澤小松園氏の四女が出席され、小松園夫人が九十一歳で御健在という川柳の絆の嬉しいお話を伺った。

大阪造幣局の通称「通り抜け」には、毎年川柳・俳句の投句箱が設けられ、入選句の短冊が桜の木に飾られて皆に親しまれてきたが去年から廃止された。百年にもわたる歴史を惜しむ声が強く、同氏は直接、造幣局の方とお話して投句復活に尽力しておられるが、川柳界の人々も声を大にして応援して欲しいと力説される。

また、自身の腰痛のお話から、自分の体は自分で治す、医者の方は二割、自分の力が八割と言われているから、自分で治す気概を持つことが大切だと結ばれた。

月間賞は川島颯云児氏(高槻市)に輝く。

(司会「朝子」)(記名「澄子・希久子」)

(受付「希久子・保子・寿美」)

席題「鬼」

西口いわゑ選

パレンタインチョコから鬼が浮かれ出す

鬼になる匠の技は冴えてくる

慶びへ内助も添って笑う鬼

人間になりたく鬼が写経する

終電車の鬼は仲良く眠りこけ

雪しきり塾へ追いやる鬼になる

五色豆まいて鬼とも手を結ぶ

一泊二日の旅に出掛けたうちの鬼

どうしようもない鬼一匹を飼っている

面の裏に鬼も仏も住んでいる

美しい鬼がおとこの骨を抜く

赤鬼 青鬼わたしの胸でせめぎあう

女ひとり鬼にならねば生きられぬ

雨の夜鬼がひとりて酒を酌む

気の弱い鬼で毎晩酔うていて

鬼ごっこさえも知らない塾カバン

ハロキゴアイちさい鬼からフレセント

嬉しくて鬼とも握手してしまふ

鬼にだってなつて見せます母だから

鬼と仏が背中合せて胸に棲む

みつ子

文 秋

太茂津

洋

たもつ

正 雄

一 風

富 湖

ダン吉

朝 子

西 女

泰 子

萬 的

鬼 遊

澄 子

みつ子

咲 二

扶美代

寿 美

念力で見事に鬼の面剥がす

今日は鬼あした淑女の二面相

やさしさに触れるともうい鬼の面

節分の鬼より怖いダイオキシ

ひよんな事で鬼の心を見てしまふ

居座った鬼が図太くなつてくる

仏にも鬼にもなれず傘寿です

仕事の鬼定時に帰る不況風

歳月が短気な鬼を丸くする

鬼はまた留守で一本つけてます

淋しくて鬼を誘った縄のれん

節分は鬼もフアイトを燃やしてる

鬼というかなしい役を引き受ける

身の内の鬼に時どき助けられ

胸底で鬼と仏がよくもめる

熱燗と讃岐うどんが好きな鬼

淋しくはないかと鬼がのぞいてる

ふくよかな寝顔が可愛い家の鬼

人 年を重ねてジョークの解る鬼になる

地 鬼になり仏になつて子をかばう

天 いざというときには鬼になる覚悟

軸 泣きたくですつぱり鬼の面がぶる

保 州

い ね

兼 題「やさしい」 春城 武庫坊 選

満 津 子

愛 論

とし子

一 歩

利 昭

三 男

典 三

風 云 児

希 久 子

靖 巳

周 信

寿 美 子

千 里

楓 楽

ば っ ぽ

ます 子

澄 子

美 代 子

た ず 子

保 州

い ね

兼 題「やさしい」 春城 武庫坊 選

満 津 子

愛 論

とし子

一 歩

利 昭

三 男

典 三

風 云 児

春の陽がやさしく起こすこぼれ種
明日咲く花がやさしい音がする
大関昇進母にやさしい茶髪の子
お誘いにやさしく返す京なまり
白無垢へ無言の父の眼が語る
雑草の抜き忘れやさしさかも知れぬ
やさしさと厳しさ秘めた父の髭
病んでから他人に優しくなり生きる
残り時間をやさしくめぐめ合ってます
毒つむやさしい色の包装紙
亡母の背で聞いたあの日の子守唄
核ゼロでやさしい地球守りたい
黄信号やさしいことは言いません
四面楚歌やさしいバズル解いてみる
やさしさに慣れて社会に背を向ける
やさしさも言葉に絡む練りわざび
暦から春のやさしさを告げられる
思いっきり泣けとやさしく言うてくれ
やさしさは決して言わない空の青
ひいふみいやさしい祖母とつかる風呂
やさしさにふれると奏える薔薇の棘
二十五時みんなやさしくなる時間
見て見ない振りやさしさが許さない
嘘でいいやさしい言葉待ってます
見守ってやるやさしさもあるのです
風邪引いた母に紅葉の手で粥を
胎教にやさしいモネの絵に並ぶ
黙ってるそれがやさしさなのだろう
弱いからやさしい仮面つけている

庸 佑 アキ 恭昌 民子 賢子 哲夫 とし子 セツ子 たず子 富湖 賢子 ダン吉 典子 まつお 千歩 勇太 信子 三男 森子 正雄 たず子 大輪 石舟 諷云児 千代 ルイ子 澄子 みつ子 久美子

これからは妻にやさしくしてやろう
風呂敷にやさしさ詰めて老母がくる
百までは生きろと孫が言うてくれ
やさしい目動物園でとり戻す
ほんとうのやさしさ君を突き放す
佳
やさしさが老いの自慢を聞いている
やさしさが欠点となる昼の月
ポケットにやさしさ入れて逢いにゆく
泣き砂はやさしいことづて待っている
譲られた座席お辞儀をして座る
人
靴すべり朝のやさしくれました
じつと見てるとやさしいね鬼瓦
天
いたずらへ父は打つ手を加減する
軸
触れ合った指がやさしいことを言う
兼題「握手」 小池しげお選
福・緑・寿 紫香先生握手攻め
頑張ると約束させて握手する
握手してよく働いている手だな
握手する瞳からその気にさせられる
ニコニコとしている人と握手する
左手を添えた握手があたたかい
始まりか終りか思案する握手
手袋を脱いだ握手が温かい

射月芳 たもつ かすみ 保子 希久子 ベ女 希久子 信子 洞庵 英子 友照 満州 雅文 武庫坊 あやめ 螢 剛治 アキ 美代子 恭昌 弘一 周信

握手して互いの肚をさぐり合い
欲得をはなれた握手あたたかい
手袋の握手魂胆あるらしい
エネルギー吸い取るような握手する
握手から強いメッセージをもらう
信頼の握手にこころ満ちてくる
本心を確かめている握手だな
ライバルの強い握手に湧く闘志
頼む方は力を入れて握る握手
握手した手の上に手を乗せている
清潔な手袋握手してあげる
温かさ伝わる人と手を握る
握手するやがて冷たくなる父と
取り巻きをばらはらさせて握る握手
温もりが未だ残っている握手
握手して敵か味方が確かめる
再会を信じつづけていた握手
腹の中さぐり合っている握手だな
痛いほど握手返したのが答え
再会の握手に言葉などは要らぬ
ライバルと握手火蓋は落される
握手した手の消毒を深くする
握手した数だけ罪を深くする
好きだから握手した手を離せない
握手するどちらも百歩ゆずる気で
ことばにはならぬ握手のありがたう
わかり合えた握手なかなかはない
佳
切なくて雪の白さとする握手

昭子 紫香 月太 金子 信子 狸村 咲二 恭昌 保州 友照 英子 たもつ 富湖 二三 仁清 靖巳 茜 かりん 諷云児 寿美 射月芳 洋 英子 大輪 保子 朝子 かりん 森子

大臣と平気で握手する度胸

握手して渡されていた果たし状

夕焼けが奇麗で握手してしまひ

ライバルに塩を贈っている握手

秀

たくさんの出会いに感謝する握手

軸

紫香さんにあやかり両手でする握手

兼題「地球」

阿萬萬的選

このままで済まぬ地球奇め過ぎ

開発にリズム狂つてきた地球

地球では嘔を吐いてもいらしい

炎を抱いて今日も地球に生きている

宇宙から見れば小さな星地球

喜怒哀楽が地球の皺の中にある

丸い地球に乗ってひしめく敵味方

かぐや姫地球の塵が怖くなり

美しい秘境眠っている地球

世紀末の地球蝕む温暖化

子供らに遺す地球に木を植える

地球儀をまわし赴任の子の安否

神様が地球を泣かす温暖化

地球からはなれて時の人になる

エルニーニョ地球の怒りかも知れぬ

月に立ち地球の涙見るウサギ

地球儀のあちこち核のある不安

野菜高いエロカード出す地球

宇宙から青い地球を見たメダカ

ルイ子

久美子

阿美代子

度

信子

信子

しげお

満津子

庸佑

螢

ルイ子

信子

阿美代子

絹子

西

雅文

正坊

絹子

狸村

紫香

睦子

陸子

ダン吉

靖巳

石舟

核地雷地球いじめはまだ続く

水平線に丸い地球を見る岬

人間に苛め抜かれて病む地球

オゾン層破れ地球が火傷する

ツッパリも博士も同じ地球人

理屈ではわかつているが地動説

月からの地球詩になり歌になる

飢餓戦地球に男いる限り

コワレものと地球に貼つてみたくなる

湧水がちよろちよろ地球の涙かも

人間の驕りに疲れ病む地球

富本銭大事に仕舞つていた地球

地球お借りしてますお米植えてます

借景を地球に吞んでみたいもの

リハビリの杖で地球をこづく試歩

インターネット地球を我がもの顔で飛び

地球にもストレスがある震度7

人

ブルドーザー今日も地球を齧つてる

地

地球にもニキビのようなエベレスト

天

開発と言う名で地球傷だらけ

軸

世紀末の地球へ叫ぶムンクの絵

軸

おしゃれなど知らない母のサロンプラス

モカの香にふと現役が目をさます

兼題「香」

藤村女選

楓楽

阿美代子

章久

満州

保州

英子

洋

かりん

周信

武庫坊

シマ子

保州

正雄

一二三

勇太

かすみ

雅文

文秋

萬的

味噌汁の香りが喉の奥にある

香ばしい匂いサザエの焼ける鳥羽

花の香が薄れ女が慌てたす

あたたかな香りを盛った妻の皿

逢つて来たあながたが香る袖たみ

新世紀の香りうれしい香りが生まれ

喪が明けた部屋に春の香が届く

香ばしいするめに弱い腹の虫

磯の香と汗の匂いの大漁旗

香炊いて亡夫と語る春の宵

香煙の揺らぐ彼方の亡母と会う

ひめゆりの塔に捧げる百合の香よ

洗うには惜しい移り香そとと抱く

赤銅の肌に潮の香大漁節

卒寿なおかくしゃくとして梅香る

香をたくとても優しい顔をして

一目惚れ君の残り香抱いたまま

めだたぬが花もお前もいい香り

柚子味噌は故郷の香り母と居る

春が香ると蝶も少女も羽化を呼ぶ

香りふくら梅いちりんが春を呼ぶ

日本海の汐の香がする津軽三味

炊きたての御飯の匂いかなわな

何歳になっても母の香がほしい

故里の香り豊かな梅便り

いい香りさせてる方がお婆さん

桜餅になって桜の良い香り

煎り胡麻が香る厨に母の影

味噌汁の香り我が家を朝にする

螢

笛生

いつふみ

鹿太

勇太

みつ子

弥生

久美子

利昭

稚代

諷云児

シマ子

房子

克治

保州

紫香

柳弘

昭子

泰子

阿美代子

萬的

扶美代

舞夢

友照

大輪

希久子

西

正坊

香典の係あわてる空袋

土の香りいつも付いてる母の指
潮の香りを背負う男の太い眉
陽と土の香りする子にないいじめ

住

母が活けた水仙ほのかなる香り

雪つばき匂い立つ香は女なり

好敵手だったと焼香合掌し

梅の香へ割り込んでくる杉花粉

お下げ髪レモンの香り置いてゆく

人

姑の香がほのかに残る袋帯

地

白菜の香に満足の老いの膳

天

寝たきりの窓沈丁へ開け放つ

軸

思い出を重ね香を焚く妻の墓

兼題「紫」

橘高薫風選

紫の枕きれいな夢見そう

紫を着て太陽に背を向ける

むらさきの煙を吐いても忘れ

紫の矢絰でした初デート

紫が好きでリンドウ活けてます

千代ちゃんの唄うりんど濃紫

紫の好きな少女の細い首

紫が頂点にある三色すみれ

山紫水明わがふる里は千枚田

狸村

ますみ

武庫坊

楓楽

雅文

義子

寿美子

富湖

勇太

澄子

義子

咲二

女

満津子

充子

蜚蜚

章久

利武

たもつ

絹子

シマ子

射月芳

紫の座ぶとん祖母の埋まりそう

ラベンダー畑になれば眠りたし

紫の好きな亡姉の忌紫苑咲く

母の葬つすむらさきの涙して

亡母の喪に雲が紫色に見え

いろ紙の紫孫と内裏雛

紫の君にも歳が増えてくる

清朝の栄華を偲ぶ紫禁城

トントンと刻みひとりの紫蘇ご飯

紫式部の名前もあつた菖蒲園

約束の人を待ってるアメジスト

紫の似合う女で七変化

辻ヶ花つす紫が匂い立つ

山裾は紫お寺の屋根が見え

紫陽花の次は桔梗の咲く小庭

紫を着るには煩惱多すぎる

憂鬱を試す紫色の花

むらさきのリボンで結ぶいのちなど

よい生涯紫色でしめくる

紫も赤も似合って口達者

媚薬だな紫色のランジェリー

致死量の手前で遊ぶ紫よ

感電をしそうちぎり絵の紫

大好きな紫だけ似合わない

紫が似合つて隙のないあなた

紫の背広は似合いそうもない

住

通天閣が薄むらさきになる夜明け

凡人に見えぬむらさき色の雲

一風

美代子

寿美

シマ子

一二三

絹子

大輪

正坊

かすみ

文秋

ますみ

千歩

寿美

紫香

あやめ

泰子

信子

美代子

扶美代

哲郎

富湖

富湖

瑠美子

伽羅

あやめ

金太

紫香

鬼遊

紫煙縷々として霊柩車を持たず

たと紙に江戸紫の形見分け

挫折した日から紫増えていく

人

紫の壺に挿すのはかすみ草

地

紫に爪塗り賜うことなけれ

天

目礼で終わる紫似合う人

軸

紫に兎のお耳染めてやる

天

紫

紫

紫

紫

紫

紫

紫

紫

紫

紫

紫

紫

紫

紫

紫

紫

しげお

房子

照子

伽羅

満州

飄云児

薫風

(清記・希久子)

だいとう番傘創立20周年 記念川柳大会

山本翠公句集『未踏』発刊

とき 4月18日(日) 12時開場

ところ 大東市立市民会館2F大ホール

(J.R.学研都市線住道駅下車、徒歩15分)

題

「鏡」(事前投句)

「思いやり」

「背中」

「狡い」

「愛」

「胸」

「動く」

各題2句・締切13時・席題なし

参加費 3000円(句集記念品・発表誌呈)

事前投句先 (3月20日締切)
大東市御供田2-21-16 山本翠公宛

お地獄城

毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

城北川柳会

神夏磯典子報

よそへやる子猫牛乳たんとやり
理想少し下げていい人見つかった
コンビニで弁当買えと置手紙
お別れの職場の椅子をそつとなで
裏道に苦むしたまま流人墓
嫉妬する自分が厭になり別れ
仏壇に留守をしつかり頼んどく
幸せの鍵はラストに開けるもの
お別れのベルを聞いている駅弁屋
逆立ちの魚の芸を見る囲炉裏
年月が理想の妻を凡妻に
別れ際の依怙地な顔を忘れない
別れろと赤の他人がかかるく言っ
モデルハウスに可愛い囲炉裏もあつたけ
角砂糖ゆつくり溶ける別れなり
絵にかいたような美人にする医術
囲炉裏端ムカつくキレる無縁です
裏道で瞳輝く子等の声

一枝 典子 はじめ 春蘭 寿美子 だだし 道子 順三 トヨ子 志華子 とし子 あい子 あやめ 史風 達子 千里 倫子 政子 睦子

別れても未練たらたらやせ我慢
演技派はラストカットに懸けている
裏道を歩めば木犀香にむせぶ
積年の誤解も解けた囲炉裏端
千歩の絵に徹夜がつづく流れ星
囲炉裏端はなれたくない生返事
理想論尤もらしく騙される
名画座のラストシーンで立てぬ腰
うれしい日絵を描くように化粧する
さよならを言うには辛い輪の温さ
別れ話出ないですんだ夫婦です

川柳塔みぞくち

小西

雄々報

義江 千恵子 登美子 久留美 千歩 英子 高栄 昭子 朝子 白峰 公一 公美枝 豊枝 弘子 正光 和代 智恵子 康女 鈴枝 静江 信敬 久子 雄々

岸和田川柳会

長谷川呂万報

握手したルールが変わる子の時代
几帳面過ぎてルールに縛られる
やりくりの連続母の深い皺
やり放題ロマンス作りこの世去り
母さんのロマンス箆の底にある
わたしからロマンスぐらいおますわな
気の抜けたわさびのような定年後
おつまみのアフレにわさびきいてる
わさび田の水がきれいに澄んでいる
春の香をのせて友からわさびもち
お刺身にわさびにも似た仲のよさ
この話わさびをきかしか味が出る
髭面の孫が甘えるお年玉
本わさび付いた刺身の値がこわい
あつさりとなで甘えておけば済む話
茶の間には泣かせてくれる母の膝
大企業だからの甘え泡と消え
行政に甘えてばかり大銀行
政治家を甘えさせてやしませんか
甘えるなシヤネルたつぷり匂わせて
お言葉に甘えて先に帰ります
女世帯犬にまでつく甘え癖
ゴミの日よ地球に甘えすぎないか
精いっぱい甘えてほしい母だから

川柳後楽吟社

從野

健一報

一齋 ひで さよ子 信博 美智子 金太 洋 東雲 昭二 辰郎 白光子 鹿太郎 路子 呂万 甚一 江みつ 俣子 東吉 苑子 蛙城 松風 萬的 丹吉 狸村 道博 拓治 桃風

情が移らないうちに森へ還す
 かけがえの愛十指から洩れてゆき
 錆止めに持つて放せぬペンと筆
 目で物を言われそれから苦い酒
 無位無冠弱者となつて生き延びる
 その時のために研いでいるナイフ
 妻はもう還つてこない日和下駄
 文明が山の姿を変えてゆく
 限りない宇宙の果てを考へる
 物干しヘタコも並んだ浜の街
 賽銭は据置きにして初詣で
 新春の愛の戯曲はワルツかな
 散歩道孫が手折つた野花挿し
 目をこらし宇宙のドッキング
 わが家でなくてよかつた救急車
 白馬が団体で来た冬の川
 菊薫る友に届いた鮎六等
 孫嫁に残るピアノに無口の日
 嫁ぐ娘へ火ダルマとなる親の愛
 全開の蛇口ではぐす今日のウツ
 新品の靴で行き先考へる
 曲げられて川の流れが狂いだす
 やつかな話はコーヒー飲んでから
 鼻先に来た札束を考へる

川柳東大阪

森下

愛論報

草風 青銅 美智子 浄美 哲郎 幸子 邦季 吉則 まさお 信善 秋月 博友 照路 佐加恵 照明 吟平 金吾 柳五郎 進秀 正成 忠敏 健一 鮫虎狼

萬的 雅文

指切りで胸のときめき読みました
 サービスは心こもつたおもてなし
 こころ一番弱いわたしを裏返す
 福袋小さい方を取るも欲
 花柄が恋しい母の袋帯
 暴走族どの子も一人では弱い
 弱虫が今日も泣いている赤提灯
 弱いのは怒りぢらしした僕の方
 札束で叩けばきつと落ちる奴
 新聞を斜め読みして朝が出る
 良書読む心が綻ばないように
 ころろ読む母の涼しい目が怖い
 山の辺に万葉びとの歌碑を読む
 神棚で初サラーが拝まれる
 散る秋を袋へ詰めて冬の使者

高槻川柳サークル卯の花

川島諷云児報

シマ子 賢子 朝子 たもつ くに子 典呼 弘直 哲夫 文秋 庸佑 信治 湖風 治也 愛論

秀夫 晴美 とし子 芳子 よ志子 典子 茶の子 泰雄 波留吉 靖巳 高栄 求芽

十字架のように背負っている汚点
 若い日の汚点ときどきくしやみする
 自分史にシミ抜きをした跡がある
 天下国家のはなしを嫌うおでん鍋
 おでん煮えみんな優しい顔になる
 政治論おでんぐつぐ煮えつまり
 煮つまつたおでんゆつくり老母が食べ
 おでん屋でこぼした愚痴が風に乗る
 逃げ隠れてきぬ事情を聞くおでん
 残業の夫にチンをするおでん
 愛想笑いの裏に本音がかくれてる
 呼びに来た母が見つけたかくれんぼ
 鍵っ子がひとり残つたかくれんぼ
 木枯しに枯葉さらさら冬の音
 枯れてても温もり残る花栗

佳句地十選

(2月号から)

川崎 ひかり

朝子 稲子 あやめ 石舟 ルイ子 紫香 柳宏子 スミ子 澄子 重人 武庫坊 白漢子 一笛 満寿蔵

金太 (奥みつ子) 楓楽 森子 蜚 丹吉 風云児 周信 美房 はつ恵

ライバルの遠くて近い射程距離
無理をして返してはくれないお金
慌ただしい音と光の年の暮れ

川柳岩出

小倉

アサ報

直線を辿ればきつと母の海
感情を抑えるお茶が熱すぎる
直線も曲線もあり古希となる
詩情など持っていないと北の風
直線でもとて書けない七十年
受験生一直線が眩しすぎ
女です情けに弱い泣きばくろ
助け船出した情けが燃えだした
本当の情けはここで判押さぬ
友情のベンが扉を開かせる
有り難いピンチで悟る人の機微
子育ては直曲線の道論す
がむしやらに直線だけを通り抜け
直線をジグザグにさす宴の酒
望むのは何も要らない情けだけ
お互いに情けを受けて生きる幸
反対に情けを貰う年になり
煩惱の旅に直線など描けぬ

竹原川柳会

時広

一路報

ドアを開こう私の未来無限大
国境を超えて友達つくりよう
なつかしい戸がある母の声がする
クセのある戸です私に似ています

大史子
高2千枝
蘭幸
静風

吉之助
しげお
諷云児

三代もよくぞ仕えた戸がきしむ
フィナーレ戸締まりだけはしかとする
大不況天の岩戸を開け給え
何様であろうと自動ドアは開き
美しい人の居そつな戸の明かり
ドッキング科学者宇宙の戸を開く
家は建つ人口は減る我が街よ
皆忘れ母は彷徨の中に生き
胃を切った傷は一生ついて来る
遠い人忘れな草の咲く道よ
都合よく記憶にないと言える人
物忘れ忘れたものがわからない
愚痴聞いてあげる電話が長くなる
友がいて心がひなたほっこする
友だちは友だち税金はもたらう
明るい友と話し明るい今日である
級友の若さが眩しコーヒー匂う
三羽烏幸か不幸か一人生き
施設での生活母に友出来た
握り返してくれる友達の瞳だ
友が居る以心伝心睦まじく
胸襟の友ライバルの顔も持つ

川柳大阪

坊農

柳弘報

なぜ昼に区間快速あれへんの
晴れやかな人の笑顔が大好きで
不器用なラストダンスに酔っている
晴れやかな成人式に貸し衣裳
とりあえず貰うもんもろておかんと

高1圭
信醉
芳子
喜楽
多香

菁居
節夫
蝸牛
美佐雄
喜美子
房子
夏喜
幸子
正宏
貞子
力
現代
比呂子
眞由美
不朽
栄恵
清彦
年子
笑子
喜久恵
一路

とりあえずはいと領き丸くする
最終はいつもきまった客が降り
茶髪の娘も晴れやかに初詣で
一命を捨ててドラフト負け戦
とりあえず用立てしたが返らない
晴れやかな舞台台が今日主役
ブービーも完走しました晴れやかに
人生の大勢決める六三制
カレンターラスト一枚焦る
乗り越えた区間が絆ふとくする
最後まで捨てたらあかふ徳儀
ラストまでいて駐車違反也
一区間歩いて思う二〇〇円
最後まで生きる気概が癌に克つ
宇宙から無量の舞を見せてくれ
晴れやかに出す肩書のない名刺
とりあえず微笑み返す知らぬ顔
晴れやかに昇る朝日からファイト
取りあえず様子見に来た係長
基地のある区間は厚い鉄の柵
残された区間に何があろう
流星群たぶん最後のチャンスだな
駅までの区間にうまい酒がある
とりあえず野心を包む紙袋
ラストダンス私となんて二冗談

川柳塔唐津支部

松涛庵正剣報

お転婆だったころの仕度さが身にのこり
虎は去り兎と遊ぶおらが春

弘
久仁於

真紀
照月
河南子
咲花
雅果
青童
川童
かよこ
柳昌
鉄心
まつお
一風
三十四
希久志
比呂志
朝子
柳宏子
一步
ダン吉
金太
笑風
重人
柳弘

いい話進んで春はすぐそこに
干拓が進み水鳥の悲鳴聞く
これからは時々休めとレントゲン
これからは本番はたちの旅立ち
振り出しに戻る決意の職につく
鈍行でこれから一人旅に出る
戦はこれから紅を濃く引く
これからは男も似合う割烹着

西宮北口川柳会

亀岡

哲子報

心の奥に闇を抱えて年を越す
木棚の奥ボキヤ貧を笑う声
奥の手を只今すこし解凍中
仏壇の奥に遺言状仕舞い
咳払い奥の部屋には祖父が居る
リストラへ手土産提げて潜る門
門だけを残り相続税に消え
やがて来る地獄の門を調べとく
山門にカラスが集う世紀末
門限を守らないのはババである
大学合格今開かれる春の門
門灯が明るくともる我が家族
生活の匂いがしない冬の門
青い瞳の孫出迎えるエアポート
留守番の犬が迎える旅帰り
玄関に妻が迎えたのは昔
うつし世の仮の住まいに年迎え
出迎えのなかなか来ない寒い駅
すつきりと晴れた空には勝てません

みえ すみこ 太泡 登美子 瑞枝 静恵 芳枝 叮紅
武庫坊 みつ子 義子 紫香 日出男 曙蝶 美智子 晴美 房子 トミエ たず子 江美 鹿美 石舟 涼子 諷云児 はつ絵 能子 いわゑ

言うだけは言つたすつきりした握手
すつきりと結び上げ亡夫に見て貰う
知恵の輪がはずれて今日はすつきりす
すつきりとしなない二人でまだつづく
遺言書き替えずつきりした気持
縦のものの横にするにもある規則
暖かい陽ざしを待っているベンチ
賀状来る中の一人を待つ心
冬日和返つてこない金を貸す
人間やから一日三度めしを食う
ふいと来て父に洋酒を置いて行き

京都塔の会

松川

杜的報

叱られて影も少女もかくれんぼ
みよちゃんとかくれたままで出て来ない
かくれんぼずっと続けているふたり
かくれんぼしたい二人の宿浴衣
かくれんぼ赤いリボンがゆれてます
かくれたらあなた捜してくれれますか
筆持てばきちんと揃う膝がしら
六十路にもときめきがあり紅の筆
一筆の生命人形目をききます
水茎のあと人柄があたたかい
筆まめに親孝行のまねをする
まっさらに筆で受付待機する
裏側をきこんと知っている自信
社の明日をきこんと話合う不況
不倫でもきこんと惚れて好きやねん
フィクションの森できこんと夢を見る

澄子 てる 昌子 萬子 柳宏子 嘉代子 春蘭 しげお 正坊 富喜子 友照 紫香 葉子 とし子 め女 磔 だだし 典子 芳子 ルイ子 高栄 求芽 欣之 飛鳥 柳宏子 睦子

電池切れ時計もカメラも私まで
愛の手が電池になった車椅子
肝心なときにはラジオは電池切れ
母の背にハイパワー電池おわたたい
スタミナが切れ充電の旅に出る
平和慣れせぬよう電池入れかえる
子備の電池持つてカメラと旅にいる
自販機の電池が夜の音になる
暗証番号忘れ頭の電池切れ
旅カバン スベアの電池忘れな
充電も放電も利く妻といふ
充電をせず八十を越えました
秋深い いやな事ばかり耳に入る

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

一匹の金魚へ金魚プレゼント
オカリナが乾いた森へプレゼント
私には自由な風がプレゼント
包装紙の中味冷や汗かいている
晴天ははてるて坊主の贈り物
プレゼントこれ位ではだまされぬ
豊作の約束雪のプレゼント
米寿への孫からもらうプレゼント
しばらくの反省貰う松葉杖
庭の松あればローンと違ひます
松枯れの列鳥寒くなってくる
松とれてみんな働く顔になる
松並木古い噂を抱いている
箸こけて笑つた頃もあった愚痴

福子 波留吉 康佑 宏子 正坊 百合子 白溪子 蕉 吉之助 杜的 諷云児 豊次 水客 朝子 弥生 千里 剛治 哲夫 弘直 宏美 勝美 度 弘一 ダン吉 夕花 森子 柳伸

嘲笑つたくやしきバネに明日へ跳ぶ
悠々自適少し笑顔が不足する

飢餓の子に笑いのもどる日を祈る
のひらがにっこり笑うワンカップ
こみ上げる笑い隠しているほっぺ
鍵ひとつ貰って愛を過信する

寒い夜に鍵穴逃げるもどかしさ
貴方がくる日の鍵はかけてない

鍵穴のメモが不吉な予感する
合鍵を捨てて人生やり直す

福袋獲物のように開けてみる
商魂はノムラ売り出す福袋

私の福はあなたの笑顔だけでよし
家族みな元気で福は手のひらに

サークル檸檬
小林 一夫報

今にして我が子育ての通知表
SOS毬が弾んでとまらない

言い訳はしない勇気を持つている
無声のフィルムに巻き込まれゆく歲月よ

フレームに小花 吾妹子白く流れる
退屈が続くと愚痴が多くなる

右左分けてはみたが捨てられず
母に続けばいつかはきつと海に出る

健康を味わいながら爪を切る
竹とんぼ少しいびつに飛んで冬

正直な舌にときどき手を噛まれ
どこまで続く深夜の羊たち

過ぎし日よ豆大福の塩加減

賢子 扶美代

隆盛

欣之

とみを

和歌子

春蘭

シマ子

三男

一風

秋子

たもつ

アキラ

ますみ

みつ子

智恵子

喜美子

あずき

薫

靖巳

雅子

希久子

義子

房子

楓子

いわゑ

澄子

ローズ川柳会(前月分) 山崎 君子報

かわいい嘘何時も手許に置いて生き
嘘でもさ好きと言われりや胸がなる

国民に頼だきあわせの餓くれる
暮れの街人もお金も走り出す

気いだけが走っています十二月
好きだよと嘘でも言うてほしかった

好きだからあなたの嘘が許せない
筆談で互いに嘘のない会話

夫の留守気楽に過すはずだった
鍋のおでんが案外残り齡思う

嘘ばかり言うてと椿色っぽい
嘘一つこころ揺さぶり離れない

初詣り聞きたや景気の跳ねる音
明日は明日今日を楽しむクリスマス

大ばらを吹いてライバル煙にまぐ
セーターの編目こぼれる若さあり

はたる川柳同好会 井上 直次報

出る幕がありそう靴を光らせる
初日の出いつも道も光る朝

社長社長と威張っているが七光り
ルミナリ工神戸の明日を照らしてる

地に空に満ちくる光凍て待つ
逆光がとんだ一役皺ばかり

お詫びには光る頭が役に立つ
カーテンコール流した汗が今光る

子の無事を祈る尾灯の消えるまで

昭子 久子

和歌子

竹二

肋骨

実

保子

まみ子

雪子

ただし

吉太郎

馬洗

正三郎

セツ子

喜美子

柳童

雅子

直次

善守

正安

祥風

よろう

勝

見清

千里志

敵子

光らなくてもいいの平凡凡と
まだ少し地球は青く光る星

みくびつた友がピカピカ光り出す
妻ようじ使うと品のない男

使い慣れた筆軽やかに書く賀状
商品券もたら何に使おうか

人一人使い廃業言い出せず
使い捨てカイロが聞く冬の章

使わずにどんどん錆びてゆく頭
炬燵から大きな顔で親使う

内緒事テレビはつけたままにする
テレビ視てもらい泣きする老い二人

二人きりテレビで過ごした三が日
ワンカット孫が写って録画する

子が巣立ちテレビと会話してる日
許さねば私の闇が抜けられぬ

許される範囲線引きむずかしい

川柳塔おとと

新しい自分に出合う靴をはく
新人類ですが古風な女です

新しい椅子へ変えたいらしい妻
えん魔さんがおめでとうと言ってくれた

お祝いがつづき財布も胃も疲れ
色々ありましたなあおめでと

めでたい日主役の席にいる疲れ
逆指名めでたい金でしばりつけ

鯛の尾がピンと目出度い位置につき
初春にめでたいことが続いている

原 みさを報

せつ子

ゆきの

艶子

千秋

由多香

伝住

黙光

小生

舎人

多哥由

幸せに気付かぬことのふしあわせ
夫婦旅幸せごっこするように

孝子

新雪におどける孫とハイチーズ
まだ一人来ない賀状を気にして

弘治

初曆しずかにめくる二三日
出る釘を攻める道具が月なみだ

ふみ

幸せは孫と会話のつきぬ膳
幸せの尺度が合つて共白髪

雄々

新雪の京都へ走るカメラマン
サツカールの元祖優雅に毬をけり

昌子

歳月に言葉を選ぶやさしさも
百年の柱を立てた歩かねば

てい子

幸せは玄関の靴揃つて
幸せになれてきたから愚痴もでる

野草

新雪を踏む初釜の千鳥足
優雅ではなないが悔いなき日を送る

夢之助

満寿蔵

荒介

幸不幸背中合せてやつてくる
幸不幸心次第と父の遺書

彰雄

祝い酒一期一会の花の舞
借金がないから僕も優雅だな

正治

石舟

幸功

踏まれても幸せですと野のすみれ
まり跳ねて手の鳴る方へ飛んでゆく

邦昭

いつまでも返せぬ恩がつきまとう
優雅には遠くガサツな父が好き

澄子

半世紀賞罰もなく黄昏れる
紅葉マーク付けて人生黄昏れる

孝雄

真つ先に跳ねた兎が的になる
景気呼ぶ音が跳ねてる杵の音

清子

川柳塔きやらばく
政岡日枝子報

十四郎

親の世話児の世話国におんぶする
空想の好きな女で少女趣味

快風

さあ買つた活気の声に鯛跳ねる
したたかなそろばんがある兎跳び

道子

はやばやと母は一人の旅仕度
育つ竹一節ずつの疵のあと

紫香

米寿だと数えに入る除夜の鐘
空くじは無しで忘年会和む

竹野

景気呼ぶ音が跳ねてる杵の音
さあ買つた活気の声に鯛跳ねる

宏章

はやばやと母は一人の旅仕度
育つ竹一節ずつの疵のあと

諷云児

人情と自然に溺れ無冠の徒
人間は怖い真須美はなお怖い

菊風

景気呼ぶ音が跳ねてる杵の音
さあ買つた活気の声に鯛跳ねる

登美

はやばやと母は一人の旅仕度
育つ竹一節ずつの疵のあと

柳宏子

米寿だと数えに入る除夜の鐘
空くじは無しで忘年会和む

有佳

景気呼ぶ音が跳ねてる杵の音
さあ買つた活気の声に鯛跳ねる

寛

はやばやと母は一人の旅仕度
育つ竹一節ずつの疵のあと

富美子

人情と自然に溺れ無冠の徒
人間は怖い真須美はなお怖い

朱坊

景気呼ぶ音が跳ねてる杵の音
さあ買つた活気の声に鯛跳ねる

みさ

はやばやと母は一人の旅仕度
育つ竹一節ずつの疵のあと

春枝

人情と自然に溺れ無冠の徒
人間は怖い真須美はなお怖い

佳風

尼崎尾浜川柳会

田辺

鹿太郎

娘と孫に甘えて生きる祝い箸
新雪の駅出稼ぎの父送る

江美

不況風飛ばせわたしの風車
寒の水いのちを宝だとおもふ

八重子

牛乳が私に代り子を育て
牛乳をたつぷり飲めと骨が言う

美々

日溜まりに猫とわたしとワンカット
優雅には少し足りない預金高

まさ

椰子の木の高も見たいと白兎
生きているあかし風車が回る

千代

店先の柿に古里思い出す
三方にのる幸せな柿ひとつ

和江

優雅には少し足りない預金高
振袖が親離れするまた一步

鹿太

椰子の木の高も見たいと白兎
生きているあかし風車が回る

瑞枝

店先の柿に古里思い出す
三方にのる幸せな柿ひとつ

松風

病む友と太いパイプの文の束
新雪は無地の色です綿帽子

亀子

遠のいていく足音はもう追わぬ
こむずかしい話に塩をなめて出る

晶子

少子化の子等に借金残されぬ
本物の愛へまことつた借り衣裳

千鳥

祝日の旗に心を洗われる
京育ち時代祭りをふと思つ

幸子

遠のいていく足音はもう追わぬ
こむずかしい話に塩をなめて出る

千春

少子化の子等に借金残されぬ
本物の愛へまことつた借り衣裳

千鳥

祝日の旗に心を洗われる
京育ち時代祭りをふと思つ

百合子

遠のいていく足音はもう追わぬ
こむずかしい話に塩をなめて出る

ゆき

少子化の子等に借金残されぬ
本物の愛へまことつた借り衣裳

千鳥

祝日の旗に心を洗われる
京育ち時代祭りをふと思つ

モトコ

遠のいていく足音はもう追わぬ
こむずかしい話に塩をなめて出る

玲子

少子化の子等に借金残されぬ
本物の愛へまことつた借り衣裳

春恵

祝日の旗に心を洗われる
京育ち時代祭りをふと思つ

いわお

遠のいていく足音はもう追わぬ
こむずかしい話に塩をなめて出る

恵子

少子化の子等に借金残されぬ
本物の愛へまことつた借り衣裳

あけみ

新雪へ一色をそえた寒椿
新雪を丸めて投げた雪礫

向西

追伸に棒鱈頼む年賀状
父母の年齢賜わりて新世紀

花子

ライバルの議員バッジが眩し過ぎ
家族中寄りかかる肩痛み出す

單車

新雪を丸めて投げた雪礫

六浦

追伸に棒鱈頼む年賀状
父母の年齢賜わりて新世紀

天雀

ライバルの議員バッジが眩し過ぎ
家族中寄りかかる肩痛み出す

信子

新雪を丸めて投げた雪礫

勇次郎

追伸に棒鱈頼む年賀状
父母の年齢賜わりて新世紀

寿々子

ライバルの議員バッジが眩し過ぎ
家族中寄りかかる肩痛み出す

寛子

川柳高知

川竹 松風報

川柳塔ふくべ

橋本多哥由報

苦勞した母の肩には灯も温い

川柳塔わかやま吟社 牛尾 緑良報

多哥由

いつか虹になる決断の道だろう

決断がついた確かな羅針盤

決断をうながしている流れ星

一直線決断いった足跡だ

剣が峰決断迫る砂時計

決断しても鬼にはなり切れぬ

決断をした愛宙を泳がされ

三文判軽い決断なく出来る

身を守る重さに耐えている甲羅

亀の背に乗ると時間を越えられる

子を守る亀の涙を見てしまふ

吾が道を悠々亀の眼が奇麗

友情は亀に勝たせてやる昼寝

ゆったりと亀の歩みにある余力

負けて勝つ勝つても亀のマイペース

二十一世紀へ亀の勝利を信じてる

不幸など飛ばす気迫の鶴と亀

飛鳥路の古代を語る亀の石

晩学へ亀の歩みを見て励む

神棚の高さ信頼して拝む

手に入れた高根の花が色褪せる

懺悔した日から枕を高く寝る

おぼせだから踵の高い靴が好き

煩惱を埋めて根雪高くなる

偏差値の高さではない子の温さ

波高い日も多かった夫婦岩

清史

寿子

千寿子

正博

あつむ

高夫

泰子

富湖

保輪

大輪

君枝

公子

裕美

己三代

克子

紀美女

誠子

三男

太一

英子

射月芳

鉄治

豊太

精子

富美子

三枝子

新聞が今日も血圧高くする
越えられると思う高さにけつまずき

石段の高さへ呪縛解けてゆく

空を指す竹の高さにおく望み

南大阪川柳会

吉川

寿美報

熱っぽい青年の眼に期待する

熱演の女の一生酔いしれる

弘法の熱気を貰う暮れの京

同窓会校歌熱唱して終り

風邪の熱よく食べる子であわてない

がっちり熱い握手で仲間入り

心配な地球が熱を出している

高熱の続く我が子へ祈る母

粘ってる男の汗は侮れぬ

三指をついた女の粘り勝ち

よく粘る男につらい過去がある

ガムの粘りに困っている靴の裏

粘ってるセールスマンをにらむ猫

生きのびるために寝たふり死んだふり

ゆっくりと眠れる森がどこもない

余分なものみんな落して木は眠る

冬眠の動物春の夢見てる

まだ地下で眠りこけてた不発弾

ほっとする内定眠り深くなり

柔軟剤かけて脳みそ練りなりおす

沈黙のログンしきりに策を練る

作戦を練ったら消えていた私

練りすぎてわたしがいい消去法

和重

紀久子

稚代

佐代子

信治

志華子

たもつ

哲郎

修

正博

淑子

久峰

重人

千里

三男

度

日出子

楓楽

凡子

道子

太郎

章久

憲太郎

朝子

雅文

ダン吉

寿美

行き詰り視点を变えて策を練る

ライバルを視野に秘策を練りあげる

練習のたまもの甕らしく描け

諺の中からヒント捻り出す

捻出にかけては妻の底力

まかされたブラン夜通し灯がともる

修練が人間技を越えて来る

川柳ねやがわ

江口

やつと解決母にもどったよい笑顔

この不況解決策は浪費かも

捨て石が最後にちゃんと生きてくれ

紙兎大きい方を泣かせてき

整理整頓上手になった負け戦

負けん気の祖母はジャンケンポンが好き

焦るまい最後の最後勝てばよい

したかな女で白黒つけたがり

年内に治しておこう医者通い

医者の梯子で命つないでいる余生

あと継ぎの居ない医院のよく流行り

宅診は大根島を先に診る

治療方を説いて赤ヒゲ街の隅

事故現場毎月花を替える人

携帯が思わぬ役に立った事故

自転車事故で師走は目もくれず

無欠無事事故で平で定年

トンネルの出口に花が供えてある

事故のない一日だったヘルメット

お茶だけで知恵を絞れと言われても

庸佑

幸子

蛙

萬的

柳伸

清水

度報

ルイ子

一途

一風

冬葉

茜

かすみ

あやめ

千恵子

恵子

文秋

小路

とし子

たもつ

順三

仁清

英王

弘一

吉之助

博泉

礫

神の目に合格させたい絵馬ばかり
爪隠す鷹と言われて生き辞引
生きがい求めて資格取りまくる
目いっぱい生きて来ました障害児
金策が終りくつろぐ晦日そは
かさぶたが取れると油断してしま
う
伸びましようビル出て澄んだ空めがけ
今年また無事のしるしに届く柿
さわやかにベスト尽した靴を脱ぐ
解決が妻が一步をひいたので

うぶみ川柳会

上田

宣子報

古時計毎日ネジを巻いている
定年を迎え虚ろな日々ばかり
虎の巻持つと心も浮き浮きよ
癌告知聞いてる耳も気も虚ろ
共犯のありとみたてておよがせる
献立に加える母の柿なます
逢わないと言ってしまうから虚ろ
君と僕太いベルトが回してる
友釣りのさかな上手に跳ねてみせ
宝くじ当れば虚ろな顔しよう
市場籠上手に囁き分ける
シートベルト結んでくれた赤い糸
大接戦終盤ぐんと巻き返し
束縛が解けてベルトもゆるみがち
ベレー帽が描けは納まる木守柿
記念樹の柿がなかなか実らない
秋の空老いのベルトもしまらない

ベ女 高栄 勇太郎 三郎 波留吉 洋 亜成 光子 雅文 度 登美枝 孝恵 孝男 正和 天人 あづま 良雄 華子 天雀 雅女 黙光 ユリ子 健一 雄人 ひろ子 一枝

山すそへ帰り囀と知らず鳴き
わたくしの虚ろを埋めに来る小鳥

岬川柳会

八十田洞庵報

宣子

饒舌で脳の中味を探られる
用件を言い忘れたる長電話
オウムから友のおしゃべりきいてみる
母頭痛娘のおしゃべりにない薬
近年は霜焼けしらす温暖化
退屈に付き合えませんか長電話
おしゃべりに根掘り葉掘りは困ります
霜の朝汗は宝の万歩計

霜焼けで泣いた昔が偲ばれる
ほどほどの霜が欲しいと冬野菜
金策も祝い事なら苦にならぬ
恋敵涙かくして披露宴
成人の花絢爛のお祝い日
そのわりにおしゃべり男持てもせず
OLのおしゃべり静かな通勤車
おしゃべりは止めてとナース脈を取る
はつきりと嘘と解っている笑顔
チャペル婚せめて母だけ留袖を
おしゃべりの顔が並んだ朝談議
不器用をしゃべり上手でカバーする
若者とあわぬおしゃべり聞かされる
我が友は道まちがえた口達者
反抗期親を無視してしゃべらない
噂とぶいとも火元にとらまれる
おしゃべり人とはわたしかもしれぬ

宣子 静生 宣子 和子 和美 信子 信博 令子 里子 朋子 正美 昌夫 勝 庄六 悦子 幸子 孝子 狸村 ユミ子 鉄男 通江 みつ子 洞庵

川柳塔鹿野みか月

土橋

色々趣味多く持ちとりえなし
甘味増すこれぞと塩の匙加減
万円の器に入る嫁が来る
悪人はひとりもない吹雪く道
隙狙う捨て猫にまた負けている
器からこぼされそう年齢になり
当選をしてから腰が曲がらない
枯れ草の姿で春を抱くいのち
寒椿吹雪に耐えて咲く姿
いたぶりに堪え一本の樹のすがた
合掌の姿で父に詫びている
正月は着物姿に化けようか
書道展溜息のでる筆の跡
金貨を射止めた筆が眠ってる
鉛筆が削れ今日が明日になつてゆく
筆先に世紀の道が示される
日記には断筆の理由書いておく
達筆になりたいまなまそのまんま
いい筆だ母の匂いを醸し出す
不器用な筆だが信じ続けよう
従順な妻がこの頃筆持たぬ
下手な字を書かれて筆も悔しから
縁起餅背負って孫は満一歳
縁起よいさき因幡にきやかい
幸せになる縁起ならかついどく
茶柱が立つても妻は不貞くされ

蟹報 武子 初枝 幸枝 野草 弘子 喜与志 和子 隆風 かつ乃 諷人 きみ子 八重子 きみゑ 菊乃 久枝 公子 茂 小鹿 孔美子 智恵子 盛桜 睦子 くに子 節子 富久江 みさ子 実満

かつがねは縁起に放り出されよう
縁起かつがぬ貧乏神と馬が合つ
哀しみの裏の縁起を掘りおこす

倉吉川柳会

松本よしえ報

真つ白い兎のような猫を抱く

一兎追ひ二兎を射止めた夢を見る

雪が降る墓標半分埋めて降る

細雪浄土の母と話す

好不況三段跳びだ兎はね

野兎の自由が欲しい主婦の日々

勝つためにトレーニングの兎跳び

流行の先取り孫に兎帽

こがらしが泣くからこちらまで寒くなる

兎から飛躍の鍵を渡される

面の皮耐寒用に二三枚

寒いので朝は起きずに昼起きる

月兎乗って帰れよロケットに

ケンカして背中も夢も寒い夜

寒椿雪の白さに紅を差す

我が小屋が御殿に見える雪化粧

いなば路にかんじき欲しい雪が降る

文明をケラケラ笑う雪しきり

遅刻した訳は人に話せない

またあいつ遅刻しながら出しやばるな

目姿で兎近眼だと思つ

寒そうに鴉かすれた声で鳴く

万歩計雪と炬燵が足を止め

こだわりを捨てたら根雪解け始め

汲香
はるお
螢

御前

秋人

季芳

雄々

小生

艶子

螢

悠子

苦句

常代

幸子

賀寿恵

(前)喜美子

(前)紀美子

民枝

智子

一夫

和歌子

ちよ子

玲坊

かつみ

よしえ

玲子

節子

朝寝坊遅刻は母のミスだ
あの世にはみんな遅刻して行こう

寒い寒い大黒柱消えた家

身の程を知って我慢の兎小屋

寒暖の差が埋まらない日も夫婦

雪洞の奥には春が棲んでいる

川柳会梨花

坂田和歌子報

ゆうびん局にうさぎの群れが押し寄せる

押し掛けた女房だから気が強い

後ろ指された女を忘れない

老夫婦むかし話を押しつける

一合の酒でも虎に化けてくる

一隅を照らすさうだけ芯はある

ゴール前虎は只今入院中

商品券くれて感謝をせよと言つ

お互いに感謝をしたくない夫婦

後からは何とでも言う負けいくさ

輪を抜けて背中にささる後ろ指

感謝して擦り切れた靴下する

つまずいて押してしまつた発車ベル

後ろ指差す指先は闇が好き

押されても押し返さねば負けになる

何ことも無い一日を感謝する

もめ事もつれしい事もあとは酒

一人去り二人去つても横車

うれしいな離婚届けに印を押す

除夜の鐘今年も聞けるなんまいだ

感謝する形で咲いた座禪草

康子

完司

石花菜

ゆり子

和枝

次男

石花菜

蟹郎

一夫

睦子

かつみ

多哥由

美恵子

(石)悦子

螢

よしえ

(前)和枝

和歌子

行男

忠良

(前)一枝

典子

正和

玲子

あき子

高栄

節子

感謝して酒一滴も無駄にせぬ

富柳会

池

森子報

携帯で彼と流れる星を見る

枯葉舞う力の限り生きぬいて

現実と夢の落差におよがされ

力より知恵と勝負のおばあちゃん

トンネルを抜けるとい母が待っている

山村留学出来た可愛い力瘤

沈黙の力思考を泳がせる

力不足で恋をとちつてばかりいる

酒の力借りる息子を叱る秋

散りどきの花は己を心得る

水琴窟聞いて快いショック

躰いた石に実力試される

居酒屋に男の憂さの忘れ物

腕ずもつ親父を越えた力こぶ

ところどころに焼け焦げがある男の譜

ライバルの気配り塩の味がする

いやな予感するから回り道をした

イントロの長さへ定年期が迫る

貧すれば何をやってもおもしろない

ゆるやかに舞っているのは私の影

線を引く不景気風は通さない

美しいハンカチで折る鶴一羽

安住の地にもかすきはたんとある

切り口が鮮やかすぎて血が出ない

気配りもほどほどでよし嫁姑

ゆつくりと師走が積る風の谷

幸子

幸子

祐子

文子

花子

冬虹

けい子

登子

アキ

昭水

紅紫朗

尽呂久

勇太

宏

美代子

三和子

義清

晴美

東雲

夕花

信博

和歌子

珠梨

欣之

信子

森子

限らない欲に戸惑う盆の窪
子を産んで母の両手の美しさ
偏差値で教師が決める希望校
四季の花絶えぬ善意の無人駅
日輪を百コ描けたら鳥になる
整形の鼻から過去を焼き捨てる
バーゲンの海で戸惑う熟女たち
地図にない坂で足踏みばかりする

川柳塔打吹

米田

幸子報

マンネリでたまに火遊びしてみた
心にも一本髪をつけて生き
完の字が水平線を浮き沈み
ひらひらと落ち葉の着地見定める
ひらひらと唇が逃げてゆく師走
完敗の溜飲下げるコップ酒
完全に冷めてしまったグッドバイ
私小説完結編も近くなる
ひらひらと恋に迷っている心
未完成作品ばかり箱に詰め
だっちゅーの新語ひらひら賞をとる
核ばかりいじってつけが跳ねてくる
ひらひらと紙吹雪舞う北酒場
完璧な理論に人がついて来ず
銀行は倒さず網で掬いあげ
言葉尻掴んで小股掬われる
ひらひらと熱い二人に雪が降る
ブランコに乗ってひらひら蝶になる
火遊びをしたこともあるお爺さん

花匠 雅城 ツネ 井蛙 黙人 花峯 一花 五楽庵

夏生 孝恵 康子 信子 克枝 松盛 一京 和枝 勝見 逸子 セツ子 たけの 順子 芳光 季芳 かつみ 富枝 睦子 よしえ

はびきの市民川柳会

安芸田泰子報

腕よりも血筋のほうが褒められる
意地悪の完結編は寝たつきり
花びらと一緒に美女が降って来た
完備した病院なのに母が近く
旅人になろうひらひら道の駅
血の出ないようにゆつくりとのんびりと
火遊びで火だるまになりさようなら
マッチが湿気ていて火遊びがでん
火遊びの匂が残るおじいさん
火遊びをするのにちようどよい月夜
火遊びに油をそそぐ叱りよう

値下りでもう省エネを忘れ果て
煙たいが無いと寂しい父の背な
リストラの友と別れの年の暮れ
裏を見て飲むくせついた缶ジュース
正直に言って笑いが止まらない
月で見るウサギの夢はどんな夢
見てるのが面倒だからラジオ聞く
聞き耳を立てた鬼の逞しさ
口論を生き甲斐にして老ベアー
この辺で年はいらぬ年となり
年輪の中にわたしがでんといふ
バス停で別れた母は泣いていた
帰省バスお国訛りにうち解ける
ふらふらと風の間にまにわが余生
私かも知れぬふらふらの影法師
あめひとつ貰って眠る腹の虫

玲子 螢 月子 一夫 完司 瑨元 石花菜 節子 幸子 天笑

晋 かつみ 昭平 俊男 敦子 専平 猿沓 二南 吐来 一壺 美代子 敏 絢子 昇 扶美代 久美子

感謝する父に貰った下根性
糠床を貰って母の味を継ぐ
お年玉貰う予算を子にはじく
貰われて行った小犬が夢に出る
ゲンコ貰う母さんの目が光ってる
石ころも孫に貰えば宝物
神様に貰った試練という重荷
相談に乗って貰って悩み増え
ライバルに貰う賛辞は果し状
貰うならハートがほしい淋しがり
母からの堪忍袋につきあてる
家族から愛を貰って縛られる
新築の木の香ローンを忘れさせ
新築にツバメも軒を借りに来る

尼崎いくしま川柳会

春城

年代報

今年こそうきうきく字はね返す
国境をうきうき翔んでゆくユーロ
出離子を聞いてうきうき独り住む
うきうきと受付嬢が退社する
寄り添ってみよ男の上り坂
いま老母は最後の坂をゆつくりと
初売りの福袋持ち駅で夢
やつと着いたほつとする駅空が青い
噴水の向こうは駅のある景色
時折りは犬も立ち寄る無人駅
無人駅月から寒い風がくる
花植えて駅長ひとりだけの駅
小さな駅のラジオから「雪の降る街」

聴 庸佑 利武 満寿蔵 ダン吉 辰子 昭子 昭子 泰子 みつこ 重人 志洋 四三郎

ヒサコ ヤス子 正子 昭三 歌子 節子 キク子 義芳 一笛 光穂 石舟 薫

終列車無口な人が降りてくる
さよならの上手な駅を知っている
初詣で社も木々も目にはえて
住所氏名抜けた賀状に初思案
毒のない新春祈の初詣で
やがて春友への台詞用意する
性格を掴んだ医師の処方箋
排気ガスめ影より黒い冬木立
反対の窓がきれいな日本海
相談をする人がいるゼラニウム
千両万両赤い実つけて老いぬべし
弟も鉄が持てるようになり
枕木のリズムに乗って里の旅
鈴ふって神様ひとりじめにする

岩美川柳会

石谷美恵子報

浮き沈み母の命は百を越す
喜劇にも悲劇にもなるほへみだ
新鮮な花に拘泥るのは男
金柑の鈴なり母はまだ元氣
一年を一度に願う鈴を振る
新鮮さ忘れぬ母の割烹着
年が明け全て新鮮だと思つ
ほへんで財布をのぞく孫の顔
人様の浮いた話はおもしろい
何が浮くだろうと石を投げてみる
ライバルのほへみ裏にある殺意
賽銭をはずめば鈴も機嫌よい
神様の本音聞くまで鈴を振る

千恵 芳子 愛 武庫坊 渉 富美子 日出男 比ろ志 紫香 澄子 年代 薫風 伊三郎 いわゑ

銭の鈴振っても過疎に嫁がない
山ひとつ越えても響く対の鈴
ほへんと甘い言葉にだまされる
新鮮なアイディアだけど机上論
鈴付けて夫を自由に歩かせる
新鮮が取り柄形にこだわらぬ
言いにくい時はほへえむ癖がある
不景氣の中大掻きで浮いている

翠洋会

児玉

厳肅な空気に遺影だけ笑顔
一人居もテレビにつられ大笑い
泣き笑い元手すれすれ値切られる
笑えないよく似た過去のある私
たくさんの兎が跳ねている賀状
福の神作り笑いに目もくれず
情報過多うさぎが耳を折りたむ
やんちゃくれに暮らす今年は回り歳
不景氣が追い風になる戎さき
油断大敵座右の銘にするうさぎ
肩書きがとれてそれからよく笑う
僕のいないところで妻はよく笑う
三年生月の兎を信じない
亀さんといまは仲よく老いの坂
すぐにやる癖をつけよううさぎ年
世渡りへうさぎの耳とトンボの眼
うさぎにもつらい試練の歳となり
うさぎより亀でゆきます何事も
ためしにも出来なくなつたうさぎ跳び

單車 睦子 春枝 公乃 節江 芳江 裕子 美恵子 蛙報 蛙 正雄 久峰 綾子 さと美 靖巳 佳秋 蕉舟 石舟 周信 義 千歩 英壬子 楓春 楓楽 日の出 舞夢 伽羅

ひとり居もマンガで笑う声出して
わからぬが皆笑うので笑つてこ
元氣百倍うさぎの妻と手をつなぐ
昼寝すき兎飲んでる強壯剤
ふる里は月の世界でなくうさぎ
赤ん坊笑えば皆の輪がゆれる
夫婦の家賑やかになる福笑い
戦時中防寒服は皆うさぎ
兎追う暮らし夢見た都会つ子
薄笑いたライバルを忘れない
税務署が笑つと恐いことになる

横浜あおば川柳会

菱田

満秋報

切り取った集合写真セピア色
喜怒哀楽神様からの時間割
十円の汗が重たい時間給
同郷と知り商談もうまくいき
ありすぎる時間がなぜか焦らされる
負け犬の悔しさ見せず美辞麗句
子の話ばかりで集うティタイム
コート脱がて大寒のボカボカ陽氣
誘われてみたい氣がするあの人に
時間との闘い生きている証拠
すんなりと慰謝料が出る浮気沙汰
祝辞とは名ばかり自社のピーアール
孫生れすんなり同居決められる
秘書が書き代理が読んでいる祝辞
すんなりと解けた答を疑われ
深まつた秋に舞いこむ招待状

千枝子 喜美子 絹子 照子 千梢 叡子 真砂 東雲 会美 澄子 鬼遊 芳江 八重子 見早子 広和 かつ子 のぶ子 かず枝 土風 サト子 街湖 和可 純子 鈴美 亜希子 早智

右左ジャンケンボンの世話になる
イライラを灰皿に盛る待ちぼうけ
遊ぼうと昨日泣かした子が誘う
慇懃な祝辞だけれども聞いてない
世界遺産へ逆回りする時計
定年の祝辞に愛が盛りこまれ
給食の時間が好きなランドセル
棟梁のお茶の時間も手間のうち
それなりの褒め方もある披露宴
最高の祝辞とびかう金屏風
二時間のドラマ虚構に遊ばせる
砂時計余分な刻は計らない

かわはら川柳会

上田

俊路報

句多留 良子 あらた 絹子 充子 笑子 雅子 徳三 嘉信 道子 潮華 満秋

老い二人師走の策がみつからぬ
年末ジャンボ高嶺の花にまた挑む
気ぜわしい師走炬燵が誘いこむ
来る年にちよつぱり期待もつ師走
締めなおす財布師走をかけぬける
催促をするもされるも師走まで
不況風師走の街をかけ巡る
うぬばれもいじやないのか生きるため
クラス会若くみられてうぬばれる
うぬばれが不似合いの鼻高くする

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

英子 ちよえ 鈴江

あがる風呂にくい下界をみせておく
血圧があがった話で吞んでおり
こころぎが鳴いてる私も泣きたい時もある
ワルツでもジャズでもないよかたつむり
乱高下一円玉も気が抜けぬ
しあわせは毎日おんなじ白い飯
毎日の仕事事をのんびり
好きだから毎日毎日そばにいて

堺川柳会

河内

月子報

はるみ かつ子 聖子 恵美子 好栄 博利 清泉 白汀 春蘭 楓 伽羅 舞夢 日の出 扶美代 ちや子 洞庵 健吾 美代子 千代 みつこ りつこ 紀美女 小雪 勇太 哲平 昭子

おしゃべりと無口でうまが合う出会い
み仏が聞いてたらしい捨台詞
一億分の一の出会いが夫です
天に向かって真つ直ぐのびる立身伝
三叉路で会ったもう一人のわたし
血の騒ぐ男と出会う曲り角
低空をまだへりが飛ぶ罹災地にもひとり私の私が重いので捨てる
強烈な出会い強烈な別れ
捨ててきた過去がわたしの離さない

ローズ川柳会

山崎

君子報

満州 かりん 泰子 金三郎 冬虹 アキ 春 喜代子 寿美 てる ミサヲ キク子 藍 哲子 トミエ 貴代子 澄子 澄子 いわゑ 武庫坊 年代 はつ絵 民平 君子 義子 笑女

3 月 各 地 句 会 案 内

(五十音順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
尼 崎 いくしま	5 日(金)午後 1 時から 池・童話・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩 5 分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
尼 崎 尾 浜 川 柳 会	9 日(火)午後 1 時から 笑 い・別 れ・自由吟	尼崎市尾浜公民館 阪急武庫之荘南口から 市バス④番尾浜 2 丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江 5-2-47 田辺鹿太
岸 和 田 川 柳 会	22 日(月・振替休) 午後 1 時半から 唸る・笑くば・重荷・稼ぐ	市立福祉総合センター 2F 南海線岸和田駅東歩 3 分 〒596-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
京 都 塔 の 会	25 日(木)午後 1 時から 炊く・図・どうぞ	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札東出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
堺川柳会	11 日(木)午後 1 時から みごと(折句)・ 欲(共選)・遅れる	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅役所西入る 〒593-8305 堺市堀上緑町 2-16-3 河内天笑
川 柳 会 梨 花	27 日(土)午後 1 時から ノート・増える・夢・雑詠	鳥取勤労者総合福祉センター 1F 会議室 (鳥取駅南) 〒680-0044 鳥取市御弓町40-3宮木方 坂田和歌子
川柳クラブ わたの花	26 日(金)午前 10 時から 塩・返す・牡丹	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
川 柳 塔 打 吹	13 日(土)午後 1 時から ずかずか・粋(いき)・あてがう	倉吉市上灘町上灘公民館 〒682-0805 倉吉市南昭和町21 野口節子
川 柳 塔 唐津支部	7 日(日)午後 1 時半から 面・備える・いよいよ	唐津市栄町公民館 〒847-0082 唐津市和多田天満町1-2-13 仁部四郎
川 柳 塔 な ら	4 日(木)午後 2 時から 親友・旗・手だて	船橋フロムワン(船橋商店街内) 近鉄奈良駅西・JR 奈良駅北歩10分 〒636-0144 奈良県生駒郡斑鳩町稲葉西2-4-23 中原比呂志
川 柳 塔 ふ く べ	27 日(土)午後 1 時から 仕込む・猫・約束・ 卒業・「迷惑」	福部村中央公民館 2F 研修室 〒689-0115 鳥取県岩美郡福部村細川16-3 村上信子
川 柳 塔 ま つ え	13 日(土)午後 1 時半から 駅・機嫌・春	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0859 松江市国屋町381 竹内すみこ
川 柳 塔 みぞくち	22 日(月・振替休) 午後 7 時半から あらし・雀	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3 小西雄々

★日時・会場などが変更になる場合は、高須賀金太(0724-43-4889)へご連絡ください。

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 みちのく	6日(土)午後4時から チャンス・出る・ぎらぎら	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ二階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵
川 柳 塔 わかやま	14日(日)午後1時から 肩・真似・短い・「受付」	近鉄カルチャーセンター 2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
川 柳 ねやがわ	28日(日) 正 午 から 自信・そろそろ・ ジョギング・自由吟	寝屋川市立総合センター 4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川 柳 ふうもん 吟 社	28日(日)午後1時から もう遅い・ボロボロ・鼻	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
高槻川柳 サークル 卯 の 花	18日(木) 正 午 から 度胸・スタイル・勘違い ・ぴったり・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島凜云児
西宮北口 川 柳 会	8日(月)午後1時から 両方・謝る・騒がしい・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩5分 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
はびきの 市 民 会 川 柳 会	28日(日)午後1時から エネルギー・竿・動く・「尻尾」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
東大阪市 川 柳 同 好 会	27日(土)午後6時から 違い・はったり・釘・生命	東大阪市立社会教育センター2F 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
富 柳 会	6日(土)午後1時から 秘・ゲーム・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
ほたる 川 柳 同 好 会	9日(火)午後1時から 時計・ほめる・女	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール蛍池駅西へ150米 〒560-0033 豊中市蛍池中町3-10-28 井上直次
岬川柳会	21日(日)午後1時半から ポケット(互選)・ あっさり・思い出	岬町淡輪公民館 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
南 大 阪 川 柳 会	24日(水)午後6時から 引き出し・秘伝・一山・悲運	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
もくせい 川 柳 会	15日(月)午後1時から 女神・ハードル・ 乏しい・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊
八尾市民 川 柳 会	10日(水)午後6時から 香・吹く・桜・コップ	八尾市文化会館4F 近鉄八尾駅東へすぐ 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子

柳界展覧

大阪川柳の会

とき 4月2日(金) 17時開場 ところ サンケイビル本館3階322号室 題と選者 投げける・山本翠公△手術・坂本須磨代△芽・阿萬萬的△さかさま・磯野いさむ 各題2句 席題なし 会費 800円 18時締切 各題秀句に産経新聞社賞

★1月27日、薫風主幹と路

郎先生の四女・西村梨里さ

んが路郎先生の出生地尾道

市を訪れた。「麻生路郎と

川柳展」を観賞後、亀田市

長と面談、句碑の建立を提

案、出身地尾道での先生の

顕彰を要望した。

★12月13日、出雲市高松公

民館で行われた久家代仕男

氏句碑建立記念句会の本社

同人の秀句は次のとおり。

自分史のひとつま手帳に

ある事実 林 瑞枝

哀しみを知る合掌は崩さ

ない 松本 文子

煩惱の上にお灸をすえて

いる 原 章峰

★西宮北口川柳会は1月12

日、平成10年度年間賞を表

彰した。最優秀賞に小池し

げお氏、優秀賞は①川島颯

云児②門谷たす子③小池し

げお・西口いわる⑤住谷石

舟の各氏。

★川柳サークル卯の花は平

成10年度年間優秀賞を1月

句会で表彰した。①川島颯

云児②山本礫③小池しげお

④石原靖巳⑤笠嶋恵美子・

久保田恵美子の各氏。

★川柳塔わかやま吟社の平

成10年度各賞が決定、2月

14日の句会で表彰した。

〈葵水賞〉

命あるものにやれない落

点 桑野 昌子

〈あおい賞〉

接近をしすぎて火傷ばかり

する 福本 英子

■1月24日、薫風主幹と岳

人副理事長は神戸ハーバー

ランドニューオータニの時

実新子会句集出版記念祝賀

会に出席。

■1月28日、薫風主幹は三

井アーバンホテル大阪ベイ

タワーで開かれた「五七五

を楽しむー織田正吉の川柳

論VS坪内稔典の俳句論」

のトークの会に出席。

■1月29日、ホテル大阪ニ

ューオータニで開かれた上

方芸能誌創刊三十周年記念

パーティーに直原玉青画伯

薫風主幹・塩満敏氏が出席。

■2月21日、香川県白鳥公

民館の木村あきら氏叙勲記

念句会にお話・薫風主幹、

選者・天笑理事長と楓葉副

理事長ほか同人数が参加

■田辺聖子さんの「道頓堀

の雨に別れて以来なり」の

りばめたエッセイ集 B6

新同人紹介

中 後 清 史

太茂津・緑良・大輪推薦

。先月号の山本吉蔵氏は本名で雅号は蛙城でした。訂正してお詫びします。

第50回読売文学賞(評論・伝記賞)贈賞式と記念パーティーが2月22日、東京パレスホテルで開かれ、薫風主幹は出席のため上京。

出版

■薫風主幹は句集『師弟』

麻生路郎・橘高薫風を発売

四六判・一二二ページ・定

価一五〇〇円・葉文館出版

■野村太茂津相談役は筆名

法岸寺竜太として「点滴」

一わが川柳人生で大切に思

うことつれづれにーを発売

「我も人・彼も人」など一

三一章に川柳数句ずつをち

判上製本・三九〇頁・文芸書房刊。定価一八〇〇円。

判・二〇八ページ・序文小島蘭幸・定価二〇〇〇円。

から75周年記念大会に金一封を拝受。

■川上大輪・富湖夫妻は川柳句集『二重奏(デュエット)』を発刊。四六判上製本・二四六ページ・序文橘高薫風・跋文牛尾緑良・頒価二〇〇〇円・葉文館出版。

▽御芳志御礼△

▼計報▲

■森井善居氏は、川柳句集『愛すれば』を発刊。四六

■奥田みつ子さん(西宮市)から句集発刊記念として金一封を拝受。

■吉岡政雄氏(同人吉岡きみえさんの夫君・出雲市)は1月7日、病氣のため死去、75歳。

■麻生アート氏(生駒市)

から句集発刊記念として金一封を拝受。

■内芝登志代さん(元同人和歌山市)は2月8日、病氣のため死去、84歳。

判上製本・三九〇頁・文芸書房刊。定価一八〇〇円。

判・二〇八ページ・序文小島蘭幸・定価二〇〇〇円。

から75周年記念大会に金一封を拝受。

■川上大輪・富湖夫妻は川柳句集『二重奏(デュエット)』を発刊。四六判上製本・二四六ページ・序文橘高薫風・跋文牛尾緑良・頒価二〇〇〇円・葉文館出版。

■奥田みつ子さん(西宮市)から句集発刊記念として金一封を拝受。

■吉岡政雄氏(同人吉岡きみえさんの夫君・出雲市)は1月7日、病氣のため死去、75歳。

■森井善居氏は、川柳句集『愛すれば』を発刊。四六

■奥田みつ子さん(西宮市)から句集発刊記念として金一封を拝受。

■吉岡政雄氏(同人吉岡きみえさんの夫君・出雲市)は1月7日、病氣のため死去、75歳。

■麻生アート氏(生駒市)

から句集発刊記念として金一封を拝受。

■内芝登志代さん(元同人和歌山市)は2月8日、病氣のため死去、84歳。

この一句

風のいとこのばしてかぜにさからわず

茗人

いろいろな秀句がある中で、やはり一番私の印象に残っているのは亡父茗人の句である。平凡なようで、風以外すべてひらがなで作られている句であるが、そこには人生観があり私達に教えているものがあると思っている。

川柳を愛し「川柳の鬼」とさえ言われていた父の作品にふさわしい句と思う。

風を大空高く飛ばすには、風の向きを考えて無心でなくてはならない。無欲でなくてはならない。このことは作句の上でも言えることではないだろうか。

私も欲を捨てて人生風にまかせてみたいと思っている。だから平凡なようでも好きな句である。句を詠むには無欲でなくてはならない。この句で抜けてやろうなどと邪心が入ってはならない。そういうえば風を飛ばす広場も少なくなつた。

毎年、父の亡くなった前後の日曜日に川柳大会を催しているが、今年で二十三回となる。その句碑は倉吉に建っていたが、今は私の家の庭に建っていて、毎日父を偲んでいる。

(森田 熊生)

平成10年度年間賞発表

'99ふあうすと70周年記念川柳大会

とき 4月18日(日) 午前10時開場

ところ 兵庫県民会館9Fホール

神戸市中央区下山手通4-16-3

宿題 (JR元町駅・阪神元町駅から徒歩7分)

「糸」 中野千秋選

「さくら」 西川けんじ選

「つかむ」 岸下吉秋選

「ゆつくり」 西山金悦選

「駅」 鷹野青鳥選

「夕映え」 吉原辰寿選

「生」 橘高薫風選

「読む」 磯野いさむ選

「熱」 小松原爽介選

事前投句 「妻」(参加用紙にて受付) 藤本静港子選

席題なし・各題2句・欠席投句拝辞・締切11時30分

会費 2000円(記念品・昼食・発表誌呈)

◎主幹藤本静港子句集『うたかたの抄』発売予定

懇親宴(午後5時~7時) 7000円当日受付

付 651333 神戸市北区東大池3-13-2 赤松隆男宛

〒133 TEL(078) 981-8052

(参加用紙でお申込み願います)

ふあうすと川柳社

編集後記

★二月号の「ひとこと」欄に共感したのでという投稿をいただいた。それも含めて私の感じたことは……

★「全没の方の句を抜くように努力した」と選者が言われるのは、全没の人に対する励ましであり、言葉の綾にすぎない。句箋を見て誰の句が分かるはずもなく

まして、その日の全没の人の句などとても分かるものではない。仮に分かったとしても選者は選者の見識・良心で選をしているので、自らそれを無視するようなことは考えられない。この言葉も冷静に聞けばジョークだと分かることで、何事も余裕をもって判断したいものと自分に言っている。

★「踏みならされた道ではない未知の森の道へ入って

「ごらん」とノーベル賞受賞者・江崎玲於奈さんの言葉がラジオから流れた。いつも同じ道ばかり歩き、未知の森の道に関心はありながらも、不安が先に立って足を踏みこめない。年を重ねると尚更のことである。

★フランスの思想家ルソーの言葉に「十歳にしては菓子に動かされ、二十歳にしては恋人に、三十歳にしては野

心、五十歳にして食欲に動かされる。いつになったら人間は、ただ叡智のみを追って進むようになるのであろうか」とあった。六十歳になったら、どうやら淋しさ・孤独に動かされるのではないだろうか。

★とりとめのない事を考えていたら、もう三月、二十日の七十五周年記念大会には一人でも多くの御参加をお待ち申し上げます。(み)

ひとこと

ひなまつり

そのころ伏見に酒蔵がどれほどあったろうか。『金鶏正宗』の蔵が同じ町内にあって、屈強な酒男達が素足で行き来していた。酒造りの唄が聞こえてくる頃、伏見の町は寒のどん底である。蔵男達は

招かれた。離壇は雅やかに広い部屋のまん中を占め、白酒、お菓子

大八車で酒粕を町内に振舞って歩いた。

ひなまつりであった。今のわが家には夫の祖母の内裏

▼前回(昨年12月号)の文

について、Mさんから質問を受けた。それは「あんたが最高や言うてんのは、何とちゅう会社

杜氏さんは、所属蔵を替わられたようで、ここ何年かは岡山・山陽町の「櫻室町」を頂戴している。

？と聞かれたのである。

▼愛知県の酒で知っているのは、純粹日本酒協会加盟

度あり、山吹色でとろっと粘りけがあつて、飲めばほんわかほんわか、正に「酒とろり」とりり大空のこころ

全く覚えてなくて、答えられなかった。ただ愛知県というのは記憶していたのだ

夫氏の実家の「ねのひ」、中

かも」の境地であつた。現在市販の酒のほとんどが、活性炭による脱色で、無色

が……。

▼いい酒に出会ったときは必ずメモを取るようにして

だことはない。その後この透明である。(金)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

」 発表（5月号）

地名

雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

作品募集

初歩教室

課題吟
(3句)

「備える」
「いよいよ」
「面」

吐田公一担当

石井橋
原齋本
靖一多
巳齋由
選選選

茴香の花
(3句)

西八河橋
出木内高
楓千天薫
楽代笑風
選選選

水煙抄
(8句)

河内高
天薫
笑風
選選選

川柳塔
(8句)

橋高薫
笑風
選選選

5月号発表 (3月15日締切)

6月号

課題吟 「ガラス」「休む」
「釘」

初歩教室「迷惑」

第23回 全日本川柳秋田大会

とき 6月13日(日) 午前10時開場

ところ サンプルール大潟

秋田県南秋田郡大潟村北1-3

宿題第1部(事前投句5月10日締切)

「待つ」 井原みつ子選
「再会」 植木利衛選
「習う」 竹森雀舎選

宿題第2部(当日投句11時30分締切)

「写真」 佐藤美文選
「深い」 青木晴嵐選
「茶碗」 田中八洲志選
「招待」 波多野五楽庵選

各題2句、各部各題とも未発表に限る。

詳細は来月号に掲載。

本社4月句会 7日(水) 予定

兼題 「会う」「トランプ」「鏡」
「茶」「遍路」

夜市川柳募集

第10回「洗う」 外山あきら選

ハガキに3句 3月末締切

投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3

河内天笑方 堺川柳会

定価 六百元(送料76円)

半年分 四千元(送料共)

一年分 七千九百元(同)

平成十一年三月一日発行

編集兼 発行人 橋高薫

印刷所 美研アート

〒545-0005

大阪市阿倍野区三好町二丁目一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話(06)691-194番

振替〇〇九八〇一五二二六八番

「川柳塔」への投句について

(1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。

(2) 水煙抄・茴香の花欄・一路集(課題吟)および初歩教室への投句は、同人・誌友に限り、川柳塔柳箋を使用してください。ただし茴香の花欄は女性だけ。

(3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。

(4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

句集	師弟	麻生 橘高	路郎 薫風	近日刊行	予価 1,500円
川柳句集	地球の塵	黒川	紫香	最新刊	定価 2,000円
川柳句集	デュエット 二重奏	川上	大輪 富湖	最新刊	定価 2,000円
川柳句集	しまなみ	月原	宵明	近日刊行	予価 1,500円
川柳句集	愛すれば	森井	菁居	近日刊行	予価 2,000円
川柳句集	椿 守	八木	千代	近日刊行	
川柳カタカナ語辞典		田中	正坊 編	近日刊行	

あなたの作品を一冊の本にしませんか

作品の整理などは不要です。柳誌などのまま葉文館にお送りください。
納本まで全てお手伝い致します。出版に関する資料のご請求は右記まで。

●お申し込みは
葉文館出版

大阪市浪速区恵美須西
2-8-11 〒556-0003
TEL 06-6634-5548(代)
FAX 06-6643-4431
e-mail
yobunkan@kk.ij4u.or.jp

奥田みつ子
川柳句集

白い梅

橘高薫風・黒川紫香序文
B6判・224頁・布装上製本
頒価 1000円

◎お申し込みは川柳塔社事務所へ

春風に可愛い嘘の二つ三つ
空調の音がすかなり美術展
ああ夫婦おんなじ時に胃が痛む
父の部屋忍の一字が掛けてあり
母よりもだんだん姑に似る仕草
一月十七日ひたすらに忘れたし
白梅と向き合ういのち誕生日
夕日美しきつと楽しい明日になる

〒545-0005

発行所
川柳塔社
大阪市阿倍野区三木町二一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室
電話 〇六・六六二九・六九一四番